

庄

内

第14号

庄内の昔を語る会



庄内町東区の熊襲踊

表紙写真説明

庄内町東区の熊襲踊

(一説) 景行天皇の命により小碓命オスス(日本武尊ヤマトノミコ)はこの地方で暴威を振り住民を苦しめる熊襲の首領川上梟師ウケルを退治しました。この時住民達はこれを喜びそこに有ったバラや鋤等を叩いて踊り回りました。踊りはその時の農民の喜びの姿を表現したものです。

庄内町東区に伝承されており、県無形民俗文化財に指定されています。踊り会は、現在会員二十一名、保存会長は大川原紀美生氏、踊り会々長丸目辰夫氏。毎年十一月二十八日庄内町諏訪神社秋の例祭で奉納されます。

巻頭言

庄内の昔を語る会 会長 坂元徳郎

「庄内の昔」を執筆寄稿して下さる方々が、年々減少していく中で、「定期継続刊行」を果たす意義と、その至難さをつくづく実感しながら、今年も何とか皆さんの机上に「庄内十四号」をお届けする事が出来ましてホッとしております。どうぞお目通しください。

寄稿者の皆さん、本当に有り難うございました。心から厚くお礼を申し上げます。

また、本会の運営、特に会誌「庄内」の刊行に関して、かねてからご指導ご叱正、またご激励を賜っています先輩諸氏に衷心より感謝申し上げます。

さて、世界的に騒々しい昨今でございます。ふるさとを追われ、あてもなく彷徨う民族、親族の離散死別、拉致、虐殺等々私どもの想像を絶する悲惨な出来事が報道されていますが誠に切歯に堪えない所でございます。難しい事は解りませんが、これがお互い同じ人間同士の欲望に端を発する事に思いを致す時、身の凍る思いが致します。改めて人類の融和について考えさせられる今日この頃でございます。

先祖を敬う心、ふるさとを想う気持、子供時代を懐古する情は、生きとし生けるもの誰しも変わらないものと思えますし、ましてや、庄内に生まれ育った事を誇りとする私たちは人一倍その思いは強いものと思えます。私たちは、その同じ思いを会の基盤として、会誌「庄内」の継続刊行と更なる充実に努めたいと思っていますので今後ともご支援ご協力を宜しくお願い致します。

平成十四年十一月吉日

目次

巻頭言	……………	会長	坂元徳郎	1
特別寄稿	……………			
庄内の印象	……………	都城警察署 庄内駐在所	谷川良隆	1
歴史・史料	……………			
諏訪神社祭礼における安永外城の人々の役割	……………	町区(都城市市史編さん室)	山下真一	3
乙房小学校の沿革 近代学校制度の成立の中で	……………	乙房町(都城市市史編さん室)	武田浩明	5
明治三十三年度の庄内村議会議事録から	……………		坂元徳郎	9
庄内小学校の奉護日誌	……………		山下謙二郎	19
史跡探訪(その十三)	……………	東区	坂元徳郎	23
庄内町情報	……………			
宮崎「庄内会」から	……………	庄内会会長(西区)	牧ノ瀬正雄	26
庄内地区公民館活動の現状	……………	庄内地区公民館副館長	瀬之口周造	27
学校便り	……………			
庄内小学校	……………	校長	福留稔	29
菓子野小学校	……………	教頭	別府一男	31
乙房小学校	……………	教頭	日高啓子	33
庄内中学校	……………	教頭	澁谷武範	36
随想・追憶	……………			
「庄内・13号」によせて	……………	鷹尾	得能哲夫	39
庄内小学校の想い出	……………	茅ヶ崎市	萬代久男	44
小学校時代の想い出(二)	……………	鷹尾	福村静徳	46

学徒勤労働員の思い出 東区 山元哲朗 51

終戦後の庄内小の思い出 大王町 吉川一郎 52

鍋釜に思いを寄せて 川崎 前畑文利 55

父の言葉を生かしたい さいたま市 馬籠京子 56

俳句 61

平田 高橋 かおり 祝吉町 前田 茉莉子 平田 平田 ミチ

西区 清水 たつ子 町区 山元 マス子 祝吉町 宮田 安子

鷹尾 菓子野 康子 菓子野 長岡 昭光 祝吉町 前田 みづえ

東区 内野 かね 西区 蒲生 敏子 祝吉町 前田 みづえ

子や孫に語り伝える話 妻ヶ丘町 瀬戸山 計佐儀 63

三島地頭の逸話など 西区 清水 省三 70

戦時下の中学校生活 東区 大川原 紀美生 75

庄内の風俗あれこれ 町区 鎌田 学 82

母の自伝より 宮崎市 牧ノ瀬 正雄 87

戦争・学徒出陣・従兄弟の戦死 平塚町 山元 正三郎 89

童唄（わらべ唄） 思い出すまゝに 宮島 内村 成良 91

内村直左衛門（初代横市尋常小学校校長）の持ち物が教えてくれるもの 西区 乙守 保正 94

西区の自慢・南洲神社 姫城町 湯前 隆一 96

蔵満十助のこと 「しょけ」と「いおすく」の思い出 川崎 福村 修 98

頓智甚エ門小話 川崎 前畑 文利 100

野鳥交遊録 宮崎市 坂元 守雄 102

事務局便り 事務局 108

ここ一年の歩み 事務局 108

史跡探訪「庄内十二外城」めぐり 大隅、末吉、財部の城を中心に …… 西区 長峰良文 ……
飫肥・日南方面史跡探訪 …… 東区 帖佐ミヤ ……

編集後記 ……

平成十四年度 会員名簿 ……

表紙題字 (故)大河内 浩 爾

特別寄稿

庄内の印象

都城警察署 庄内駐在所 谷川良隆

私が庄内駐在所に赴任して約一年半、庄内住民の仲間入りをさせていただいて約一年が過ぎようとしています。これまで私は、警察音楽隊に所属していたために、新任時代の約三年間を延岡市で過ごしたほかは、すべて宮崎市内で勤務して参りました。昨年春の定期異動で、都城警察署庄内駐在所への転勤を命ぜられた時、かつて庄内交番（当時は三交代制の交番だったこと）に勤務したことのある後輩からは、この庄内について「事件・事故の少ない平和な町」との説明を受けました。また、私が着任に先立ち、先任者への挨拶がてらに立ち寄った際にも、緑の多い静かな町との印象を受けています。

ところが、既に御存知の方もおられると思いますが、私が庄

内駐在所に着任し、勤務を開始した初日、付近住民の方々から、同一の素行不良者に対する苦情や相談を続けて受理しました。そして、その問題をどう解決していかうかと考えていた矢先、凶器を手にした問題の素行不良者が駐在所を襲撃し、私に殴りかかってくるという事案が発生しました。何で襲われたのか、その理由もはっきりしないまま、その男は公務執行妨害の現行犯として逮捕しましたが、更にその後、一カ月の間に七件もの空き巣狙い事件が連続して発生し、その解決に苦慮するなど、さすがにその時の私は「とんでもない所に来てしまったのでは…」と、最悪の印象を持ってしまいました。

しかし、それから約一年余り、事件・事故等の発生も次第に収まり、平穏な日常勤務を送れるようになり、また、公民館長さんや民生児童委員の皆さん、交通安全協会や少年補導員の皆さん等、地元で活動しておられる方々を知るに従い、そして、いろいろな地域の行事にお誘いいただき、その催しに参加するに従って、本当の庄内の姿が見えてきたような気がします。庄内の皆さんは、各種の地域団体に積極的に参加し、その集合団体である地区社会教育関係団体等連絡協議会を中心に、都城市民憲章を誠実に実践して、住み良い町作りのため、本当に一生懸命活動しておられます。全く頭の下がる思いです。高齢者を大

切にし、また、高齢者の皆さんが活動的なのも素晴らしいですね。教育水準も高く、多くの偉人を輩出しています。また、安永城や前田用水路を初めとする史跡も多く、それを誇りとして大切に守り、伝統行事の継承にも努めておられます。この機関誌「庄内」にも多くの文化や史跡が紹介されていますが、今後は私も多くの史跡を訪ね、人を知り、皆さんと共に更に住み良い、安全な町づくりのため、精一杯努力して参りたいと考えております。今後とも、何卒ご支援ご協力の際、よろしくお願いいたします。



歴史・史料

諏訪神社祭礼における

安永外城の人々の役割

町区 山下 真一

(都城市市史編さん室)

本誌第十一号に「近世の安永諏訪神社祭礼について」と題して拙文を掲載させていただきましたが、そのときには、祭礼に携わる人々の役割等については詳しく触れることができませんでした。そこで、今回は、祭礼時における安永外城の人々^{とじょう}現在の庄内地区に暮らしていた人々の役割について、都城領主島津久倫^{ひさとも}が直接参詣を行った、天明元年（一七八一）の時の様子をもとに紹介します。

近世の領民の心意的支配のために行われていた諏訪神社祭礼は、例年旧暦七月二十八日に開催されてきました。今回は、領主が直接参詣するということで、その準備は早くから慎重に行

われています。

まず、これまで領主が直接参詣したときの記録を、家老の補佐役の用人^{ようじん}であり、都城領の公文書を扱う「記録方」という役所の係りも兼務していた、津曲崇左衛門という人物が調査しています。その結果、領主は四月十五日以降は穢^{けが}れに触れないようにすることになりました。

具体的に祭礼の準備に取りかかるのは、七月十三日からでした。この日に安永（現在の庄内地区）の正祝子^{しょうしゅこ}が、「都城普請方」という役所に訪れて、鍛冶屋へ注連卸を行います。これは神事にあたって祭礼の準備にかかわる場所を清め、清浄な場所にする儀式です。

十七日には、神事の時に贅棚^{えだな}の御肴として使う魚類を、台所役一人・腕役^{わでやく}一人とともに、安永衆中二人と今屋門の乙名一人が買い入れて、都城本町の部当^{べどう}宅に持って行きます。この御肴の代銀は安永の社人である早田・平山両家から受け取っています。なお、今屋門の「乙名^{おとな}」とあるのは、農民の単位である門のリーダー^{みょうとう}と考えられます。また「部当」とは、町場の責任者で、武士身分の人が就任する役職でした。この御肴を祭礼当日に贅棚にかけるのは、今屋門農民の役割でした。

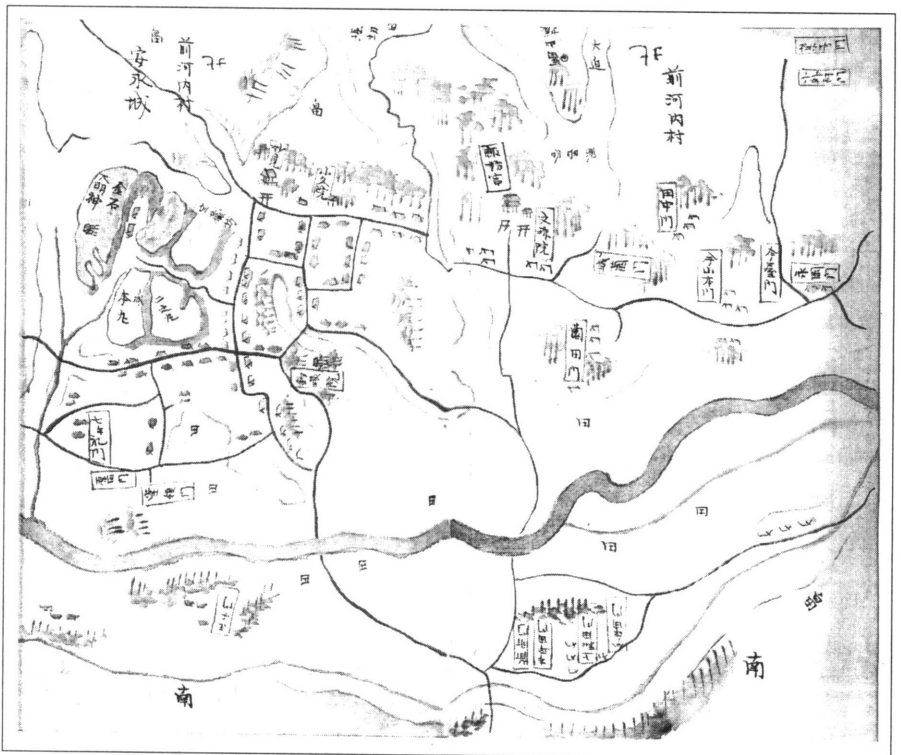
二十日には、安永正祝子が奥御書院^{おくごしょいん}という役所の入口・下門・

東御門、御近習所大戸口に注連卸を行い清めます。また、神馬方既役の山下甚左衛門という人に御広間で酒を振舞い、諸所を注連卸で清めた後に、安永社人の三人（買物役早田・平山両家と今屋門の農民一人）に「御台所」で一汁一菜の料理が賄われています。

二十三日には、安永の阿久井家御蔵から、祭礼当日行われる相撲の参加者への商品として下賜される布二反が、安永権祝子へ渡されます。

二十五日になると、領主たちが祭礼見物を行うための棧敷が、今屋門の人たちによって造られ、祝子用の棧敷が前川内村畠中門の人々らによって造られます。また、農民身分の人の棧敷も七牟礼門の人たちによって造られるのです。このように祭り見物の棧敷は身分によって分けて設けられました。この日はさらに、都城領主が諏訪神社参詣のために通る道筋の整備も行われ、今平田門・本平田門・和田門・満永門の人々が担当しました。そして、御供所二間を益留門・宮島門・園田門・上園門の人々が造るのです。このように二十五日には祭礼本番に向けて多くの準備が行われる日であり、諏訪神社のある現在の庄内地区の人々が深くかかわっていたということをうかがい知ることができます。

いよいよ祭礼当日になると、未明から安永社人が、領主参詣



出典「庄内地理志」巻七十四（都城市立図書館所蔵本）

の通路筋を清め、領主のお越しを待ちます。朝六つ時（午前六時）に都城を出発した、総勢二百六十人に及ぶ領主島津久倫の

行列は、朝五つ時（午前八時）に安永祝子宅に入り、食事をとるなどして一時休憩します。ここで安永外城の責任者である地頭の北郷彦衛門がやってきます。休憩を終えた領主がいよいよ神社に到着すると、領主棧敷を安永衆中三十人が袴着用で警護します。領主はここで祭礼行事を、飲食しながら見物するのです。

まず、行われるのが相撲でした。相撲は松元門・前田門・徳益門・志比田門・今屋門・外今屋門・平山門の七門の農民が隔年交代で行うもので、今回は徳益門・志比田門・平山門の三門の農民によって行われ、勝者には布二反が下賜されることになっていました。このように勝者には賞品が領主から下賜されるのですから相撲は大いに盛り上がったことと想像されます。

相撲の後には流鏑馬が行われます。その参加者は事前に体を清めて参加しました。流鏑馬の道具は安永地頭と亀沢家から出されます。流鏑馬終了後、祭りに参加した人には酒が振舞われ、大いに賑わいました。

この祭礼は領主側主導の祭りで、多くの人々が動員される大掛かりなものでした。領主と領民が鹿兒島の分神で、都城の鎮守である諏訪神社を参詣し、祭りをを行うことを通して、領民を統合する機能を有していたのです。安永外城の人々は、その神社を持つ住民として、祭礼に大きな役割を果たしていました。

乙房小学校の沿革

近代学校制度の成立の中で

乙房町 武田 浩明

（都城市市史編さん室）

一 はじめに

明治五年（一八七二）八月、わが国の近代学校制度に関する最初の基本法令である「学制」が發布されました。

学制は全国を八大学区（六年四月に七大学区に改編）に区分し、さらに一大学区を三十二中学区、一中学区を二百十小学区に分け、それぞれに一小学校を設置するものとしています。しかし、これは人口六〇〇人に一校の割合で、全国に五万三七六〇の小学校を設けるプランであり、当時の社会事情ではほとんど不可能でありました。実際、明治六年（一八七三）の小学校数は一万二五九七校で、就学率は二八・一三パーセントに過ぎませんでした。その後、明治十一年（一八七八）には二万六五四校で、ほぼ半分の達成率、就学率も四一・三パーセントと次第に増加し、教育環境も整備されてきた明治四十年（一九〇七）には二万七一二五校と小学校の数はあまり変わりませんが、

就学率はほぼ一〇〇パーセントと驚異的数字になります。

そこで本稿では、近代学校制度が地域にどのように普及していったかを紹介し、筆者の母校である乙房小学校の沿革について調べてみたいと思います。

二 都城県の教育施策

明治四年（一八七二）十一月、改置府県により都城県が成立し、参事に桂久武が任命されます。

桂は翌年二月十七日に都城に到着し、翌十八日に旧会議所に県庁を開庁すると同時に県政の三大方針を布告しました。そしてその第二に「学業ヲ勉励シ人材ヲ可教育事」と教育の振興を掲げ、明治五年四月十一日の都城県小学校（のち小学館と改称）の開校をはじめとし、県下全般にわたって郷校を設立して、小学館を中心とした組織化を積極的にすすめました。

ところで都城県教育に関連する史料が収録されている『小学館一卷』で確認できる郷校は、都城県庁下郷校が九校、都城県郷校が三十四校です。また、明治六年二月三日付の文書で、長田郷校を都城県第七十郷校としたことが確認できます。ちなみに、庄内郷校ははじめ二十一郷校でありましたが、のちに庁下第四郷校に改称しております。

三 初期宮崎県の教育

明治六年（一八七三）一月十五日に日向国一円をもって宮崎県を設置する布告が出され都城県は廃されます。

新しく設置された宮崎県は、三月に「文部省ノ御規則ニ依リ郷学ヲ興立シ人材ヲ教育シ日々文明ノ域ニ赴カシム可シ」と教育の普及に努力すべき旨を布達しました。小学館へは「旧都城県内当県所轄、各郷校ノ義従前通り管轄致シ、教官時々巡視シ厚ク訓導行届キ候様一層勉励致スベキ事」と小学館を中核とした教育の継続を布達しています。

また、八月には郷校等の課業等を「御規則通改正」するよう布達し、小学開設に向けての準備をすすめました。この結果、明治八年（一八七五）三月十七日の調査によると、県内には三百三十の小学校（生徒壹万六千九百一人、教員六百九十六人）が設立されたようで、五十二・三パーセントの達成率でした。

ところで県は、明治六年六月十九日付で「小学設建箇所並びに保護金入費等の伺」を第五大区督学局宛に提出しています。この史料を見れば、当時学校が建てられている箇所がわかります。ちなみに、都城地域には「都城・四箇町合校・川東・郡元・西五十町・金田・梅北・高木・庄内・上水流・岩満・大岩田・都城女学」があったことがわかります。

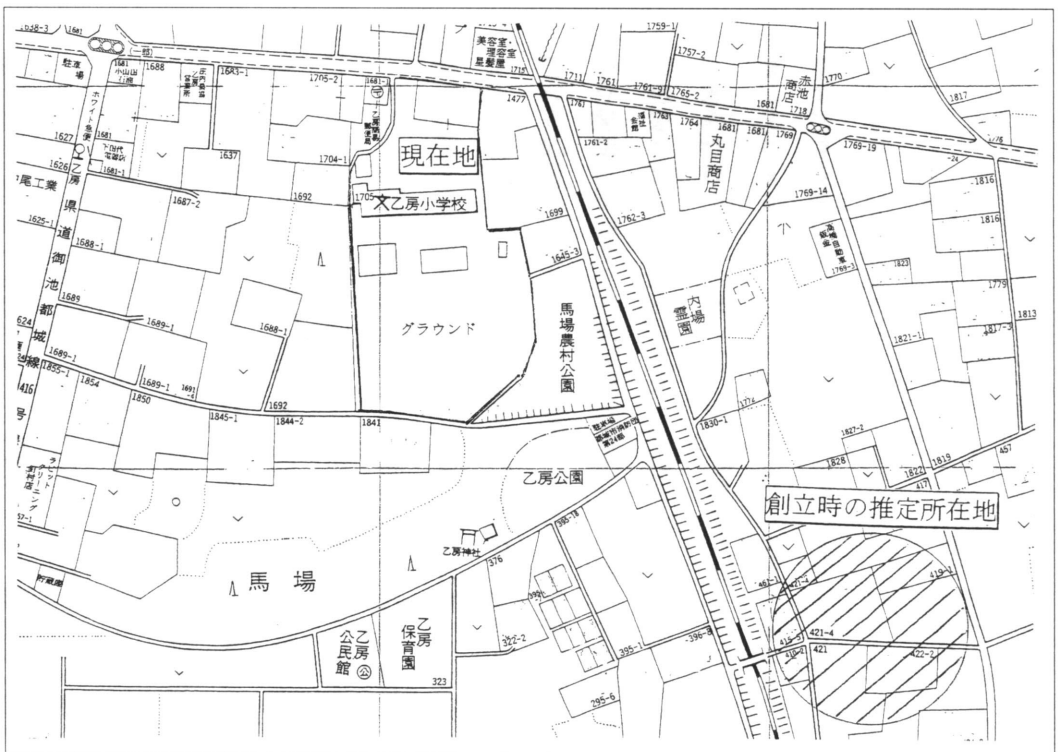
四 乙房小学校の沿革

『庄内村治要綱』（大正四年三月刊）には、乙房小学校の沿革について次のように記しています。長文ですが「一設置」の全文を掲げてみたいと思います。なお引用にあたっては常用漢字を用い、適宜句読点を付しました。濁点の有無は原文のままです。

第二乙房尋常小学校

一 設置

明治六年十一月、二十六坪二合五勺の茅屋を庄内村乙房小松の尾四百二十一番口号畑四百七十七坪に新築し乙房小学校と称す。明治二十五年五月二十一日乙房、平田の両校を合併するの指令に接し、中央の地を卜し改築せんとするに粉擾を来し遂に不成立となる。仍て規模を縮小し乙房区及宮島区の一部なる鶴の島とを学区とし、字乙房千七百七番に現今の旧校舍を新築し開校式を挙ぐ。干時期明治二十七年十月十七日なり。明治二十八年三月従来の校長佐藤綱盛氏転任せり。次て明治二十八年四月十七日山下次之助氏校長に任命、単級小学校としての経営宜敷を得内外の信用厚かりしか、三十二年七月六日庄内校へ転任せり。後任加藤四郎右エ門氏三十二年七月二十四日来任三十四年九月



乙房小の位置

二十五日志和池校へ転任す。三十四年九月二十五日篠原武二氏校長となり拾坪五合の裁縫室を増築し三十六年四月三十日庄内校に転任、同日乙丸卯右エ門氏校長となる。明治四十年四月一日修業年限二ヶ年の高等科を併置す。仍て乙丸校長兼任を被免、南畑喜右エ門氏校長として来任四十一年四月都城校へ転任せり。四十一年四月一日帖佐嘉次郎氏校長となり四十三年九月十四日山田校へ転任せり。同日濱川茂吉氏校長となり、教員を指導して児童の実力養成に力めたる結果、大正二年三月十九日北諸県郡尋常小学校児童学業奨励規定により賞金二十円受領、大正二年三月二十一日校舍百二十五坪並に付属建物を増築し、校地を拡張して今日に及ぶ。大正三年三月六日北諸県郡尋常小学校児童学業奨励規定により賞金二十五円受領す。大正四年一月十六日濱川校長高崎尋常高等小学校へ転任。同日長友博記氏校長として来任す。

右の史料から、乙房小学校の創立が明治六年（一八七三）十一月で、「字小松の尾四百一十一番号」に二十六坪二合五勺の茅屋が新築されたことが推察できます。また、明治二十七年（一八九四）十月に現在地に移転してきたことがわかります。

『庄内村治要綱』には、「二設備、三編成、四就学及出席、

五経費及授業料」の記述もありますが、ここでは省略します。

あとがき

以上、大変不十分ではありますが、「近代学校制度がどのように地域に普及したか」と「乙房小学校の沿革」を見てください。しかし、「校舍建設の資金をどう調達したのか」、「教員はどうしたのか」などというところまで言及できませんでした。

また、太陽暦や国家祝祭日を村や町にもち込んだ小学校と旧来の生活・文化が残る地域との関連にも注目すべきです。そして、今後は地域にあって学校はどのような役割をはたしたのかという課題の解明を、すなわち地域における教育の歴史に市町村や学校が所蔵する近代史料を駆使して、その全体像に迫っていかねばならないでしょう。

そのためには、地域の古い記録資料を収集・保存していく必要があります。また、それだけではなく現在作成されている文書なども未来の資料として残していくことも今後は考えていかなければならないでしょう。

【参考文献】

『庄内村治要綱』（都城市立図書館市史編さん係所蔵）

『宮崎縣史料 二』（国立公文書館内閣文庫所蔵）

『宮崎県史 史料編 近現代2』（宮崎県、一九九三年三月）

『宮崎県史 通史編 近現代1』（宮崎県、二〇〇〇年五月）

『都城市史 史料編 近現代1』（都城市、二〇〇〇年二月）

照沼康孝「明治の教育」（大口勇次郎他編『日本史史話 3 近代・現代』、山川出版社、一九九四年七月）

高橋敏「近代公教育と地域社会」（木村礎・林英夫編『地方史研究の新方法』、八木書店、二〇〇〇年一二月）

中村哲『集英社版日本の歴史⑩ 明治維新』（集英社、一九九二年九月）

鈴木淳『日本の歴史20 維新の構想と展開』（講談社、二〇〇二年七月）

明治三十三年の

庄内村議会議事録から

東区 坂元 徳郎

まえがき

前号に引き続き明治の村会議事録の一部を抜粋紹介します。

今回は、現在の県道都城～霧島神宮線のうち庄内～西岳間を、明治三十四年に郡道として開設するに当たって、庄内村議会と北諸県郡長とが、その路線位置決定について激しく対立した時の議事録を転載します。

当時都城と西岳を結ぶ道路は、明治二年三島通庸が、都城の岳下橋から庄内の宮竹繁美さん宅付近まで開設した新道即ち三島道路、そしてこれから先は旧来の往還即ち東常二さん宅を左に折れて野海正治さん宅付近から蒲生さん宅の坂を下り、そして神田川を渡って観音原に上り中尾原を経て西岳の大倉田に通ずるいわゆる藩政時代の安永街道が主要道路でした。

本案件はこの三島道路に接続する往還以外に新しく郡道を開削しようとするのですが、この議案の中で郡長が「郡会で決

「まった事である」として譲らない「旧道」とは…三島道路終点から西区の前田そして湯谷を経て西岳に至る道、即ち現在には県道になっている路線（当時はほんの杣道程度の道）の事と推測できます。なお庄内村議会在が執着する郷田川線とは…察するに三島道路終点から往還を廻り神田川に突き当たった所辺りから分岐して郷田川沿いに「やまんたん」を廻り大倉田につなぐ路線と推察されます。

さて前おきが長くなりましたが、本議事録を転載するに当たっては、紙面の都合もありましたので、重複部分と意味不明の箇所は削除し、また、原文のかなづかいはカタカナをひらがなに改めました。

庄内村会議事録

明治三十三年十一月八日 午前十時開会

出席議員 清水彦四郎 桂木良輝 池辺伊十郎 宮島傳四郎

土屋傳左衛門 横山傳助 秋永長一 南崎常右衛門 長友蔵

右衛門 長岡嘉助 堀 愿 海田善太郎 坂元英俊 坂元米

助 外欠席

議長蒲生 庄内村に於いては昨年度より本年、来年度まで更正郡道の大きな負担を蒙り実に困難に堪えざる所なり 来る三



十四年度より起工する郡道の内庄内く西岳間の既定路線（湯谷線）は工費多額を要し、また工事の困難なるのみならず外に好路線ありと認む 故に実地踏査委員四名を選定し踏査の結果によりては変更の申請をなし工費を減少し村民の負担を軽からしめんとす 願わくはご賛成あらん事を

十九番坂元 賛成意見 続いて賛成者大多数

議長蒲生 然らば直ちに委員の推挙を願う

議長 投票の結果坂元英俊 清水彦四郎 堀 愿 坂元米助四

名当選であります ご承諾を願います

午後二時散会

庄内村議会議長 蒲生 才蔵

議員 清水彦四郎

堀 愿

庄内村会議事録

明治三十三年十一月十六日 午前十時開会

出席議員 清水彦四郎 長友蔵右衛門 池辺伊十郎 坂元米助

桂木良輝 土屋傳左衛門 束野直助 長岡嘉助 宮島傳四郎

秋永長一

議長蒲生 出席議員十名欠席七名であります

本日は庄内西岳間更正郡踏査の結果報告の為参集を願った

次第であります 就きましては直ちに委員の報告を願います

十二番清水彦四郎 委員を代表して曰く 去る十一月十日坂元

英俊 堀 愿 坂元米助の四人及び村長 助役の六名御同行

郷田川筋を踏査せしに案外好路線にて既定の湯谷線と比較す

る時 郷田川線は湯谷線の三分の一位の費用にて出来得るな

らん 依って委員会に於いては郷田川線に変更することに決

定せり

七番池辺 変更線に賛成 十八番桂木 五番秋永 六番束野七

番に同感 十五番土屋七番に賛成

議長 多数の賛成者ありて他に異議を聞きませぬから全会一致

とは認めますけれども変更線に賛成の方は起立願います 惣

起立

多数でありますから変更線に確定し直ちに変更線の申請を致

します

庄内村議会議長 蒲生 才蔵

議員 束野直助 堀 愿

庄内村会議事録

明治三十四年十月五日 午後二時三十五分開会

出席議員 清水彦四郎 池辺伊十郎 束野直助 南崎常右衛門

阿久井一二 万代浅一 阿久井宗八郎 志々目与一郎 熊原

金三郎 横山伝助 秋永長一 瀬尾伸吾 中島善四郎 土屋

傳左衛門

欠席議員 坂元英俊 宮田孝之助 渡司孝之丞

議長蒲生 本日は先日の村会にて委員を選定し郡長に対し談判したる内容について箇条始終逐一報告すべし

十番清水 昨日委員会にて選定され直ちに都都し郡長に質問せしに郡長の応答頗る不明なり その始めに 我ら郡道更正の爲に出都せし旨を述

べ「本朝庄内に於いては議會を招集し郡道更正のことに付き討議をする所あり

湯谷路線に付いては費用のみならず将来のため保存法も重大なるに由り新路線を發見し村会を経て郡長に申し出をなしたるに 郡参事会にて



庄内村議회가固執する郷田川線（現況）

は一昨日旧路線を開く事に決定せし由 如何なる理ありしや」と 郡長曰く「郡道は郡会にて決する事乃ち郡に係わる事たるを以って 村長が村会を招集して郡の事件に干渉すべからず また諸氏委員の質問に應ずる理なし 村の代表者たるを

以って応答すべし」と 「然らば助役あり 応ずるや」「然り 助役には応答せん」と そこで東野助役その労に当たらしる

東野助役 「郡道更正に付いては線路決定せし由いづれに確定せしや」 郡長「旧路線に決定す」 東野「然らば両線の設計如何」郡長「旧路線は目下調査中にて委細を存せず」 東野「調査未だ出来ざるままに旧線に決定せしや」 郡長「先ず大略同路線に決定したるなり」と

十番清水 更に郡長に問うに「郡に於いて各線を開きしも情実村費負担が重く人民の負担は堪えざるに付き村では旧路線より費用少なくなつた将来保全等の爲更に良線あらんを欲し種々調査の結果 目下新路線を發見し有志等調査の上村会にて決議し測量をも成し村長の手を経て当路線たるべき様願ひ出でおれり 然るに郡長は未だ両線の費用も分からぬままに如何なる理にて旧路線に決定せられしや」と 郡長にては然るべき旨を答えらる

なお問うに「後日亦願うも許可無きや」 郡長 「然り旧路線を可とす」「この点にて是非なしと雖も若し両線の費用が同じとせば郷田川線の方を可とすべし 旧路線は破損或いは勾配等の覺束なく即ち勾配の標準は如何ほどなるや」 郡長

「標準なし」「何分本日吾ら出頭せし理は費用勾配等もあり

と雖も将来に得策なる保存の法に苦しむ所なり 徹頭徹尾郷

田川線に決定あらんことを希望す」 郡長「可哭の次第なら

ずや 村会に於いて郡事に干渉すとは 村の事に有らずして

郡事なり」「如何に郡事とても その費用力役の負担は吾ら

村民にも有り 両線の設計内容を人民に明らかに知らしめば

村民も大いに心する所あるべし 発表出来得るや」 郡長

「然り成る可くならば之をして然る可く取り扱わん」「成る可

くとは都合によりては発表せるなきや」 郡長「然り」

「然りと雖もこの件秘密にあらざるにより人民に知らしむる

ある可し 尚今後如何なる手段にて更正方嘆願に及ぶも郷田

川線に変更するなきや」 郡長「然り」

大略斯くの如き次第なり 尚洩れの分は質問により報告せん

議長蒲生 今清水氏十番議員の報告洩れの箇所は他の委員より

報告ありたし（報告者なし）

議長 大略諸子は会得せるなる可し この件に対する意見は充

分吐露あらん事を希望す

議長 郡会に対し村会より建議するを得ざる理由の熟考を希望

す 尚十四番に希望す 議長の代理をせられん事を

壱番秋永 事情により十一番南崎氏に任せられん事を希望す

十一番南崎 諾し

議長席に着す

五番蒲生 只今十

番清水氏委員と

して報告せらる

を承れば切齒に

堪えず 郡道開

削に付いて庄内

が村会を招集す

る可哭の極なり

と 然れどもこ

の事件たるや非常の困難を来たし村の負担に絶（耐）えず

故に費用等も要らぬよう亦将来の為便利の道路を撰ばんため

委員を選定し新線路を決定ある様変更申請書提出に及べり

尚この度も三名の委員と村長助役の五名共に調査し道路の勾

配を良くし将来の目的も立つ如く更に為念村会に提出せん為

再調査し而して村会にて可決せし上郡長に路線変更方を上申

せり 郡長にては承諾ありて調査員を派遣せり 郡吏員長峰

氏にては新旧両線を比較調査するの命を受け調査にあたらる

同氏は旧路線は勾配も就きかねる故旧路（湯谷線）は捨つ



藩制時代からの往還（現況）

べく新路（郷田川線）を可とすべしと 塚野助役毎度調査に出張し委細存知ありて確かに進路線に決せしものと思推せり

また郡会にても新路に決し有志の意向も新路に決せしもの如かりし 然るに計らざりき 目下郡参事員の調査 郡吏員の測量ありて一昨日旧路に決定せんと それに付き有志の訪問も受け 村の公費を費消せしのみならず百年の後まで悔いを残す旧路に決定せしは以外の極みなり 郡参事会の傍聴も許されず郡長に面談も得ず唯二、三の参事員の話にては旧路に決せしは庄内の与論なりと これまた以外と言うべし

然るにわが論とは先日來村会にて決議せし事こそ与論なるべし 然るに之を偽称して庄内の与論となし旧路に決せしは実以外千万ならずや 故に昨日村会を招集し前日來の協議を討議し委員を選定し具申したるに 本日その報告を得れば「郡道なるに付き村会を招集して郡会に干渉するは可哭の次第なり」と 庄内村を郡道が貫通せば将来の保存力役費用等より村民なる上は百年の計をなす充分の良法を確保すべく今日まで変更線を発見し尽力するにも係わらず 一、二の有志の意見を与論とし旧路に決定せんとするは編頗の処置 郡長郡参事員が両線の比較もせざるに於いておや 中にも質問を以て一笑に付し去り本会（庄内村議會）をして冷視し用を成

さざるものとなすは郡長において吾等を輕蔑したるものなり

前述のごとく奮励尽力の効をして水泡に帰せしめ旧路線に決定するに至らば吾人は本職を辞し本会を解散せんと欲す

十番清水 昨日議案決定せし如く之が通過するなくば非常の処置に及ぶも苦しからざる可し 吾人村の代表者にして一村の不利を討議するに未練なる手段に及ばず 近村の如く村会が苦情少なからざる如く吾人も苦情界の議員たるを欲せず 因循姑息を本旨とするなく良法を講ずべきなり その方法としては目下火の如き吾人の精神を携え県庁に迄訴願し其の結果によって進退を決し進むべくは充分奔走す可く退くべき時は断然退職す可し 出廳して村の状態即ち民心の意向を述べ郡道をして郡長の意の如くならしめば村は却って退歩し万事苦境に陥る旨を陳述しまた今日吾人が奔走するの状をも上申し始めて進退を決する方法如何 彼の鹿兒島郡会の解散する事の屢々なる 田舎村会にても同じく討ち死にも華々しくなす可し 宜しく考慮すべき事ならずや

六番池辺 十番清水氏に賛成 一同賛成

五番蒲生 郡長の村会を冷視する酷だしと言う可し 一、二の有志の意見を与論として旧路に決定せしは編頗の処置なり

西岳村は新旧ともに同費なりと言う 而して本村に於いては

如斯編輯も極まれりと言う可し

村会にて議したるものが一、二の有志の義を与論として退けられ郡村費ありとして一人の為に却下されしは扼腕の極なり 徹頭徹尾辞職せんと欲す 他村の如く因循姑息としてありては益々冷視され他村の侮辱を受くるは目前にあり 斯かる編頗なるもの下において庄内村の名譽を如何せん 予は断然辞職せんとす 諸氏は宜しく奮励さる可し 一同 無論清水氏の意見に賛同し各自の精神燃える可しと雖も 会長初め同時に退職す可き方宜しかる可きにより出県するの時まで留任あらん事希望す

甲論乙駁あり 退くの詳論の結果留任さる事に決す

その後 出県す可き委員の推薦の議あり委員確定す

委員 南崎常右衛門 秋永長一 土屋傳左衛門

五番蒲生 明六日委員をして招集し打ち合わせの上直ちに宮崎

県庁に上申せば如何 一同賛す

閉会時に午後四時

庄内町長 蒲生才蔵

議員 清水彦四郎 瀬尾仲吾

村会議事録

明治三十四年十一月六日 午前九時開会

出席議員

二番萬代浅一 三番熊原金三郎 四番阿久井一二 六番池邊伊三郎 七番阿久井正八郎 八番中馬善四郎 九番横山傳助 十番清水彦四郎 十一番宮田孝之助 十二番秋永長一 十三番塚野直助 十五番土屋傳左衛門 十六番瀬尾仲吾 十七番渡司孝之丞 十八番志々目與一郎

欠席議員 一番坂元英俊 十四番南崎常右衛門

議長（蒲生） 出席議員十五名 欠席議員三名であります

本日の議題は諸君に既に通報に及びし如く 西岳庄内間に新設すべき郡道線並びに本村に巡查派出所設置の件及び登記所を作る件の三件である この三件について審議決定あらん事を乞う（筆者註・郡道の件のみ抜粋）

次に 郡道路線の件に付いては 先に委員を郡長の許に特派し本村議会の議決について再三説明陳情して来た所である 如かしてその後の結果如何を待ちおりに果然郡長より出頭すべき御用状が参つたに依り本村助塚野傳之進が出頭せしに あに計らんや郡長曰く「郡会において既に決定せし如

く該路線は旧道を貫通することに決定せしを以って庄内村は是に対する夫役を出すか又は金を以ってするか何れかをお請けされたい」旨を以ってせり 茲に於いて出張の塚野助役答申すらく本件は事重大なる事件なるが故に即答し難き旨を答え帰村せし次第なり

その後客月二十六日と

覚ゆ 私は郡長に面会

し村内の事情を陳述し

且つ本工事は実に百年

の大計なるが故に充分

沈思熟慮して公益上完

全無欠なる通路を拵え

度き旨を陳述せり 而

して旧道及び郷田川線

に対する比較設計書を見

る時 工事費用の点に於

いて実に少なからざる

差異あるを認めたり拠

ってこれ等の事情等を述

べしに 郡長は今一応熟考の上来る二十八日までに返答せよ



郡役所が強行開設した路線（現況）

との事なりしも未だその運びに至らぬ次第である 然れども今日まで何たる督促も来たらず 其の上目下本村内に於いても反対運動を試みるものがあると言う事で既に先年本村が瓦解したる如く再び斯くの如き悲劇を演出するは難事と認めたるにより本村出身の大神郡書記に対し大いに注意を呼びし次第なり

尚先般選定したる委員は県庁まで出張する事になりおししが尚ご意向を確かめたし

十一番宮田 本来郡道線は一つの大問題なるが故に今回旧道及び郷田川線を全員で实地踏査の上議決する事にしては如何

十二番秋永 十一番に賛成 六番池辺 十五番土屋同感

議長蒲生 实地踏査は賛成多数と認めたり 拠って昼食後一同調査する事とせん 是にて休会 干時正午

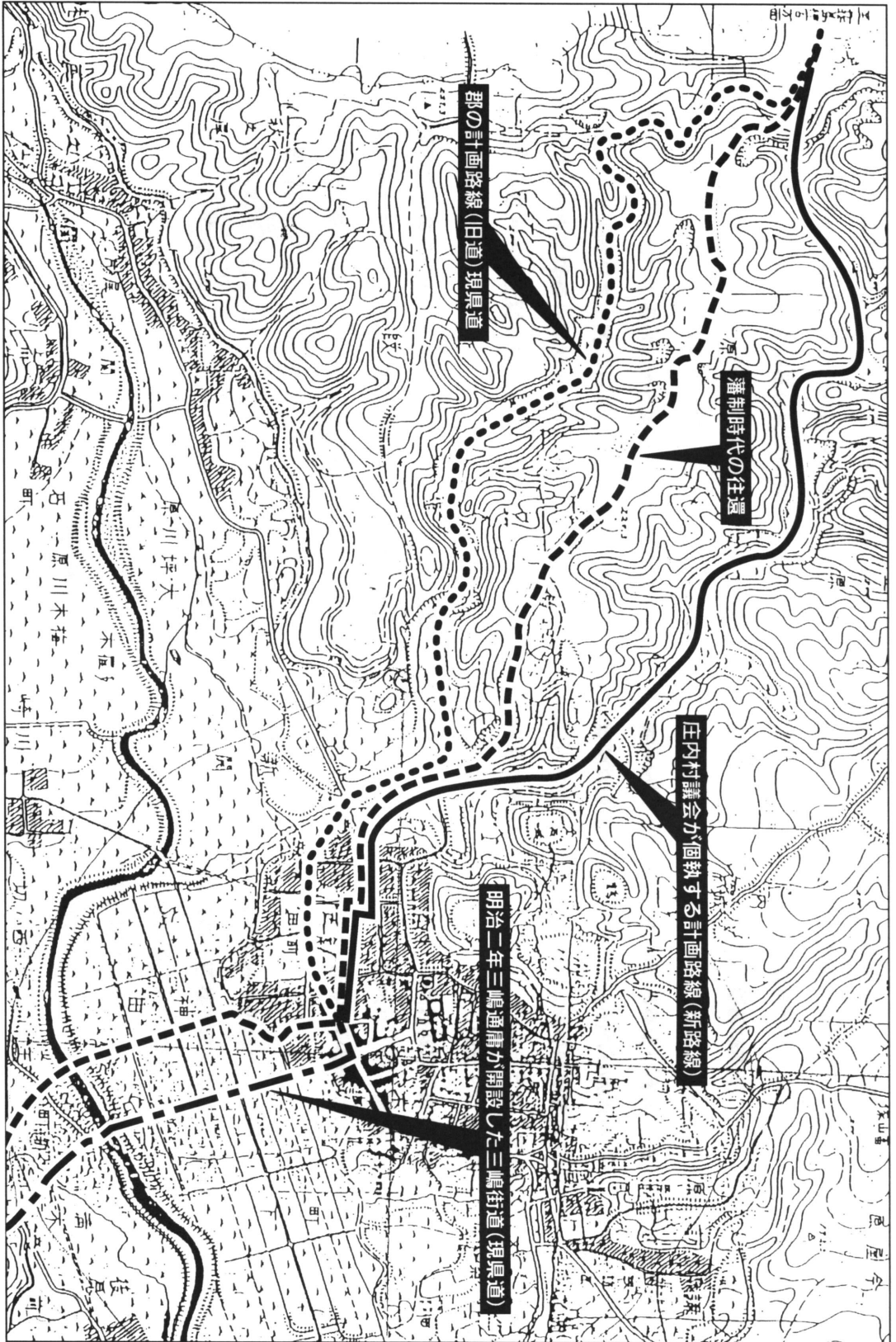
午後三時再開

議長蒲生 各員郷田川線及び旧路の各線を踏査せられたる所感を承りたし

十一番宮田 实地踏査の結果 道路の便否如何を考えるに工事上より見るも勾配の具合より見るも旧道に比し郷田川線は正

に良好なる郡道線路と認めらる

六番池辺 郡役所に於いて某技手が作成せし設計書を見るに郷



田川線の工事費は以外に多きやの感なき能はず故になお是を確かめる為に別に技手を雇い入れ再調査を遂げて然る後決定する事としては如何

十六番瀬尾 三番熊原 十五番土屋 賛成

議長蒲生 察するに各員旧道を郡道線とする事は全然不賛成にして郷田川線を作るの外他意なしと言ふの意なるや

十五番土屋 無論郷田川線を除き他に適當なる線路を認めず

折角郡費その他県費の補助により郡道を開通するに当たれば姑息的に出でずして大いに遠延の事に顧慮せざるべからず

故に彼の良好なる誠に適當なる郷田川線に決定する方が公益上将来の為得策ならぬ

三番熊原 己むを得ずんば旧路を貫通するも敢えて差し支えなからん 如何にと申すに万一郡長より中止せよとの下命等有つては誠に由々しき大事なり 私は中止の件は絶対的に反対であるが寧ろ中止の下命を待つよりも旧道でも差し支えなしと思考する

十番清水 三番熊原説には本員の思志として全然反対説を主唱するわけなり なぜなれば折角空前の大計をなすに当たり不完全なる将来有益ならざる郡道を拵えるより即ち各員に於いて実地踏査をせられたる事なれば自然明瞭せしならんが彼の

旧路線は地形よりするも勾配上よりするも延遠の大計をなすに最も不適當と認めざるを得ない訳である 故に本員は公益上、保全上郷田川線より他に良好なる線路を認めず

四番阿久井 十二番秋永 十三番塚野 賛成

議長蒲生 郡道線は郷田川線に賛成多数と認むるに抛り六番の説即ちその筋へ技手派遣を申請し再調査をなす事に決定いたします

干時午後四時 議長 蒲生 才蔵

議員 阿久井一二 瀬尾 仲吾

書記 山之城誠助

あとがき

この後どの様な経緯を辿ったか大変興味のあるところですが残念ながらその後の記録は見当たりません

察するに「村会は郡会に干渉すべからず」とする当時の「お上」意識が郡会をしてその面子にかけて当初計画を強行したものと思われます。今でこそ当該路線は掘割によって勾配も極めて緩になり立派な県道として機能していますが この記録の内容から推察すれば、当初の郡道は急勾配で山越えする険しい道路だった事が伺われます。尚余談になりますが 明治四十一年都城に

歩兵第六十四連隊が設置されましたが、当該道路は都城連隊と霧島演習場を結ぶ主要道路として改良され、またその後も度重なる改良工事によって現在があると聞いています。

(※ここで現在国土地理院発行の地図で「小田川」と表示されている「コダガワ」について、私たち「昔を語る会」では「小田川」と宛てるのは誤りで「神田川」が正しいと信じ主張してきました所ですが、今回議事録の中に「郷田川」と言う字が宛てられている事に接し大きな驚きを覚えているところです。)



庄内小学校の奉護日誌

町区 山下 謙二郎

前田博仁氏(前庄内小学校校長)が、「庄内」十二号「庄内小学校古公文書」の中で、「大正八年度から学校日誌や当直日誌、その他重要文書綴りが保管してある」と紹介されていた。過日、それらを見せて戴いた。その中に「奉護日誌」という文書があった。昭和八年四月から昭和十二年四月までのことが記録してあった。その一部を紹介し、当時の教育事情を考えてみる。

一 ページには次のようなことが書かれている。

定

一 毎月第一月曜日学校長又は上席訓導御開扉の上御異状の有無を確かめ殿内の洒掃を行うこと

一 奉安殿開扉の際は必ずその事由を詳細に日誌に記載すること

一 奉安殿内には奉納箱を置き之に御真影並に勅語詔書類を

奉納すること

一 天災地変等非常の場合は御真影並に謄本に危険の虞れありと認めたる場合は左の個所に奉遷す

第一奉遷所 南州神社又は豊幡神社

第二奉遷所 村社諏訪神社

一 前項の場合は学校長及び職員二名之れが奉護の任に当る

一 宿直員は夜間は必ず奉安殿周囲の見守りをなすこと

注 洒掃（サイソウ）水をまいてほうきで掃く。拭き掃除をする。水を注ぎ塵を払うこと。

この後に次のような形式で日誌が続いている。

の 記事	其 の 他	の 有 無	御 異 状	印	検
				年月日	御開扉
				昭和 年 月 日	御開扉
				者氏名	印
		勅語詔書類	御真影		

「其の他の記事」の中から拾ってみる。

公民学校入学式挙行の為め午前九時三十分教育勅語を取出し終式と同時に所定の場所に奉蔵時に午後零時十分

（昭和八年四月拾七日）

明二十九日天長節につき殿内洒掃を行う

（昭和八年四月二十八日）

天長節につき今上天皇 皇后両陛下の御真影奉掲のため午前八時半御開扉 午前十一時式終了規程通り奉納し閉扉す

立合者 福島政則

昭和十一年四月二十八日の日誌には次のようなことが記載されている。

御真影奉遷に就いて

一 奉安殿より講堂 講堂御真影奉安室までの奉遷方

儀式挙行当日早朝（挙式二時間乃至一時間前）奉遷の儀を係職員に於て挙行す この場合使丁は御真影奉遷の合

図鐘をなし職員児童登校者は一切の執務作業遊戯をやめ

其の場に気を付けの姿勢を保ち御真影御通過を待ち御真

影が最も近く御通過の際最敬礼をなし其の後は適當の時

期に休めの姿勢のまま奉遷の儀終了の時刻を原位置に於

て待つこと

御真影奉遷の

儀終了せば使

丁は右終了の

合図鐘をなし

職員児童は原

位置を離れ作

業遊戯執務の

遂行をなすこ

と

二 講堂御真影奉安室より奉安殿までの奉遷方

儀式終了と同時に式壇の幕をおろし儀式係の号令により奉遷の儀をなすものとす この場合職員児童来賓一般参列者は気を付けの姿勢のまま御通過を待ち係職員御真影を奉持して奉遷を始めし時儀式係の号令にて低頭し最も近く御通過の際最敬礼をなし気を付けの姿勢に復すると

御真影が講堂外に御通過の後適當の時刻に児童職員来賓一般参列者は儀式係の指揮をまって行動するものとす

三 儀式係

学校長 川内 平田 轟木 福崎 児玉 乙守 松元



当時の奉安殿

鶴田

(以上の奉護日誌の原文は現代かな遣いに、また送り仮名はすべて平仮名に改めた)

昭和天皇の御真影下賜は昭和三年十月に全国いっせいになされ、その後昭和六年一月から四月に奉遷され、同じ年の一月から四月に再び下賜されている。同じ年に奉遷、再下賜という事情は、岩本努氏(「教育勅語の研究」の著者)のご教示によると、不変色のものと取り替えのための回収という。現像技術が発達して変色しないものができるようになったためである。この御真影の再下賜については不祥事の起こらないように万全の策を講じている。気候条件までも考慮している。さらにその後各学校の御真影の検査が文部省と県の役人によってなされた。傷が付いていたり、破損していたりするとその責任は学校長が負わなければならなかった。だから、各学校では御真影、勅語、詔書類の奉護には細心の注意を払わなければならなかった。そのため校舎から独立した御真影奉置のための奉安殿の建設が進められたのである。それまでは校内の特別室に奉護されていた。しかし、火災などに遭うとそれこそ大変なことであった。

「もっともよく知られている例として小説家久米正雄の父親の場合がある。彼は明治三十一年に火事で「御真影」を消失し、

校長としての責任を感じて自殺したのである。その後、『御真影』を火事の中から救いだそうとして、多くの学校長が命を失った。〔天皇の肖像〕多木浩二〕ている。

全国的に奉安殿の建設を時期的に見ると、御真影の下賜された昭和三年、六年、十年前後に集中している。庄内小学校では、昭和八年には奉安殿が設置されていたのである。

奉護日誌を見ても分かるとおり、御真影は天皇と同じ扱いをされたのである。だから御真影、勅語の取り扱いにおいては、「定」や「奉遷に就いて」のようなマニュアルが作られ、それののっとして取り扱わなければならなかった。学校の宿直制度も御真影や勅語の奉護のためにできたものである。昭和の時代に入ってから、御真影奉護のために教師たちは生命をかけるければならなかった。御真影奉護のために殉職した教師たちも数多く出た。特に空襲を受けた学校においては、まさに命懸けでこれを守らなければならなかった。そのことは庄内小学校においても同様で、「庄内」の「思い出」などの中にも何人かの方が書いておられる。

「空襲警報が出る度に、奉安殿にかけてガチャガチャ鍵を動かしては、扉を開け、御真影を奉持して、城山の防空壕の奉安室へ……。幾度、このようなことをくり返したことで

しょう。〕〔庄内〕創刊号 岩佐フジ手記より抜粋)

「空襲警報が発令されますと、すぐに奉安殿の鍵をあけて、御真影を城山の防空壕に奉遷するというのが私達の職務でありました。(中略)『学校がねらわれた!』と思ったほんの僅かな時間、敵機が来襲し空爆を受けたのでした。私はいつも御真影のことが忘れられず、恐怖の中にもお守りしなければならぬとの意識で無我夢中で学校に駆けつけましたが、激しい空襲の為、奉遷は出来ませんでした。〕〔庄内〕第四号 島田屯手記より抜粋)

「父(栄蔵 当時庄内小学校長 筆者注)は何時帰って来たのかも定かではないが、家の焼けたことは知っていた模様である。『御真影』云々の言葉しか耳に残っていない。〕(前掲号 畠中通夫手記より抜粋)

終戦前の学校はこのように「御真影」を天皇として扱い、天皇への無限の責任を背負っていたのである。

史跡探訪（その十三）

東区 坂元 徳郎

七十九 湯谷追悼碑

関之尾の滝上を取り入れ口とする庄内三大用水路の一つ「前田用水路」は、明治二十年着工して艱難辛苦を重ねようやく明治三十五年完成に至りましたが、通水はしたと言うものの毎年襲来する台風や大雨で堤防決壊や山腹崩壊による埋塞が頻発、管理事務所的一步園や田人の人たちはその都度応急工事を余儀なくされ、田植えの時期が来ると戦々恐々の毎日でした。現在は土地改良組合の管理の下で構造も近代化され安全な通水が行われていますが、この追悼碑は当時の苦労を偲ぶ貴重な証であります。

碑は上の段から湯谷に貫ける三五〇メートルの隧道吐き口にひっそり立っています。

碑文を転記します。

正面 湯谷追悼碑

裏面 谷口秀盛 谷口秀清 坂元道男 中満夏 岩切七二 志々

目秀熊 志々目光良 池袋賢二

右は昭和十一年三月四日前田用水路湯谷隧道補修工事ニ
従事中突然土砂崩潰シ埋没圧死セラル ココニ碑ヲ建テ
冥福ヲ祈リ永ク供養スルモノナリ

昭和三十九年十月十一日

庄内土地改良区前田水系

石工 石黒勝次

犠牲者八人の内の一人谷口秀盛さんの遺児に当たる関之尾在住谷口休八さん七七歳の話と他二、三人の話とを総合しますとあの特ネルは



間知石の石巻構造で出来ていましたが、出口から五十メートル位奥の天井石が、数メートルに亘って以前から崩落寸前の状態でした。この応急措置として大きな材木で幾重にも支えがしてありましたが通水の期間が終わって本格的な補修工事が始まりました。

補修工事はトンネル吐き口から当該地点までトンネルに沿って山を掘り割り、トンネルの石を露出させて、それを全部取り壊してから再び積み石や巻き石をやり直し、完了段階で再び上から土砂を被せると言う工法でした。

一步園のイッベ爺（片平一兵衛氏）が管理責任者で、谷口休八さんの父親谷口秀盛氏が現場監督でした。

山の掘割りはたくさんの人が山に取り付き両側からキンツヤスコップで山腹を切り崩し、その土砂は用水路の水で流し出す所謂流し工事でした。

事故は掘割り工事が



完成に近づいた三月四日の昼ごろ起きました。高く削り取られたシラスの壁が一回・二回崩落しました。それが治まった三回目には大きな崩壊が起きました。下では多くの人たちが働いていましたが、真下にいた八人がシラスの下敷きになりました。みんなまで必死になって土砂を除去しましたが大分時間も経過し

てしまい駄目でした。

この間私（筆者）も隣近所の人たちが「ユダンがクエタげなどー人がイカツタげなどー」と鍋やら洗面器を抱えて叫びながら走って行った事を記憶しています。

遺体は荷馬車に乗せられむしろが掛けられて自宅まで運ばれました。当時労災保険などない時代でしたから何の保障もありませんでしたが一步園からそれぞれに墓石の提供がありました。現場付近ではその後不思議な話が話題に乗る事もありました。慰霊碑も立った現在そんな話は聞かなくなりました。また近年遺族の方をはじめ管理組合の方々が草を刈ったり慰霊祭を行ったりされておられる様で、犠牲者の御霊もきつと喜んでおられる事と思います。

八十 南前用水路改修記念碑

庄内の三大用水路の一つ南前用水路は貞享二年（一六八五）に着工され六年間の年月を掛けて開鑿されました。

この事については既に「庄内第九号」川上神社の稿において詳述していますのでこの稿では略しますが、総ての用水路について、今日のように施設も近代化され満々と通水するに至る迄には、永い永い苦難の歴史がありました。

それらの中で南前用水路に係る改修の一齣を碑に刻み後世に遺したのがこの記念碑です。

場所は関之尾灌上右岸、南前用水の取水トンネル口、現在の「緑の村」の南端一角にあります。

早速碑文を転記します

正面 水路改修記念碑

裏面 此ノ水路ハ南前開田ノ灌漑用水路ノ為ニ貞享二年藩主瑞

宝院公（筆者註・

都城第十八代領主

島津久理の事）ノ

命ヲウケ川上氏

（家老川上久隆の

事）ノ開鑿スル所

ナリ ソノ後明治

三十一年廣峰開墾ノコトアリ 同ジク用水ヲ是ニ仰グ 更ニ本

河川ノ上流ヨリ前田氏ノ新田三百町歩ニ水ヲ分與ニ至リ本水路

ノ水量大イニ減退シ用水ノ不足ヲ来シテ南川水路関係者ハ毎年

困憊ヲ極ム

因ッテ昭和七年時ノ政府農山漁村救済土木事業ヲ起コスニ際会

シ農林省ヨリ補助金貳千四百九拾參円ヲ得之ニ庄内水利組合ノ



ウチ南前組合式千七百四拾貳円ヲ釀出シ合計五千貳百參拾五円

ヲ以ッテ工ヲ起コシ巖盤ヲ削リテ溝底ヲ掘ルコト三尺乃至六尺

岩石ヲ穿鑿シテ石堤ヲ築クコト長サ七十間高サ六尺幅三尺ニ及

ブ為ニ流水ノ逸脱ヲ防ギ水量ヲ加エテ用水ヲ豊富ナラシメ以ッ

テ憂患ヲ絶ツヲ得タリ 復タ聖代ノ余沢関係有志ノ熱誠能ク後

昆ニ福祉ヲ遺セリト謂ウ可シ 乃チ事由ヲ録シテ永ク是ヲ留ム

ト言爾

右側面

庄内町普通水利組合

管理者 庄内町長 清水清次

代理者同助役 木之下信夫

会計 同収入役 前田政次

常任委員 定益喜次郎

委員 海田傳九郎 満永末八

組合書記 丸目正信

設計者 梶手 的場豊

工事監督 東野直助

請負人 立山紘 関之尾啓二

石黒傳次郎 文字彫刻

昭和八年三月三十日

庄内町情報

宮崎「庄内会」から

庄内会会長（西区出身） 牧ノ瀬 正雄

「あら：長く会いあませんな元気でした？」

「私は元気じゃけんど庄内の兄さんが去年の夏に倒れてなー」

「そりゃ大変でしたなー」

「ところが経過が良くてな、この頃はひとりですろそろ歩きができて安心してるところですよ」

「よかったですな大事にならんで」

「など一年ぶりの再会で、孫や昔の庄内のことが円卓を囲んで話しながら、時間を延長するなど盛大な総会でした。」

「今年は、皆さんの要望もありまして総会の日時と場所（東天閣）が変わりましたが、小さい孫さんも同伴される方もあり家族的な雰囲気です出席者は多くありませんでしたが、盛大でした。また、今年の春教職を勇退された坂元 武さん（東区出身）」



平成14年度 宮崎庄内会総会（H14. 4. 14）

が新会員として入会されました。
今年には庄内誌編集の役員の方々の出席がなく淋しいような気がしました。

今回は是非ご出席を願ひ、庄内の近況など話して頂くと有り難いと思つておられます。

最後に「庄内の昔を語る会」の今後のご発展と皆様方のご健勝を祈念して宮崎庄内会総会のお知らせとします。

庄内地区公民館活動の現状

庄内地区公民館副館長 瀬之口 周 造

公民館活動には、公民館が主体となって行う事業と、社会教育関係諸団体が行う事業の二つがある。これら事業の実績については、本誌第四号に、平成三年度分を掲載したところであるが、十年を経た平成十三年度の事業実績をこのたび別表のようにとりまとめてみた。

こうしてみると、現在の事業の中には、十年前から引き続き行われてきている事業がかなりあるようだが、継続していくということはすばらしいことである。ただ、マンネリ化していく傾向があるので、毎年創意工夫して内容を充実していったこそ楽しい有意義な事業として引き継がれると思う。

公民館活動の基本的理念は、自分たちの手で、自主的に力を合わせてやっていくことではないかと思う。

これまで公民館等の使用料については、取ったり取らなかつたりと各地区公民館でまちまちなところがあった。それが平成十三年四月から都市部では見直され、公用団体、準公用団体、減免団体、有料団体というふうに公民館の貸館の基準が定められ統一された。その結果以前無料で使用できていたのが有料に

なったりして不満等もあったようである。

平成十四年四月一日から完全学校週五日制に伴ない、公民館の多様な活用を図ることを目的に都市部では、「土曜日を閉館し月曜日を休館とする」措置が平成十四年九月までを試行期間としてとられている。また、子育て支援の一環として、インターネットができるパソコン一台と若干の児童図書を備えた子どもスペース一室が用意されている。

これまで公民館便りや諸会合等で機会を見つけて利用を呼びかけてきているが、三回だけ子どもスペースの利用があっただけである。土曜日が閉館になったといっても子ども達を集めて何か行事を行うとすれば、指導者（ボランティア）や児童の安全管理、経費等いろいろな問題も出てくるので、なかなか難しい面がある。

しかし、郷土を愛し、将来郷土を担っていく人材を育むため地域の子育ては地域の責任で行うということであれば、子ども達が安全に楽しく体験学習や遊びができるよう地域の人たちみんなで知恵を出し合い、協力していくことが大事になるのではないかと思う。またいつでも遠距離の地区公民館や市民広場まで出かけて行かなくても、近くの自治公民館や広場でも安全に楽しく過ごしたり、学習したりすることができるよう環境整備を図ることも大事になるのではないかと思う。

平成十三年度庄内地区公民館事業実績

一、公民館事業

対象	事業内容	期間	場所	参加者数
総合	地区住民への会場提供 各種団体活動の相談事業 地区行事・その他の情報提供 生涯学習相談・情報収集・情報提供 館報「庄内地区だより」の発行 地区体育館・市民広場の貸し出し	四月～三月 " " " " " "	地区公民館 " " " " " "	一七八 二二四 二二四 一九三 一八三 二二〇 二二八
学級	高齢者学級(庄内) (中央) (関之尾) (菓子野) (乙房) (平田)	五月～三月 " " " " " "	地区公民館 " " " " " "	二二八 二二〇 二二〇 一九三 一八三 二二〇 二二八
公民館 ライフ セミナ I教室	史跡探訪研究会 高齢者女性部会 婦人部 高齢者民謡教室 高齢者生花教室	六月～二月 六月 五月～三月 " " " " " "	地区公民館他 せだらしの里 まほろばの里 地区公民館 " " " " " "	五〇 一四 一六 五五四 一九〇
よか・ 余暇学 習ネット トワイ ク教室	手編み教室(フラダンス) クレマチス会 あじさい会(フラダンス) あやめ会 きらりびと書道教室	四月～三月 " " " " " "	地区公民館 " " " " " "	一九二 二一一 二七〇 二五九 三三七
自主 教室	生花教室 穂謡会(民謡) 書道教室 歌謡教室 つるばね会(詩吟) 錦城会(詩吟) 庄内俳句会	四月～三月 " " " " " "	地区公民館 " " " " " "	一一〇 三六〇 三九九 二二六 九〇 二二〇 九〇

二、社会教育関係団体等事業

対象	事業内容	期間	場所	参加者数
社教 連等	総合研修会 スポレク大会 ふるさと祭り(作品展示会) 庄内川一周Y.O.U遊駅伝大会 総会・理事会 青少年育成連絡協議会 元気づくり委員会 新元気づくり委員会	九月 十月 十月 十月 五月～六月 四月～三月 六月～三月 七月～三月	地区公民館 地区市民広場 " " " " " " (地区内) 地区公民館 " " " " " "	一五五 二四〇 一八〇〇 二四〇 三〇〇 三五 八一 二三一 二二三
自公 連協	環境美化運動 自治公民館訪問座談会 自治公民館長・農事振興会長視察研修会 資源リサイクル回収 館長研修会	七月～十月 五月 九月 四月～三月 三月	地区全区域 町 大分・佐賀 地域全区域 志布志	二〇 二〇 九五 一六 一〇
子ども 会連協	子ども役員会 スポーツ少年団活動	四月～三月 " " " " " "	地区公民館 各学	五〇
PTA 連協	PTA役員会 PTA研修大会 バレーボール大会 乙房小「泉」家庭教育学級 庄内小「いちい」家庭教育学級 菓子野小「あおぞら」家庭教育学級	四月～三月 五月 七月 五月～三月 " " " " " "	地区公民館 庄内小学校 各小学校 乙房小学校 地区公民館 菓子野小学校	二五二 二五二 一七二 二〇九
婦人会 連協	会長会・役員会 婦人部研修会	四月～三月 十月 一月	地区公民館 " " " " " "	一一五 二〇〇 二五〇

対象	事業内容	期間	場所	参加者数
壮年連協	会長会 ソフトボール大会 総合研修会	四月～三月 七月	地区公民館 市民広場	四三
高齢者連協	会長会 体育祭り ゲートボール大会 社会奉仕活動 野外研修 会長・婦人部長研修会 白寿園慰問・清掃	四月～三月 十月 四月～三月 七月 九月 三月 四月～三月	地区公民館 市民広場 史跡(稚児桜) 志布志 志布志 白寿園	一四四 三五五 一〇〇 二四
民児協	企画会 定例会	四月～三月 "	地区公民館 "	五八 二四五
福祉推進委員	委員会 総会	四月～二月 五月	地区公民館 "	一六八 五〇
ボランティア連協	総会 代表者会 ボランティア研修会	四月～三月 五月	地区公民館 "	七〇 四四
交通安全協	総会 婦人部総会 役員会	四月 四月 四月～三月	地区公民館 " "	二〇〇 一三三
体育協	総会 役員会	五月 四月～三月	地区公民館 "	四〇 二二

学校便り

庄内小学校

校長 福留 稔

学校今昔

昨年の二月に、ある方が庄内小学校の記述がある刊行物を実家の物置から見つけたので参考になればと、一冊の見るからに古い本を携えて校長室を訪れられた。明治四十二年発行の「全国優良小學校施設状況」(寶文館出版)という書物で、A五版よりやや大きめの千ページからなる相当に分厚いものだった。

興味津々で早速一読したが、全国より四十八小学校分が掲載されており、タイトルから施設そのものをイメージしたのとは違い、各學校施設の記述は僅かで、殆どが現在の學校経営案の類にあたるものだった。本校の校長室には昭和二十年の空襲による延焼から免れた學校日誌の一部が保存されている。一部といても、大正時代のものも含まれるので、郷土史家にとってみれば甚だ貴重なものなので、最近でも時々校長室に閲覽に來られる方もいる。

今回の資料は、學校沿革の他に明治四十年頃の庄内小学校の

主な記載内容

- 一 沿革大要
- 二 学校設備
- 三 学校編制
- (學級編制・教員配当)
- 四 教員
- 五 就學状況
- 六 児童
- 七 教授
- 八 訓練(校訓 他)
- 九 家庭連絡法
- 一〇 衛生
- 一一 校務処理法
- 一二 諸規定
- 一三 諸表簿
- 一四 経費
- 一五 村教化状況
- 一六 学校仕丁

全てのことが詳細に知れるので、さきの学校日誌に匹敵する格別なものと思ひ、紹介したい気分になった次第である。

本校の掲載分は、六十ページに及び、他の学校と比較したら突出していた。内容の主なもの上上記のとおりだったが、学校教育の今昔が知れるので、とても面白い。

教育勅語の奉読が修身科で行われたり、石川理紀之助の夜学を参考に実業補習学校を設立し、当時の学校長以下教員十二名がこの指導に当たったというのは、当時の社会をよく反映している。庄内小では、各地区に駐在した教員中心に懇話会がもたれていたため、通信簿もあるにはあったが、必要とされなかったこと

も理解できた。

当然のことであるが、教育の原理は不易だどつくづく思う。教授の章の記述では、教科書の尊重、記憶を重視し、国語科では文字・文章の言語反復練習、聞き取り能力の養成を、算数科では計算力養成、新事項の学習では進度を急がず確実な定着といった具合で、今日の基礎・基本の重視と言える。また、個性の尊重は疎かにされていないこともよくわかる。訓練の章に個性観察法として、個性調査票に観察の要領を示し、今で言うところの教育相談の資料として活用する旨が記されている。さらに校務処理の章に職員心得があったので、これも紹介しよう。

- 一 教師ノ人格ヲ完成スルハ訓育ノ精髓タルコトヲ知り自己修養ニ努メヨ
- 二 満腔ノ同情ヲ以テ児童ヲ率キ愛憎ノ念ナキハ管理ノ要訣タルコトヲ信シ自ラ慎ムヘシ
- 三 間断ナキ研究ト熱心事ニ當ルトハ教授ノ秘訣タルコトヲ信シ自ラ努力セヨ
- 四 職員ノ協同一致ハ學校教育ノ生命ナリ 各自務メヨ
- 五 職員ハ小學校教員タルト同時ニ社会ノ教育者タルコトヲ自覚セヨ

いわば私たちの経営案の「めざす教師像」である。このよう
な教師だったからこそ、村教化状況の章で、教育ニ對スル好學
心ハ尤モ深ク日ニ増シ厚キヲ加ウル風アリ 學校ノ事ニハ喜ン
デ之ニ從ウ 村会ニテモ教育費等ニ削減加ヘタルコトナク進ン
デ其支出ヲナス 式日等ニ父兄母姉ノ參列モ甚ダ多シ とい
うことになったのであろう。

私は、勤務する庄内小の文化や伝統・歴史、地域の特色を見
出したように思う。前任校の中霧島小で、創立時の校区民の学
校に寄せるひたむきな期待と熱意を感じたが、本校の場合は、
それに優るとも劣らぬものをひしひしと感じる。私も教師の
勤務在職期間は数年と比較的短期間であるが、いずれおいても
学校と地域住民の歴史は長く重いことをしっかり厳粛に受けと
めなければならぬ。タイムスリップが可能であれば、これま
での歩みの思いを後輩の教師に伝えると共に、今年からスタ
ートした学校完全週五日制に伴い、子どもの健やかな成長のため
にいかにか地域住民と手を携えて行くべきかを思索しているこ
頃である。

菓子野小学校

教頭 別府 一 男

学校紹介

本校は明治十一年、三原叢吾先生が当地に庄内小学校の分教
場として、寺子屋を開かれたのが始まりで、その後昭和二十五
年、庄内小学校の菓子野分校となり、次の年都城市立菓子野小
学校として開校しました。一昨年創立五十周年を迎えたところ
です。

現在、学級数七、児童数一五一名、教職員数十三名の組織で、
教育目標に「豊かな心をもち、元気よく、意欲をもって自ら学
ぶ子どもの育成」を掲げ、日々の子どもの教育に当たっていま
す。

なお、児童像として、「よく考え進んで勉強する子」「礼儀正
しく思いやりのある子ども」「元気な体で頑張る子ども」とし
て掲げ、日々努力しているところです。

本校の特色ある教育活動

「総合的な学習の時間」で生きる力、実践力を育成

本校では、平成十一年度より三年間、人間としてよりよい生
き方を目指し、よりよい生き方を考え、実践する力を育成する
ことをねらいとして、総合的な学習の時間についての研究を進

めてきました。昨年度は、三つの領域「環境・人間・国際」の学習を通して、子どもたちに生きる力や実践力を身に付けさせるよう教育活動を進めてきました。

ここに、各学年の活動内容のいくつかを紹介します。

三年生「花が大すき虫が大すき」

○菓子野のすばらしい自然環境に注目し、花や虫を育てる計画を立てる。

○カブトムシなどの幼虫を見つけ育てる。

○花を育て、公民館に育てた花をもって行く。

四年生「魚にやさしい廃油石けんを作ろう」

○ごみの行方やリサイクルについて調べる。

○川へ台所や風呂からどんな水を流しているか調べる。

○洗剤について調べる。

○保護者をゲストティーチャーとして招き、廃油石けんを作る。

○石けん作りの指導者にお礼の手紙を書き、いろいろな人に

石けんをプレゼントする。

五年生「植物の命をいただごう」

○種もみを観察する。

○種もみを植える。

○稲の様子を観察し、CD-ROMを使い、米作りの疑似体験をする。

○すずめよけを作る。

○稲刈りをする。

○お米を使い、栄養のバランスのとれた健康的な料理作りをする。

六年生「ともに生きる」

○昨年度の病院訪問の経験をもとに、本年度の病院訪問計画を立てる。

○調べてみたいこと、聞いてみたいことをまとめる。

○パソコンや本で、病院やそこで働く人、入院している人について調べ訪問の準備をする。

○施設を訪問する。

○まとめや発表の準備をする。

○ポスターセッション形式で発表をおこなう。

菓子野クリーン作戦

本校では、数年前から環境教育の一環として「菓子野地区からゴミをなくそう」と言うねらいのもとに、菓子野クリーン大作戦と言う活動を行っています。活動の内容は、つぎの通りです。

ア 四つの地区に分かれ、地区ごとに計画を立てる。

イ 朝、地区ごとに集まって作戦開始。

○それぞれの地区の計画に沿って、公民館、公園、みぞ、

納骨堂などの掃除をおこなう。

○学校までの道のごみを拾う。

○ごみの仕分けをする。

ウ 意見交換会を行う。

本校では、数年前よりクリーン大作戦のほかに、児童会の運営委員を中心に、空き缶や牛乳パックのリサイクル運動にも取り組み、ゴミのない菓子野地区にしていこうと頑張っています。

一人一鉢

菓子野小学校は、二年連続「花いっぱいコンクール」で優秀賞をいただきました。学校を取り囲む自然や美しい花は子どもたちの心を豊かにしてくれます。

また、菓子野小学校では、一人一鉢運動として、種から育てたサクラ草の苗を鉢に植えて育てる活動を行っています。市の技術員さんの指導のもと、水やり等の日々の世話、下葉取りなどの世話をして大切に育てています。卒業式の頃には、かれんな花が咲いてみんなで花を觀賞しています。

乙房小学校

教頭 日高啓子

乙房小学校の特色ある教育活動

一、「総合的な学習の時間」における取組

第三学年実践例（単元名「わたしたちができること」）

この単元では、地域のお年寄りとふれあう会を開いたり、視覚障害についての学習をしたりした。

お年寄りとふれあう会は、全校児童で手紙交流しているお年寄りや地域の一人暮らしのお年寄り、更に自分の祖父母を招いて、発表を見てもらった第一部、互いに得意なことを紹介し合う第二部、竹馬やお手玉、折り紙、昔の話などのコーナーにわかれて、一緒に遊んだり、楽しんだりした第三部の三つで構成した。

第二部の得意なことの紹介タイムは、子ども達の自主発表の



お年寄りとのふれあいの会（折り紙コーナー）

場で具体的な内容はもとより、発表内容の構成なども支援を受ける程度で発表グループ（あるいは個人）で相談し合って作り上げた。遊び、学習、スポーツ、趣味など様々なものが登場し見栄えのするものができあがったと思う。歩行の不自由な一人暮らしのおばあちゃんが吹いてくれたハーモニカの童謡のメロディも、他のお年寄りの歌声を引き出すなど心温まる場面もあった。

第三部では、直接お年寄りとはふれ合いながら、楽しいひとときを過ごした。子ども達には三十分という時間はあっという間だったようである。

一方、視覚障害について学習では、乙房校区在住の方に盲導犬の話をしてもらったり、ブラインドウォークの体験学習をしたりした。盲導犬の利口さ従順さには、いたく感銘を受けた様子があがえた。アイマスクをつけた人



ブラインドウォーク体験

とその人を介助する人でペアを組んで、交代で学校内を歩いたブラインドウォークの体験は、少々怖い思いをしたが、目の不自由な人の気持ちも実感として理解することができた。また、点字を読んだり、点字ペンを使って書いたりする学習もした。どの子どもも興味を持って熱心に取り組んでいた。その他、私たちの身の回りにおける視覚障害者への配慮がしてある物や施設についても学習した。

第六学年実践例（単元名「年賀状を作ろう」）

この単元では、ワープロソフトの書式設定、文字の装飾の仕方、絵や部品の移動・コピーの仕方等を身につけることをねらって、年賀状の作成に取り組んだ。また、できた作品は、高齢者との手紙交流や乙房苑や養護学校との手紙交流に利用した。

児童の作品（年賀状）

六年生は、五月にNTTでの「インターネット体験」、一月に「文集作

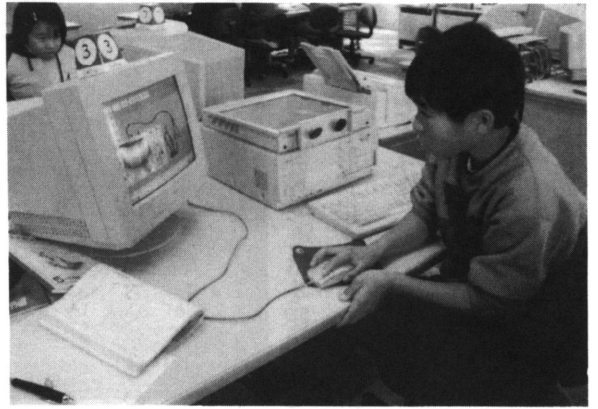


成」、二月は、野線や表・グラフの作成の仕方を習得するために、「調べ学習の発表資料作成」を行い、コンピュータの操作力を高めた。

二、民俗芸能伝承活動

(乙房奴踊り)

平成十二年より、地区に伝わる「乙房奴踊り」



年賀状作りに取り組む児童

の民俗芸能伝承活動を行っている。五、六年生を中心に「奴踊り」を練習し、音楽クラブの児童を中心に三味線の練習をしてきた。練習の指導は、学校の担当教諭と地区の指導者五人（小松吉子さん・馬籠好子さん・前原ミエ子さん・宮田イサさん・小久保鈴子さん）とで協力して行っている。練習した成果を「乙房地区六月灯」や「敬老祭」「庄内ふるさと祭り」「乙房ふれあい祭り」などで全校の児童や保護者、地区の方々に見ていただいている。児童が一生懸命踊る様子をとてもうれしそうに見て、大きな拍手をいただいている。それゆえ、年々、児童の

中にも伝統芸能を受け継いでいくのだという意識の高まりが見られてきている。昼休みに自主的に踊りの練習をし、三味線の弾き手は、夜の練習・夏休みの練習・地区の先生の家へ習いに行くなど熱心な練習への取り組みが発表で実を結んだ。



六月灯祭り

庄内中学校

教頭 澁谷 武範

庄内中の生徒は素直で純朴である。現在、基本的な学習週間を確立して、教師による指導のもと生徒自らが学習する意欲を盛り上げ、学力の向上に務めている。また、価値観の多様化に対応し、今後更に家庭・地域社会との相互理解を図りながら連携を深め、一体となった教育の推進を目指している。

庄内中の特色ある教育活動

「学級自慢コンクール」について

① 「学級自慢コンクール」のねらい

- ・学級としての意識を高めるため、また自分たちの学級の良さや課題を見つめ、改善していく態度を育てる。
- ・自分の学級に関わる職員にインタビューを行うことでコミュニケーションを高め、人の良さ、素晴らしさを認識する。
- ・インタビューした内容をレポート形式にまとめたり、新聞やポスター形式にまとめるなどして、「総合的な学習の時間」で必要とされる基礎・基本を養う。

② インタビューの仕方

○目的にあった情報を得るために人に話を聞く

○インタビューを成功させるコツ

- ・適切な相手を選ぶ（インタビューの目的を考慮して、それに必要な情報をもっている人を選ぶことから始まる）
- ・事前に十分準備する（何をどのように質問すれば、最もよく話してくれるかを検討しておく）
- ・必要に応じて、あらかじめ質問項目を伝えておく
- ・実際に使う量の五倍程度の取材するつもりで準備する
- ・第一印象を大事にする（話し方、会うときの身だしなみを大事にする）
- ・笑顔の雰囲気を作る（相手の目を見ながら、共感的に聞くことを心がける）
- ・相手の話を肯定的に聞くことを心がける
- ・インタビューが終わったら、お礼と報告をする



インタビューの様子

☆生徒感想

※いろいろな作品を見ることができて良かった。

※画用紙や写真を使って、工夫してまとめていた。

※インタビューの仕方など初めてのことで勉強になった。

※クラスの自慢がどのポスターにも見られ、学級がまとまった

気がした。

※目上の人との話し方などあらためて考える機会になった。

○生徒自身がテーマ

を設定し活動して

いく「総合的な学

習の時間」のプロ

セスの定着を図る

のは大変なこと

である。「学級自慢

コンクール」を設

定し、「ミニ総合

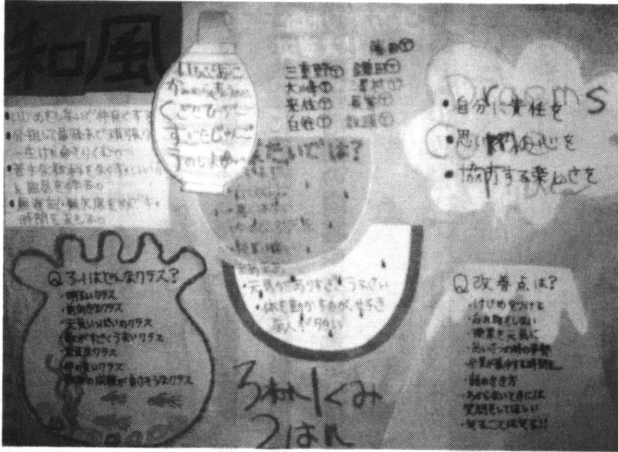
的な学習時間」の

ような形を取った

ことは良かった。

「情報の発信」に重点を置き、情報教育機器との関連も図っ

ていきたい。



コンクールのまとめ

「人権・同和教育学習」について

人権・同和教育学習の一環としてハンセン病の元患者である
日野さんに講演をしていただいた。日野さんのそれまでの経験
をもとに差別や偏見に対する苦しみ・怒り・悲しみを語って
いただき、全校生徒・職員・保護者ともに改めて自分たちの生活
を振り返ることができた。

☆生徒感想

私は、今このプリントに自分の名前を何のためらいもなく書
いたけれど、もし自分と違う名前を名乗らなければならなかつ
たら絶対に耐えられないと思う。本当に将来の夢も希望ももて
ず、どんな思いで今まで過ごしてきたんだろう。それに今まで
私は全然何も知らなかった。テレビのニュースで「ハンセン病
の元患者の人が裁判に勝った」といっていてもなんのことかわ
からなかった。しかし、事実を知った今、自分が何も知らなかつ
たことが恥ずかしい。「知らない」ということが、ハンセン病
の元患者の人々を差別していることと同じようなことではない
かとも思う。

これからもっとハンセン病の事を知り、自分のあり方、考え
方なども考え直したいと思った。

「生徒会活動」について

①地区別奉仕活動

河川や公共の施設などの清掃活動を通して、社会奉仕の精神を学ぶという目的で生徒会役員が中心となり行うものである。

ア 八月一日木曜日に実施

イ 現地集合、現地解散

ウ 生徒会役員が中心となり活動をするため、担当地区の教師

一〜二名と打ち合わせを入念に行う。その時に、事前指導の

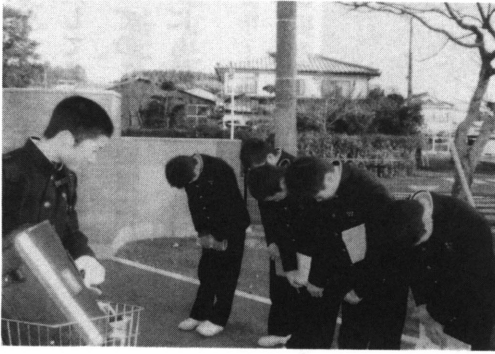
内容・集合場所の確認・清掃活動の内容や方法・班分け・名簿の作成等を行う

エ 公民館長さんをはじめ、

地区の方々に協力していただき、ゴミの分別の仕方や注意することなどを学ぶ

②朝のあいさつ運動

部活動単位または個人で、登校時間にあわせ校門付近でのあいさつ運動を実施している。また、生徒会役員による



朝のあいさつ運動

生徒用玄関の清掃活動も同じ時間帯に行われており、他の生徒の登校を待ち受けている。



随想・追憶

「庄内・13号」によせて

鷹尾 得能 哲夫

日南の友人が「御池の帰りだ」と言って、小学生の孫を二人連れて来た。

御池での昆虫採集の話、釣りの話、民話の話が長く続いた。友人が、孫の話聞きながら、庄内の昔を語る会発行の「庄内・13号」の表紙を見ていたが「この表紙の「庄内」の文字、関之尾の瀧のしぶきの写真は、すばらしい」と、繰り返し。友人が帰ってから、私は改めて「庄内・13号」の表紙を見た。

「庄内」の文字は、何時も御助言くださった、今は亡き、願心寺前住職、大河内浩瀨氏の筆である。

瀧のしぶきの写真は、坂元守雄氏（現、宮崎市在住）の作で

ある。瀧は、庄内町の歴史と共に、流れ続けている瀧である。友人から言われて、恥ずかしいことであるが、表紙のすばらしさを再発見したのである。

表紙の左下を見る。

○第13号

○付、既刊号総目次

○庄内の昔を語る会

と、横に印刷してあった。

表紙を開ける。

庄内の昔を語る会長、坂元徳郎氏の「巻頭言」があった。

「庄内」愛読者の皆さん、如何お過ごしでしょうか。

私たちの会が、発足して十五年の歳月が流れました。会誌「庄内」は、毎月三十名から四十名の方々が、ご投稿くださいます。まして、欠刊することなく、今日に至っています。

庄内は歴史の古い町です。まだまだ埋もれた、史実や言い伝え等が、数多く残っていると思います。

庄内を愛する皆さんには、この会誌「庄内」刊行の意義を、十分ご理解いただいて、一層のご協力をお願い致します。

平成十三年十月吉日

と、印刷してあった。(巻頭言の一部)

石の心

私は頁をめくりながら、古い庄内と新しい庄内を、勉強させて貰った。

九十九頁を開ける。

「庄内」総目次が出て来た。

創刊号(平成元年発行)から、第二号―、第三号―……第十号(平成十二年発行)までまとめてあった。

私は創刊号から、原稿の題名、お名前をたどっていると、亡くなられた方の多いのに驚いた。私の親しかった方を、ひろってみる。

○心のふるさと(庄内小の思い出)……鷹尾 岩佐フジ

○菅原神社(天神様)由来記……東区 萩原二郎

○櫻会のこと……乙房 馬籠良孝

○終戦前夜の思い出……乙房 宮田孝行

○菓子野百姓一揆の話……今屋 花盛 林

○石が語るふるさと考……東区 片ノ坂登

私は、旅立たれた方々の、お名前、文章を読みながら、古里庄内を愛された、ありし日を、思い味わった。

美術展が開かれた。

参観者があふれていた。

受付をすませ、作品を観ていると、片ノ坂登氏の「石垣」の大作があった。

片ノ坂氏の作品は、普通山や川の風景であった。足を止めた。回りの人も、足を止めて観ていた。

私は片ノ坂氏を捜した。失礼とは思ったが、同じ庄内町出身者と、言うことで「この作品は、どう観たらよいのですか。教えてください」と、聞いた。

片ノ坂氏は、城の石垣をじっと見ておられたが、暫くして、話してくださった。

熊本城に行った時も、大きな石垣にびっくりして、大きな石垣だけを見て帰った。日南の飢肥城に行っても、大きな石垣だけ、見て帰った。

ところが、どうしたことか、城の石垣が気になり出して、時間を見つけては、飢肥城に行くようになった。

何回か行くうち、大きな石の横に、小さな石があることに気

づいた。

じっと見てみると、大きな石は、小さな石に支えられ、小さな石は、大きな石に支えられているのである。

また、大きな石と小さな石との、調和の美しさに気づいた。その調和の美しさが、長い年月、雨にも風にも耐えて、城を守って来たのであると思った。

石垣の、大きな石と、小さな石のかかわり、結びつきは、人間社会と同じだと思った。黙っている石の心を、カンバスに出そうと、努力した作品であるが、まだまだである。

と、教えてくださった。

片ノ坂氏の「石の心の話」を、もっと聞いておけばよかった。と、思うばかりである。

庄内、菓子野弁の心

亡くなられた方々の、お名前をたどると、心配をかけたことを、思い出すのである。

昭和二十一年、終戦直後である。

学校の職員室は、旧陸軍、海軍、特攻隊帰りの教員であふれていた。

昨年までは、国のため命を捧げる教育を受け、昭和二十年八月十五日、終戦となり、今度は、自由とは、民主教育とは、再教育の講習会が開かれた。

みんなの頭の中は、混乱していた。

故、村永迪夫氏は、混乱している私たちに

「元氣ナー。ダレンゴッナー。頑張ッ、タイナー」

(元氣ですか、疲れない様に、頑張りなさい)

現在の五十才から七十五才前後の、庄内町出身者は、村永氏から庄内弁で、それも友だち用の言葉で、励まして貰ったのである。

高崎町出身の竹森光呂氏が、

「村永氏は、何時も庄内町のことを思い。庄内町出身者のことを、考えている人であった。」

また、私たちが元氣が過ぎると

「オマンサータチャ。ソゲナコツ、シテンヨカッナー。考えて、ミランケー」

(貴男たちは、そんなことを、してよいのですか、考えてみては、どうですか)

村永氏は、厳しい命令的、禁止語を使って助言するのではなく、相談的に考えさせる助言をする人であった。

言葉は、何時も庄内の、菓子野弁であった。と、話してくれた。

あの元氣者であった、友人たちも、天国に行ってしまった。

友人たちは、天国でも村永氏から、菓子野弁であたたかい助言を今も、頂いているだろうと思うのである。

霧島山オタコサイの心

宮日新聞（平・14・6・17）を見る。

……霧島の表情描く

坂元さん（都城）絵画展……

高千穂の多彩な表情を描写した「霧島展」を、都城市庄内町の、坂元徳郎さん（七十二才）が、同市姫城町のレストラン・ダビンチで開いている。

霧島山をさまざまな場所から描いた。霧島山景をそろえた、絵画展である。

坂元さんは、県職員時代に、職場の繪画クラブで学び、本格

的に油絵を始めたのは、県職を定年退職してからである。

山田町からの霧島山の写真と、坂元氏の顔写真が、大きく紹介してあった。

友人から電話が来た「宮日新聞を見た。坂元さんは、前、都城市の歴史資料館に、おられた、坂元さんですか」と聞いた。

「そうです」と、教えると、びっくりしていた。

ダビンチに行く――。

正面に、新聞に出ていた「山田町から」の霧島山が、展示してあった。

会場に入る。霧島山、山、山である。三股町から見た山。高崎町。山之口町。山田町。高城町。志和池町。庄内町。乙房町。吉之元町。小林、えびの、鹿兒島県、財部町。…等いろいろな所から見た、霧島山であった。

絵を観ながら、坂元氏はよく描かれたと、驚くと共に、霧島山には、いろいろな形、顔が、あると思った。

霧島山を眺めていると、子供の頃を思い出した。いたずらをする、父母が

「弱い者を、いじめるな。霧島山オタコサイが、何時も見ておられるぞ」と、注意した。私たち子供のまわりには、何時も霧島山オタコサイの神様がおられた。

山田町からの、霧島山を眺めていると、終戦直後（昭和二十一年頃）の、山田小学校を思い出すのであった。

その頃は、テレビはなく、ラジオも雑音が入って、満足に聞けない時代だった。

私たち、野海正治氏（前、庄内の昔を語る会長、庄内町西区）、故、瀬戸口一義氏（庄内町東区）、故、蒲生静男氏（庄内町西区、現山田町谷頭）、私、（庄内町東区）四人は、自転車もなく歩いて、朝六時三十分にかを出て、一緒に登下校した。

問題は雨であった。

天気予報は、霧島山に雲が、かかっているかどうかで判断した。

○雨が降っていても、霧島山が顔を、出しおられたら、晴である。

○反対に、晴れていても、霧島山に雲がかかっていたら（顔をかくして、おられたら）雨である。

ラジオの天気予報より、正確であった。

私たちは、霧島山を見ては「顔が、かくれ始めた。雨になっどー。急がんけー」と言って、四人は、山田町の道を急いだの

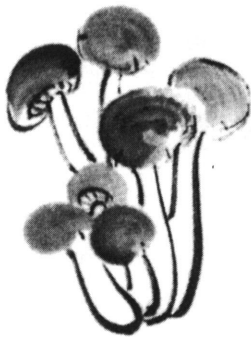
である。

坂元氏の、山田町からの、霧島山を眺めていると、お世話になった、故、瀬戸口一義氏、故、蒲生静男氏、前、庄内の昔を語る会長、野海正治氏を思い出すのである。

霧島山は、それぞれの地区で、それぞれの人が、眺め、拝み、そして、生活したのである。

坂元氏には、大変言い憎いことであるが、霧島山と一緒に生きた、みんなのために、それぞれの地区からの霧島山を、描いて貰いたいのである。

私は、庄内の昔を語る会、発行の「庄内・13号」を見ながら、会誌「庄内」は、庄内町民の心だと思った。



庄内小学校の思い出

茅ヶ崎市（宮島出身） 萬代 久男

私が庄内小学校に入学したのは昭和二年の四月、入学式の模様については記憶があいまいですが、新学期早々から同級生の中で権力争いが行われていたことが印象に残っています。と言いますのは、上平田に私の母方の実家花吉家に従兄弟二人が居て、私より一歳上の双子だったのですが、一人は既に二年生になる俊一で、その下が同級生になる福二でした。

俊一は小さい頃から体格、体力共に強く、後に高等小学校では相撲選手として活躍し、海軍に入隊しても選手に選ばれる男でしたが、ミッドウェー海戦で航空母艦「加賀」の機関兵として戦死しました。

たしか入学式後間もない頃だったと思いますが、兄の俊一が弟の福二を連れて同級生一人一人の前に来て、「お前はこの男に勝つか。」と問うてまわるのです。若し勝つと答える者がおると兄の俊一が手助けして打ち負かすという次第で、おのずと

勢力関係の序列が決まってしまう寸法です。ですから福二自身は私に似て優しい男で強い方ではないのですが、恐らく彼はいじめられることはなかったでしょう。

今考えてみますと、小学校低学年からとても良い教育を受けていたことを今更のように感謝しています。その第一は、入学式後間もない頃、新入生全員を諏訪神社本殿に昇殿参拝させて頂きました。「庄内」十二号に記載されている本殿山頂移転後のことです。

祝詞やお祓いは分かりませんが代表として椋田君が玉串を奉じたことを覚えています。彼の父上は陸軍少佐の退役軍人で、学校の諸儀式には来賓として正装で参列しておられました。祝詞では恐らく「神かけて健やかに育ち国家有為の人になるように。」と宣べられていたものと想像する次第です。

神武天皇の畝山うねやまでのご即位以来現在に至るまで、天皇は神につきえるお気持ちで国の政事まつりごとに当ってこられました。この伝統は今でも皇居三殿の祭りとして受け継がれています。このうるわしい日本の伝統そのままに私たち新入生全員が諏訪神社の祝詞の下に教育を受けたということは忘れ得ぬことです。

校内暴力とか不登校などということはとても考えられません。新入一年生の担任はいつも池上、丸目両先生だったように記

憶しています。恐らく特別に児童心理学を専攻されたベテランの先生だったと思います。池上先生には、私は学業以外でも随分お世話になりました。

私は昭和八年に小学校を卒業して県立都城中学校に入りました。それまでは庄内小学校には講堂はなく、諸儀式は教室二、三の隔壁を取り外して実施されてきました。卒業式、終業式の壇上には大きくて白い木蓮の花が飾られていたのが今でも目に浮かびます。

六年生の時の担任幸田^{ゆきだ}先生は、宮崎師範学校卒業ほやほやの方でとても人間味豊かな方でした。日南出身の方と記憶していますが、勿論独身でア式蹴球（サッカー）選手だったとのこと。で体操の時間に手ほどきをして戴きました。学校正門の近くの煙草屋の看板娘に一目ぼれされて、私たち生徒は交わりばんこに煙草買いに協力させられました。ゴールデンバットとか、エアシップと称する巻煙草の名前がなつかしく思いだされます。私たちが煙草屋に行くのを見送り、先生は校庭の茶園の蔭から看板娘をそっと眺めて楽しんでおられたわけです。

満州事変が勃発し、軍国調に染まりつつある時でしたが、少年倶楽部という月刊誌のノラクシリーズという田河水泡の漫画がもてはやされたのどかな時代でした。

庄内尋常高等小学校に新風を巻起こされた岡園助左衛門校長先生の功績は記憶に留めおくべきでしょう。戦後宮崎高女校長にご在任中に、吉都線車中でお目にかかったことを覚えていますが、たしか宮崎県教育長まで勤められ、あと私立校で活躍されたと承知しています。

御真影奉安殿が校庭東側の中央に在って、その横に大きな杉の旗竿を立てられたのは昭和七年の頃、母智丘に近い川崎の杉林から運んだものです。

御真影は天皇陛下のお写真です。各学校に配布されて、奉安殿に大事に納められ、大きな年中行事の時に教育勅語の奉読が行われる例になっていました。

私がこの世に生を享けた大正十年頃ロシアに共産革命が起こって、世界赤化運動（コミンテルン）となり、その最大の目標が日本の天皇制打倒であり、その対抗策として採られたのがいわゆる皇国史観の推進であったのではないのでしょうか。ソヴェト連邦の崩壊は国是の正しかったことを如実に示しています。

庄内小学校の大改築、役場の移転等昭和十年頃ですが、町内各地区から踊りなどの演出で賑わったことを思い出します。

小学校の新しい大講堂についての第一印象は野海海軍大尉殉職の町葬が行われたことでした。大村海軍航空隊で計器飛行検

定中での尊い犠牲であったと承知していますが、順調ならば恐らく真珠湾攻撃の飛行隊長としてご活躍される筈ではなかったでしょうか。

私が最終的に海軍志望の意志を固めたのは野海大尉の町葬参列の日であったと思います。今は亡き佳き先輩のご冥福を祈りつつ取り留めのない回想を申し述べました。

「庄内」誌の益々の発展をお祈りします。



小学校時代の思い出（二）

鷹尾 福村 静徳

今年も、庄内誌に書くよう求められた。私のような年寄りが、とためらった。その裏で、私の拙い思い出の中に、大正末期から昭和ひとけた時代の世相、教師像、生徒たちの姿など、少しでも行間に滲ませることができたらいいなあ、という思いも湧いてきた。

思い出、となるとどうしても自分自身の恥や、誰にも知られたくないことなども、さらけださざるを得なくなることもある。それを避けようと変に文章を飾ったり、言葉をもてあそんだりすると、思い出のなかの自分が死んでしまう。

私は、記憶の底に眠っているあの日、あのときの自分の姿を、心を、素直に再現したいと思っている。もちろん、歳月の壁に阻まれ記憶違いや、感違があるかも知れないが、お気付きになられた場合には、お教え下さるようお願いしておく。

○小学校入学のころ

私が庄内小学校に入学したのは大正十三年、当時の数え方で七歳、現在の満六歳である。

入学したての頃のことを母は、「お前はまこちやっせんぼだった」と、後年兄弟姉妹が顔をそろえたときなど、思いだすように言った。当時の私の家には、私の上に兄、姉、兄と小学生三人がいた。三人は顔をゆるめ同調した。特に二人の兄は当時の模様をリアルに再現して、母の話を後押しした。私は黙って苦笑いしながら聞きながした。

入学してから何日目頃だったかは、はっきりしない。お昼頃、ただ今ともいわないで、のこのこ家に帰った。気づいた祖父が「お前は本は」と聞いた。私は手ぶらだった。「忘れてきた」小さな声で答える。「本を忘れて帰るなんてなんちゅっこっか」祖父はつぶやくようにいいながら、すぐ学校へ向かった。

「福村は学校にきていませんでしたよ」。担任の得能武雄先生の言葉に「そんな筈はない」と祖父はいい、二人で私の机の中を改めた。そこには当時の呼び方で、『読み方』と『さんじゅつ』の本、筆入れと包んでいった小さな風呂敷が丸めて入っていた。

持ち帰った祖父に母も加わり問いつめた。誘導的な質問の末、真相はすぐ分かった。連れて行った兄たちは、教室まで送ると

それぞれ自分の教室へ。それからどんな経過をたどったのか、私はうす暗い教室の床下に寝ころんでいた。どの位いの時間そうしていたのか、みんなが帰る姿をみて、這いでて家に帰った。おぼろに浮かぶストーリーである。

祖父や両親、また得能先生から、どんな説諭を受けたか覚えていないが、その後床下に逃げこむことはしなくなった。

ある日姉が、折紙で鳥を折ってくれ、これを学校へ持って行けといった。手工の時間だったか、何の時間だったかよく分からないが先生にだした。先生は、ひと目で私が折ったものでないことは分かれたと思うが、顔中に一ぱい笑みをたたえ、「うーん、よくできたねえ上手だねえ」とほめながら、鳥の羽根に赤で大きな三重丸をして下さった。よっぽど嬉しかったのか、その記憶は、先生の笑顔とともに、心の奥に残っている。外にもいろんなでき事があった。数えあげればきりが無い。それらの体験が、いつの間にか私を、学校生活に馴れさせていった。

あれから七十八年、気の遠くなるような、長い歳月がながれた。同じ下川崎の部落から入学した男六名、女二名の仲間で、この世に残っているのは、私一人になってしまった。これら友の一人々々の幼な顔を思い浮かべながら、人生について、人間

についてさまざまな、思いをめぐらしているこの頃である。

○尋常科二年、二つの思い出

外は真っ白な霜、廊下の窓硝子は凍てついて外は見えない。

「はあーっ」と息を吹きかけ指を動かすと、習ったばかりの文字になったり、お人形やうさぎの形が生まれた。つい夢中になっていた。

ぴしやり、突然激しい痛みが脳天をはしる。頭を両手で掩いながら振り向くと、そこには担任の長濱千代先生の姿があった。右手には竹の鞭、きびしい目付、なんにも言われない。五秒、十秒、身のちじまる時間。やがて無言のまま背を向け、長い袴のすそをひらひらさせながら廊下を遠ざかって行かれた。その後ろ姿を、何故叩かれたかも理解せぬままぼんやり眺めて、立ちつくしていた幼い日の私。

いつの間にか、あの時の先生の歳を追い越し、こんな年寄りになってしまった。あの脳天に響くような痛さも、きびしい目つきも、今はただ懐かしい思い出である。

○その二

何時間目だったか、始業前だったか後だったか、さだかでない。

い。私は、教室の後ろ壁に貼りだされた、自分たちの作品をぼんやり眺めていた。もう一人、誰かが並んで見ていた。その誰かは、私の肩にかかるく片手をかけているような気がしていた。

突然「わあーっ」という喚声とも、どよめきともつかない音が教室をゆるがした。何事だろうと振り向くと、みんなの目は私と傍のもう一人にそそがれている。担任の長濱先生までが一緒にになってにやにや。

どうしたんだろう。傍をひよいと見て私はひったまがった（驚いた）。そこには最近どこからか、転校してきた女の子が立っていた。当時としては非常に珍しい洋服姿。頭はおかっぱ、顔だちもきれいでクラスのみんなが注目している女の子。私はあわてて肩の手を振り払い自席へ駆けもどった。女の子は、どうしたんだろうというような顔でぼかーんとしていた。彼女としては、極く自然で当り前のことだったのかも知れない。やがてゆっくりした足取りで自席へもどった。

笑いさんざめきはしばらく続いた。なかには手を叩き、からだをゆすりながら騒いでいる子もいた。

大正十四年のある日、庄内小尋常科二年、長濱千代先生のクラスに突然湧いた小さなドラマ。歳月は夢のようにながれた。すべては厚い時のベールにつつまれ、ぼんやりかすんでしまっ

た。今ではメルヘンの世界のできごとのように、私の心の奥に残っている。

あるとき、あのドラマの若い女優たちに、その後どんな人生が待っていたのだろうか。

人は加齢とともに無気力、無関心、無感動になってゆくという。私もその例外ではない。だが、なんかのはずみで、このできごとを思いだすとき、私の心はその例外からはみだし、胸の奥の方に、ちょっぴり赤味がさしてくるのを覚えるのである。

○尋常科六年、その一

昭和四年、私は落第もせず無事六年生になった。尋常科の最終学年、国民の義務教育の終わる年でもある。

いろんなことがあり、思い出は多い。世の中は大不景気の時代。学校にお弁当を持ってこられない子供もいた。貧しくてお昼ごはんが食べられないのである。学校給食で腹いっぱい食べている今の子供たちからは、想像もできないことであろう。また学校へ乳飲子を背おってくる女の子もいた。子供がむずがったり泣きだしたりすると、そっと席を立てて外に出た。悲しい世の中だった。

飛行機が、庄内の空へも姿を現わし始めた頃であった。授業

中誰かが飛行機ではないかとつぶやく。みんな耳をすませる。どこからともなく聞えてくるかすかな爆音。『わあーっ、飛行機だあー』、もう授業どころではない。なだれるように校庭へとびだす。先生も一緒だ。どのクラスも同じだった。

大空の遙かあなたにゴマ粒のような黒い点。ゴマ粒はだんだん大きくなりやがて生徒たちの上空へ。単発複葉のプロペラ機だった。プロペラ特有の爆音が全身をゆさぶる。やがて再び点となって消えてゆく。高ぶる興奮はいつまでも胸に残った。教室にもどっても、しばらくは飛行機の話し。

野海サダ先生が「あの飛行機には私の弟が乗っていたかも知れないのよ」。笑顔で話される。いいなあー、あの広い広い大空を自由に飛び回れるなんて、しきりにそんなことを思った。十年後、私自身が陸軍飛行隊に入隊する運命にあったことなど、この時には夢にも想像できぬことだった。

○その二

秋の遠足は、山田町の四方面ヶ丘だった。引率の野海先生は紫紺の袴を胸高に、白のズック姿、わいわいがやがやの生徒たちとともに目指す四方面ヶ丘へ向かった。たどりついた丘で、母の心づくしの高菜の葉で巻いたにぎり飯を食べた。たのしい

ひと時を過ごした。

帰路山田小学校に寄った。長い石段？を登りつめると深い緑につつまれた校舎。前は広いグラウンドだった。そのグラウンドで疲れたからだを休めていると、山田小の生徒たちがでてきた。それぞれひと塊になって相対した。ざれごととも、冷やかしくもつかない言葉が飛び交った。

何がきっかけだったのか、どちらが先だったのかは分からない。

「山田ん学校は豚学校、豚と言われて残念か」「庄内の学校は焼け学校、焼けと言われて残念か」。誰が考えついたのか、こんな言葉の応酬が始まった。初め一部の生徒たちの声はやがて全員の合唱になった。

山田ん学校は……と庄内組、終わると喚声と拍手。庄内の学校は……と山田組も負けずに大声。喚声、拍手。こんな単調なやりとりを繰り返した。どちらにも、棒や竹など持っている者はいない。小石ひとつ飛んでこない。喧噪に近い大声が、学校をとり巻く森へ吸い込まれていった。

あれは何だったのか。お互いのパワーを誇示するためのデモンストラクション？それとも「ようこそ」という歓迎のセレモニー？。

ほほえましい思い出である。

○その三

ある日の教室、先生の朗読は「巡礼おつる」の物語り。黙って聞いているうちに、いつの間にか瞼の裏が熱くなってきた。やがて細い涙が両の頬に糸を引く。そんな私に気付いた男の子がくす、くすっと笑った。先生は朗読をぴたりとやめ、本を教卓に置かれた。

「皆さん、かわいそうなおつるの境遇に涙をながす人もいれば、へらへら笑っている人もいる、このことをどう思いますか」、何人かの生徒に指を差し、最後にいわれた。

「他人の境遇を理解し、思いやりの心を持つことは大事なことです。他人の立場の分かる、一緒に悲しんだり、喜んだりできる人になって下さい」（要旨）。当時の修身の教科書のような言葉で結ばれた。

今でこそ「巡礼おつる」は、人形浄瑠璃の名作として耳慣れているが、当時始めて聞く私には大きなショックだった。

あの時の教室の光景が幻のように浮かんでくる。野海先生の言葉が、心のどこかに残っているような気もする。

それなのに、あの少年の日の純真な心が、八十四歳の私に残されているだろうか。積み重ねた年輪のはざまに、置き忘れてきたのでは……。悲しくふり返っている私である。

学徒勤労働員の思い出

東 区 山 元 哲 朗

昭和十二年七月七日支那事変勃発、そして十六年十二月八日

大東亜戦争が始まった。私は十七年三月国民学校と名称が変わった最初の小学校卒業生（六年卒）として巣立ち、四月には、筆記はなく口頭試問だけで合格した旧制都城商業学校へ入学、八軒の自転車通学が始まった。戦局は益々厳しくなり物資不足も極だって来て自転車通学も、タイヤの入手もむづかしくなり徒歩通学となった。

三年生（昭和十九年）になり、上級生は勿論だが我々にも学徒動員という肉体労働の時が来た。始めは現在の新田原自衛隊基地になっている陸軍飛行場での飛行機を護るための掩体壕造りに一週間、終わってすぐ現在の沖水地区になるのだろうか、当時の青年学校が宿舎になり飛行場造りの土方、トロッコ押しエンゲイの作業を一ヶ月位やった。その時のとんでもない忘れられない出来事を一ツ、それは韓国の人達も作業員として一緒に作業していたが或日土手を崩していたら蛇が出てきた。その時韓国の

人がすぐさま蛇の頭を捕みそのまゝ口に持っていき、喉元を歯でかみ皮をはいでいったがアツという間の出来事、私達は唾然として見守るばかり、翌日昼食時になるとその人が弁当の中を見せながら「昨日の蛇だうまいから食べろ」というが昨日の今日だから蒲焼き風ではあったがとても食べようという気は起こらなかった。

飛行場造りの作業が終ったと思っただけで川崎航空機製作所（現在国立都城病院付近）への飛行機製造への動員が終戦迄続いた。一ヶ月位の訓練期間を経て現場に配置された。私達都商生は翼の前部を、都商生は後部を作っていた。戦局の悪化につれ徹夜作業も始まった。眠い、きついで作業時間なのに腰を降しウトウト、丁度その時陸軍から配属されて来ていた将校に見つかり、たるんでいるとビンタを食らったことも。

食事は二食持参していたが一食は麦、カライモまじり、後一食はカライモンダゴ等を持っていた。カライモンダゴがなつかしさ食べたさに提案を一つ、カライモンダゴを現代風にアレンジして菓子として売り出したら売れそうな気がするのだが一人よがりかな。

空襲も益々烈しくなり工場も空襲を受けるようになり動員されてきた小林中の生徒からの犠牲者も出たという悲しい出来事

もあった。

動員が長びくにつれ疲れ等から時々サボルようになり二十年八月六日庄内小学校が空襲で消失した時も家に居て焼けるのを恐ろしさ半分見たさ半分で煙の上ったのを見ていたが、民家も類焼という現実も見て来た。

庄内小学校空襲の八月六日広島に原爆投下、三日遅れて八月九日長崎にも原爆が投下され、八月十五日終戦となった。

私は学校に帰り勉強する事となったが、何をどんな形で勉強したか全然記憶がない。はっきりしているのは、学校は五年制だったが、当時四年で卒業してもいゝとの特例があり、父が十九年死亡し金銭に余裕もなかったし、世の中はゴチャ／＼てんやわんやで勉強する気はサラサラなかったので、私は四年で卒業した。三クラス約百五十人の中、五年への進学した者は二十人程度だったようだ。

今、当時のことを考えるとなつかしささえ憶えて拙ないペンを走らせました。駄文駄筆をおゆるし下さい。

終戦後の庄内小の思い出

大王町 吉川 一郎

私が先生になるきっかけは、昭和十八年三月、都城中学校を卒業して、進学もせず、就職もせず、家に居た時、都城市に行く用事があり、バスに乗ろうとした時、バスから降りてこられた、当時の庄内小学校長の水久保平次先生が、「お前、今、何をしているのか。」と、聞かれたので、「ぶらぶらしています。」と、答えると、「じゃ明日、学校に来てくれ。」と、言われたので、訪ねると、四年二組担任の池田先生（岩佐フジ先生の妹さんのご主人）が亡くなられ、担任不在なので、手伝ってくれと言われ、担任し、教えることになった。菓子野美和子先生が、女子師範を卒業して庄内小に赴任し、四年三組を担当しておられた。一年間、子供達と生活してみて、先生の仕事に興味を持ち、先生になろうと決心し、師範学校を受験して合格し、入学した。時は、戦時中で、農家の動員作業、名古屋工場の勤労動員と、勉強らしい勉強はしなかった。終戦後の、昭和二十一年の南小学校での教育実習が先生への勉強の第一歩ということに

なる。

昭和二十二年三月師範学校を卒業した。当時の教育委員会の方針で、赴任は出身地ということで、庄内小学校に発令された。新制中学校がスタートした時で、赴任は五月一日になった。

校長先生は原口重利先生、職員は男子十九名、女子十五名計三十四名で、私は六年生を担任することになった。児童数は、男子二十五名、女子二十四名計四十九名であった。一組は、茨木次夫先生（三股町健在）二組は私、三組は、青木キク先生（東京都健在）四組は、鬼束勝見先生（死亡）であった。

庄内小は、空襲で戦災にあい焼失してしまった学校である。運動場の仮校舎を私達は、バラック教室と呼んでいた。地面に直接、柱を立てて作ったいわゆる「ホッタテ小屋」である。窓は、上を留めて、下を押し上げて棒で支える板戸である。机は、棒ぐいを二本地面に打ちこみ、その上に板を渡して打ちつけたものであった。一年間、手さぐりの授業を、私なりに工夫して、一生懸命取り組んだ。

遠足で御池に行った思い出がある。冬は、燃料がなく寒かったのを覚えている。食料事情が悪く、辨当が作れず昼食は家に帰ってすませた。卒業式は、中庭の校庭で行なわれた。その時の教え子では、松田 亶君が、大丸に勤めている。

昭和二十三年は、五年生を担任した。男子二十七名、女子二十二名計四十九名の児童数であった。教室は、二棟の中の南側の一棟の一番端で、北郷馬場から、運動場に入る入り口に当り、やっぱりバラック教室である。

少し眼を転じてみよう。職員はさすがに独身が多く、昭和二十二年が二十二名、二十三年が二十四名、男子は十四名が独身であった。もう亡くなられたが、前田逆郎先生は、心臓の手術をされて、遅れて赴任されたが、西岳の高野から、歩いて通勤されていた。一年の後、庄内中学校に転勤された。

当時、日直、宿直というのがあり、独身男子職員がこれに当たったが、常に二名、三名、四名、五名泊りこんだ。時には、焼酎を酌みかわし談笑した。今になると、楽しい思い出である。また、宿直の他に、用務員さんが、夫婦で泊りこみで生活されていた。

運動会は、二十二年、二十三年は、庄内中学校（旧青年学校）の運動場を借りて行なった。

昭和二十三年には、新校舎建築も始まり、二十四年四月から新校舎に入り、バラック教室も無くなった。私は、持ち上がりで、五年の子供達を六年で引き続き担任した。一組は私、二組は黒島昭典先生（庄内町健在）三組は汾陽英子先生（死亡）四

組は海老原常義先生（死亡）であった。校長は田中為雄先生。戦争で絶えていた鹿兒島旅行が復活した。昭和二十四年十一月六・七日に行われた。

楽しみの少なかった当時では、運動会は、最大の楽しみで盛り上がった。プログラムに、町内各団体の対抗リレーを組んだ。教職員チーム、農協チームが強く、農協チームが教職チームに勝ちたいと挑戦してきた。二十四年の運動会で、私が足指をケガして走ったのが原因で職員チームが負け、農協チームが優勝し、その喜びようは、今でも忘れられない。運動会の後は、父母を交えて懇親会があり、よく飲んだ。

飲んだ勢で、明日、霧島登山をしようということになり、参加者は、明日の谷頭駅に一番列車に間にあうように集合ということ、登山を行なった。記念写真が何枚か残っている。

学芸会も行なったが、会場は、庄内劇場（映画館も兼ねていた）を借りて実施した。バックの絵を画いたり、泊りこんで準備をしたりした。

終戦後の学校教育は、新しい教育制度の中で行なわれたが、試行錯誤しながらであったが、子供に力をつけようと、全職員一生懸命取り組んだ。

当時は、アメリカの民政官が教育にも絶大な力を持っていた。

特にケーズ氏はいろんな改革を行ない、ケーズ旋風と言われている。庄内町も、地図で、宮島地区の子供は庄内小までの通学距離が遠いという理由で、菓子野地区に学校を建築せよということ、ことで建築が始まっていた。

私の学校に、中郷から、松留武君という子供が転入して来た。病身で体格も小さく、千草の村永さんの隠居を借りてお母さんと住んでいた。二、三日登校しないので心配していたら、亡くなったと連絡があり、子供全員を連れて葬式に行った。「もう一度給食のミルクが飲みたい。」と、言いながら亡くなりました。たと話された。当時、学校ではミルク給食が行なわれていた。葬式の帰りに、菓子野小の校舎を見て帰った。昭和二十五年三月、「お前菓子野分校に行ってくれ。」と、言われ承知して、庄内小を離れた。三年間、いろんな思い出があるが、今回は、これで終わります。



鍋釜に思いを寄せて

川崎 前畑 文利

大昔は鍋とも釜ともつかぬ一つのもので何でもやってのけたようです。

食用の煮物は勿論、お湯を沸かして飲む、身体を洗う、拭く、お茶の葉や大豆、麦等を炒る、油を少し入れて炒め物を作る、布の草木染まで色々な事に広く使われて来たようです。

現在のように物が有り余る程にない時代だから、そんなに一家庭にいくつもあろうはずはありません。普通の家庭なら鍋一ツ釜一ツあれば良い方で、貧しい家庭等は一ツしかなかったと聞いた事があります。その頃の事だから穴があいたら「釜ふだぎ」と言う職業があって、『鍋釜の修理、鍋釜の修理はありませんか』と各家庭を廻って来たものです。其の貴重な鍋や釜も使い捨てにする今日此の頃です。小サイ鍋も犬の飯入れにもなりません。今は鍋や釜の材質も豊富で鉄、アルミは勿論ホーロウ、ステンレス、銅、スズ、土鍋と色々、サイズも大、中、小、浅いものから深いもの、又圧力鍋、フライパン、蒸し鍋と

数しれぬほどある様です。又その鍋や釜を熱する燃料も、プロパンガス、都市ガス、電気、灯油、炭、薪、ロー、と色々あります。

又その中で作る料理の多い事、テレビの料理の番組をたまに見る事があるが、よだれが出そうな御馳走が出来るのを見る事があります。和風から中華風、西洋風、最近イタリア料理までテレビでやって見せてくれますが、西洋、中華、イタリア料理等、材料が揃わないのではと思われれます。小生等、聞いた事、見た事もない材料が一杯出て来るからです。手の届かない高価な物から口に馴染めない料理まで、色々有りますが此処では、小生は、手っ取り早い鍋物について考えて見ます。

チャンコ鍋、鋤^す焼、湯豆腐、水炊き、チリ炊、シャブく等有ります。家族や兄弟姉妹、親戚、友達、職場の仲間、隣組と鍋を囲んで丸くなり、箸でつゝき合うおいしさは又格別です。これでこそ鍋の味、釜のあたゝかみがしみくと伝わって来るのを感じます。

唾^{つば}が飛び、話しがはずみ鍋や釜が取り持つ様々な出会いや愛情が生れ育つ事も多いものと信じています。

鍋釜に感謝しながら筆を擱きます。

父の言葉を生かしたい

さいたま市（東区出身） 馬籠京子
（旧姓 原）

平成十四年の六月に、八十八才になった母の「米寿」を祝って、霧島ホテルに一泊しました。参加者は、母と四人の子どもたち夫婦（但し、私だけは主人出勤のため一人で出席）、それに父方の親戚で、一人暮しの母が日頃何かとお世話になっていく坂元家の方々や、旧姓坂元英子さん、私の友人でもある帖佐ミヤさんの計十三人です。庄内での五十四年間の母の歩みを、よく知って下さってるこの方々には、是非一緒に楽しい時間を過ごし、そして母の米寿を祝っていただきたいと思い、この埼玉から電話を入れました。主旨を話しますと、五人の皆さんがすぐ「参加」との有難い返事を下さいました。

母は、前の晩は興奮して、夜中の一時頃まで着て行く服を選んできました。服が決ると次は、ベルトとバッグです。全てが決り床に着いたのは一時でした。

当日は、それぞれ五台の車でホテルに集合し、部屋割、入浴、

そして祝いの晩餐会となりました。

母は前日選んでおいたブルー系のワンピースに着がえて、晩餐会の席に着きました。

まず、母が前々から書いて準備していた挨拶文を読み、感謝の気持ちを表わしますと、次々に、簡単な挨拶やお祝いの言葉があり、食事となりました。

食事中は、お酌しながらおしゃべりしたり、詩吟や、「正調刈干切唄」「正調神搦節」が披露され、次にシーンと静まりかえった雰囲気の中で、踊りの師匠である英子姉さんが、正装して「長生の舞」という詩舞を舞い、次に弟子であるミヤさんが、袴姿で「桜花の詩」という詩舞を披露して下さいました。母の「祝い」の席にふさわしく、一層この場の雰囲気盛り上げて下さって、母も大変うれしそうでした。

食事が終ると、一つの部屋に集まり、おしゃべり中心の時間を過しました。時々父のことも話題になりましたが、私たちが知らない外での父の事を聞くのは、新鮮さがあった好きでした。その翌日は、えびの高原、井出の山、御池とまわり、夕方母の家に着き、又飲みなおしです。こんなに楽しい時間が過ぎて大満足でした。そうして、五人の方々が、母のために時間をたっぷり下さり、母へのお祝いとして、唄や舞いを準備して下さい

たことに感謝の気持ちでいっぱいです。これも庄内を故郷にした父のおかげだと、私は、話をそこに持って行ってしまおうのです。

その父は、背は低く、ふとっていて、頭は禿げ、お世辞にも格好いい紳士とは言えませんでした。私は好きでした。

父はよく私たちに、自分の学生時代のことや、東京での貧乏生活のこと、召集され二等兵として、馬の世話を命ぜられ、それが苦痛だった事等を、大げさに話してくれました。父の話の中でも、父の発した言葉で印象に残り「すばらしい」と感じるのが、いくつもあります。

◎ その一つに、昭和二十四年（私は小四）の正月のことだったと思います。馬場中の新年会に、父は自分が食べる料理を皿に盛ってもらい、新聞紙でくるんで、その寄り合いに出かけました。まだ食料不足の時で、自分の酒の肴は、それぞれ自分で持っていくのです。その頃の正月料理といえば、我が家では、「煮鰯」「鯨のオバの酢味噌あえ」「酢の物」「豊富に食べられた数の子」「お雑煮」位だったと思います。その中のいくつかを皿に盛って行きました。

寄り合いから帰ってきた父は、夕食の時、

「地域の集まりは大切だ。いろんな人が、考えや意見を出し合っ
て、前向きに進めていく場である。年をとっていくと、尚一層
地域の力を必要とするのだから。」と、この日も家のどなたも
出席されなかった方がいて「外で活躍することはいいいことだけ
ど、たまには誰かが出席して、自分の馬場中のことを知ってほ
しい。そして持ってる知識を地域でも生かしてほしい。」とい
うような事も言っていました。この言葉は、子どもの頃は何とな
く頭の隅に残っていました。が、私はあの父の言葉を前面に出
してこの地域で生かしています。

私がこの土地に引越してきたのは、二十八年前です。一戸建
ての家が百五十世帯集まっっていて「柳団地」という自治会をつ
くっていました。二十八年前、初めて自治会の婦人部総会に出
席した時のことです。その時の婦人部長の挨拶の言葉に感動し
ました。それは、

「皆さんは、親の都合でこの土地を求め、住むようになりまし
たが、みなさんのお子さんにとっては是非も無く、ここが、
「故郷」になるのです。美しい故郷、いい思い出のある故郷に
するためには、私たち親の言動がとても大切なのです。」とい
う内容でした。みんなで力を合わせて良い環境をつくりましょ
う、ということ。この婦人部長は、中学校の先生を退職さ

れたばかりの方でした。私と気が合いそうでうれしくなりました。父の「地域を大切に」の意志も生かされると思い、それから、よく会合に出席して意見を述べ、自治会活動に取り組んでいます。同好会も二人が発起人となって、いくつかつくりました。その時、皆さんに二人が呼びかける言葉に

「できるだけ自治会活動や催しものに参加しましょう。そうして、顔見知りの方や、友だちを多くつくりましょう。」とか、「若い時は、遠くに多くの友だちを持ち、出かけて行って楽しい時間を過ごすことはいいことです。でも、年をとって体力が落ち、出かけられないようになったら、近くににいる友だちや、知り合いの方が、何よりも頼りになります。年とってから急に友だちをつくるのは大変です。元気な頃から、この団地の中に、友だちを多くつくりましょう。そのためには、自治会、婦人部、子ども会、同好会の活動にできるだけ参加することです。」と、言い続けています。

◎ 又、父はある時、「生活力」という言葉を教えてくれました。「生活力のある人とは、金持ちの人や、給料をいっぱいとっている人、学歴のある人のことを言うのではない。困った時、立ち直れる力を持っている人のことだ。急に会社が倒産したり、

急に貧乏になったり、急に悲しいことに直面した時、くじけずに、歯を喰いしばって立ち直る努力のできる人、とその人が持っている力が生活力だ。生活力は急にできるものではない。」と。私は新しい服を小学生の時、「買って。」とねだりました。その時父は

「服は継ぎがあたっていても清潔であれば恥ずかしいことはない。今は食えることが大切なのだから、そして体をつくることが優先だ。」「がまんしなさい。」と言われました。その頃は、父のワイシャツも、私たちの服や下着も、母がミシンで縫ってくれました。

母は今でも、困ったものだ、というように「お父さんは、清潔であればいいのだと言って、継ぎのあたったワイシャツを平気で役場に着て行ったのよ。きっと陰口たかれてたでしょうね。」と言ってます。

「若い時の苦労は買ってでもせよ」ということを中学時代に、前田先生から教わりましたが、生活力につながるものがあると思っています。

◎ 又、父から、すごく叱られたことが一度だけありました。それは私が小学生の時、農家の人々のことを

(朝早くから夜遅くまで働いて、時間にゆとりがなく、いつも疲れていて、おしゃれもなかなかできず大変だな。) という見方をしていました。それに母が毎日買っていた月刊雑誌の「家の光」に、お姑さんの嫁いびりの記事や小説がのっていました。お姑さんがお金を管理しているので、お姑さんは子どもに買ってあげたい物があっても、簡単にはそれができない」というような内容でした。本気にした私は、ある日の夕食時に、

「私は、絶対農家には嫁に行かないからね。」と言ったのです。父が反論し、農家の人たちのご苦労や、その人たちに、私たちは感謝の気持ちをもつべきだということや、どんな仕事も大切でどこかでお世話になっているのだということを、例をあげて話してくれました。その時の私の緊張した様子と、その時の場面は、今でもはっきりと思い出されます。

◎ 一番わかりやすい父の言葉に

「好かれている人のところには、人が集まる。」ということ。人が訪ねてくれることは、好かれていることだから、料理や、ことばでおもてなしなさい。」と言っていました。

父の仕事関係の方や、暮のお客さんは、お座敷にお通して、私たちはその席に挨拶に出るだけでした。

いろりの間でおもてなしするお客さんは、気心のわかった人です。例えば親しくして頂いている親戚の人や、ご近所の人です。

ここには、私たちも同席できるので、うれしかったです。いろりを囲みながら酒飲みが始まります。最初の酒のつまみは、するめでした。あの頃は、するめが豊富でよく食べました。いろりの灰の中に火箸でするめを押し込みます。いい香りがしてきて、灰の熱でまるくなってもり上ってきたら食べ時です。手にとって、パタ／＼と灰をたたいて落とします。細かくさいて、しょう油をつけて食べます。私たちにも配られました。あたたかいうちは、やわらかくておいしいものでした。

人に好かれるという事は、簡単なようでむつかしいですね。堅苦しくてもダメだし、八方美人は信用されないし、お調子やさんだと敬遠されるし……。私が気軽に訪ねて行けて、安心して話し合える友というのと、価値観が同じか、一緒にいて楽しいか、人を引きつける何かを持っている人のようです。

ところで「米寿」を迎えた母は、現在とても元気です。

あの六月の祝いの日、ホテルで

「お母さん、子どもたち四人から何かプレゼントしたいのだけ

ど何がいいですか。」と聞きました。母は即答しました。

「卓上ミシンがほしい。」と。理由は、五十年以上使ってきた足踏み式のミシンの調子がよくないからとのことでした。今でも自分の普段着のブラウスやスカート、キュロットは縫うそうです。これからも新しいミシンで服を作りたいという意気込みで、六十三才の私は、圧倒されてしまいました。

さっそく翌日、母をつれてみんなで都城市内までミシンを買いに行きました。一体、母の健康とこの意欲は何からきているのでしょうか。母は自分で「朝二時間、夕方二時間の草取りかもしれない。」と言っています。そうして、もう一つの秘訣は、ご近所さんがよく訪ねて来て、お話していかれることだそうです。そういえば、私が昼間電話すると、よく

「今ね、ツルエさんが見えてるの。」とか、「今、ミキちゃんが野菜持って来て下さってるの。」とか、「フミさんと、ツルエさんと今度旅行に行ってくるから。」「トミさんが、留守中に花に水やって下さったの。」とか、いろんな話はずんだ声でしてくれます。

親戚の兄さん達が母を元気づけようと訪ねて下さって、酒盛りが始まると、母のところから電話がきます。

「銭はかかっどん、たびたび庄内にもどって来い。」とか、

『庄内』への原稿待ってるぞ。」等の声がとどきます。

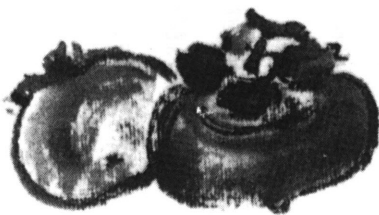
二年後は、父の十年祭と母の九十才のお祝い卒寿です。

母は

「お父さんの十年祭するまでは、元気でいなければ。」が、口ぐせです。

二年後への楽しみができました。

又、母や、みなさんに会えるのです。



俳句

平田(中二) 高橋 かおり

日まわりや大きな種をおとしてね

木洩れ日のそそぐ教室風薫る

焼きいも売り香りを残しながら行く

祝吉町(高三) 前田 茉莉子

七夕の竹ずっしりと重きかな

原爆を昨日のように話す人

世界中の向日葵の数何本か

平田 平田 ミチ

百までは紅さすつもり生身魂

落とし水玄界灘を目指しけり

子が泣けば母も泣きたし水温む

西区 清水 たつ子

冷や汁てふ郷土自慢の夏料理

秘め事の願ひ叶えや星流る

子等去りて虚ろな広き夏座敷

町区 山元 マス子

蛸や宿題親子励みおり

カメラ持つ親も走りて運動会

寺帰り心満たされ白日傘

祝吉町 宮田 安子

ポケットにぽけっと辞典山笑う

囁りのまん中にゐる自適かな

眉目かたちよき鮫鱈の見当らず

鷹尾 菓子野 康子

球場が好き樺落葉がもっと好き

川上に幣のそよぎし稔りかな

コスモスの揺れて七色風となり

菓子野 長岡 昭光

盆過ぎし娘孫帰り羽根伸ばし

年一度遺影の前にまず一献

汗拭い坊さんお経も二十五分

杉山の一偶白し栗の花

十人中九人がメガネ赤トンボ

花苗を植えてひとつの年用意

西区 故蒲生 敏子

祝吉町 前田 みづえ

漣てふ朝顔の種採りにけり

「待ちぼうけ」歌うオウムや広島忌

帆袋の風いっばいや秋に入る

東区 内野 かね

クリスタル小鉢にサラダ春の色

不動池水面に浮かぶ紅葉かな

朝市に山と積まれたねぎきゃべつ

蒲生敏子さんは、「庄内俳句会」の同人として本誌に秀句の

数々を投句していただきましたが、病に冒され本年六月不帰の人となりました。ここに謹んでご冥福をお祈りします。

(編集部)

子や孫に語り伝える話

三島地頭の逸話など

妻ヶ丘町 瀬戸山 計佐儀

前書き

平成十二年十一月九日に荘内商工会創立四十周年祝賀会があり、安永（後の庄内と西岳地方）や三俣の発展の基礎造りに顕著な功績のあった「三島地頭」について記念講演を依頼された私は、一時間二十分位話したのだが、三島通庸が新都城地頭として明治二年九月に赴任して来てから百三十年目にも当るので、地頭の曾孫に当る義温・昌子夫妻も招待・臨席された。氏は東大卒、車両関係の諸会社の取締役や社長、顧問などを歴任された方で、お年は八十三、四歳位に見えた。

会終了後の晩餐会の折、私に「東北地方等の通庸ゆかりの土地を案内しますが、行かれませんか」と温かく誘って下さった



三島通庸公のひ孫来訪

が拝辞した。有難いことだが、私は齡傘寿に達し、長距離の旅は億劫になったからである。

私は昭和四十五年版「都城市史」や七牟礼純一の「三島通庸」三島義温の「三島弥太郎の手紙」「鹿児島県百科大事典」

「宮崎県百科大事典」瀬戸山の「安永を開発した人々」などを参考資料にして話を進めたのだが、永年に亘って民俗調査をした際の古老（特に瀬之口湊・福留福次・南崎吉二・高野等の諸翁）の口碑も殆んど取り入れて話をした。

地頭生涯の概要

通庸は天保六年（一八三五）六月一日、鹿児島市の上之園で生れ、父通純は島津藩の鼓の師範で人情に厚く律儀な人で、母の秀は女傑で快活な人物であったという。通庸は幼名は林太郎、成長に連れて弥兵衛・通庸といい、小姓として仕え乍ら勉学に励み、兵学や史学を好んだ。兵学の師である伊地知正治も「弥

兵衛は尋常の子に非ず、南州の鑑識通りである」と称したという。

当時の薩摩藩は、藩主島津斉彬なりあきびのもと人事を刷新して洋式の技術を導入し、西郷隆盛や大久保利通等の若者達が台頭した時代で、尊皇攘夷や倒幕の機運が醸成じょうせいされる中、文久二年（一八六二）に寺田屋事件が起きて通庸もこれに連坐し、寺に蟄居・謹慎を命ぜられた。

元治元年（一八六四）に柴山和歌と結婚、七月薩摩軍が長州軍を破った禁門の変では、通庸は小荷駄方として後方部隊を指揮（二十九才）し、慶応三年（一八六七）倒幕のため藩主に従って京洛に入った時は人馬奉行となった。十月に將軍慶喜よしのぶが朝廷に大政を奉還し、同四年一月の鳥羽伏見の戦では後方参謀を担当した。戦線は江戸から関東・北越・東北へと拡大し、八月には彼は一個大隊を率いて越後路や会津の戦いに参戦し、九月八日に明治天皇が即位されると、藩命はんめいによって会計民事奉行となった。

明治二年一月に薩長土肥の四藩が版籍ばんせきを奉還するや、全国二七〇余藩もこれに従って明治政府が誕生し、薩摩藩庁には家老に替って治政所を設け、六月には西郷の推薦で通庸は都城地頭に抜擢されたのであった。

都城新地頭として赴任

版籍奉還後は藩政改革の波が都城にも押し寄せ、藩内最大の私領として正平七年から六百年來都城島津家が支配して来た都城も鹿児島直轄となり、私領主の第二十六代久寛も都城を離れて鹿児島島の玉里屋敷に移り住んだ。

明治二年九月二日に

通庸は都城新地頭として着任し、広小路（今の田中書店の南側）の廣口わたがうの洛陽旅館を役宅として「都城地頭役所」の看板を掲げた。



ところが都城領主の旧家臣達は旧主久寛の新地頭就任を願った。代表して明道館教授の高野適齋安恒が漢文の陳情書を呈出したが、時勢を知れと叱咤し、士族を剥奪はくたつして平民に落した。

日ならずして夜更に玄関に変な音がするので出て見ると地頭役所の看板が割られ、投げ捨てられている。これを見た地頭は苦々しげに「都城ん奴等やつだんの刀は薪割用か」と言い捨てたという。又しばらく経ってから、夜半に水か何かを玄関前に撒まくような音がするので出て見ると、辺り一面に下肥しもじえ（人の糞尿で、家畜

の物より悪臭を放つ)を撒き散らしてあった。

三島地頭の再来と業績

地頭の排斥運動は高まる一方であるので、三島は一旦鹿児島に引き揚げ、善後策を充分練って二ヶ月後に再び都城に來たが、旧領主の館の近辺は士族が多く居住しているので、旧役宅より北方二里近くの安永(今の庄内)の城の東麓に役所を設置して、都城を上・下庄内と三俣の三郷に分ち、大御支配との二大政策の許に治政を行った。

大御支配とは昭和二十年敗戦後の農地大改革に類するもので、家老など高い身分の者は地主として多くの耕地と作業人を所有して而も貢納もないのに、住民の殆どである農民は小作人として収獲の八割を貢納(あげし)のせねばならなかった。地主の土地も一旦全部取り上げて、一率に一戸当り田二反二畝(二一・ハアール)、畑三反一畝余(三二・五アール)づゝ割当てたので、下級武士は農民と共に大歓迎したが、高中級武士などは大変憤り「三島地頭はグワンタレ(悪い)地頭だった」とその子孫に当る古老から私は聞いたことがある。

三島地頭が再来して安永に構えた地頭役宅は鶴翼(庄内)城の東南麓で、明治三十年年代初に來訪して大開墾した前田正名の

一步園となった。(彼は薩摩城下士・漢法医の六男。明治二年フランスに渡り、明治十年帰国して政府の殖産工業に献身し、農商務省から山梨県知事(明治二十一年)農商務局長、東京農林学校(東大農学部の前身)長を兼務、二十三年に農商務省次官となったが、後に上官の陸奥宗光大臣と意見が合わずに辞職し、全国各地の開墾に終始した。(精細は「庄内」六号に投稿)三島地頭は、その後役宅東部と山久院(初代都城領主の廟墓)の南部に住宅街を造成し、東西南北に住宅街路を縦横に造成して馬場割し、天神・宮地・安永・北郷・梶・元町等の名をつけ、そして市街地は住宅街地の南部に置いた。

市街地造成に当っては、郷内各地から土民を麓に糾合したのであるが、その子孫としては今に高橋・徳永・熊原・岩満・汾陽・濟陽・黒岩・西川・野口・南崎・持永・立野・宇野などの諸家が残っており、坂元・清水・小林の三家は在來家だったといわれており、清水(善太郎家)宮竹・海江田諸家の來歴の精細は不明である。(この項については、南崎洋史氏の記憶による。)

三島地頭は、地方の發展は道路の改良にありとして、従来の九十九折の狭い畦路を四間(七・二メートル)幅の直線道路と

し、四方にそれを伸したのであったが、新路線は自ら乗馬を進めて馬上から下知し「馬の進む方向に道を造れ」、と命じたという。そして人夫賃は支拂わず一戸一人を徴発しての道路造成だったが、耕地や家屋敷を無償で貰へるし生活の前途は洋々としていたので、誰一人不平等を洩す者はいなかったという。

又新道路の造成には割当制を採り、早く立派に仕上げた者には手拭一筋を賞として与え、休憩時間には徒歩競走をさせて、一等賞には同じく手拭一筋を与えたので、重要幹線道路の都城・上荘内線の如きは一日で完成したといい、或る日こんなこともあったという。

休憩時間に地頭は四方のどこからも良く見える畦に腰を卸し、両脚を拡げて腰から下の着物を左右にはだけて禪をも外し、故意に男性を露出して見せびらかして

「おい、皆の者。俺の男を見たい者は見よ。お前らの物と競べっこしても良いぞ」

と大音聲に呼ばわったので、何事かと皆が地頭を一斉に振り向いて見て、驚くやら爆笑するやらだったという。

三島地頭は奇想天外なことをして人夫達を笑わせ喜ばせ、楽しんで作業して能率を上げさせる雰囲気を作ったのであった。

彼は洪水の度に氾濫する庄内川の改修作業を行って田畑を守っ

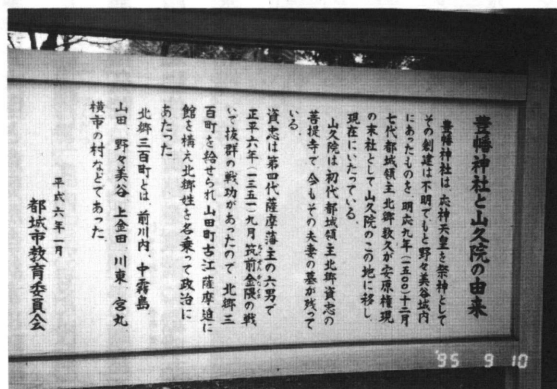
たという。

地頭は又、敬神崇祖の精神涵養のため、都城初代領主資忠の廟墓である山久院の東隣りに野々美谷の諏訪神社をここに移設し、餅岡の石牟礼の頂上に母智丘神社を建てて、五穀豊穡と牛馬の健全育成を祈願したが、東麓の広場には陰陽桜を植えた。この桜は左右に大きな枝が分れ、花期が左右異なる桜であるが、今でも健在で、幹の直径は六十センチ余もある。

民治の要は敬神にありと考えた地頭は、先述の母智丘神社の建立のみならず、初代都城領主北郷資忠の廟墓、山久院の東隣りに野々美谷の諏訪神社を合祀して豊幡神社とした。

又、地頭は産業を奨励して、養蚕、養鶏、茶業、植樹林業の振興を図ったが、明治三年には、鹿兒島から学者の三原宗五を招いて学校を建て剣道をも学ばせた。

地頭の兵制は屯田法を採用し、常備隊を四小隊、砲隊四門の



外に楽隊を置いたが、音楽的に西洋式のラッパ吹鳴を中心とするもので大変珍しかった。或る日總隊の大訓練を蕘原の原頭で行なうので、見物したい者は行って見よと住民に周知宣伝したので、噂を聞いた都城（下荘内郷）の武士達（旧家臣）も皆珍しがつて見物に行った。見たこともなければ聞いたこともない軍服とラッパの音楽的な吹鳴によって、兵士達は吶喊・前進したり後退や左右に方向転換するので真個に珍しかった。

ところで總隊の大訓練が終わって都城の士族たちが姫城の治政所に帰って見ると、これ如何に建物は跡形もなく叩き壊されていた。地頭から留守の虚を突かれたのであった。

三郷分割の一・下三俣郷は明治三年九月末に梶山と勝岡の二郷を合わせて下三俣郷と称し、これに対して高城を上三俣郷と称して、三島は下三俣郷の地頭を兼務したが、鹿兒島の知政所から伊地知正治参政と大隊長の桐野利秋が来て実施調査し、広い原野を下三俣郷と定め、三島地頭は直ちに人夫の男女を徴して労役に従事させ、盛んに土木事業を起し、梶山から諏訪神社、今の三股小学北部を西へ通じ東北に転じて山之口に至る路線を初め、今の三股町の重要路線を開発して街路を整え、郷内の各地から土民数十戸を招いて住居させて山王原と称し、役所を設け学校を興し、常備隊一小隊を置いて大いに三股の開発を行っ

たのであったが、新道造成の請負制や徒歩競歩の余興は、ここでも行ったことであろう。

中央に於ける活躍

明治四年末になると廃藩置県が行なわれて、南九州には美々津と都城・鹿兒島の三県が設置され、三島は都城県令（今の知事）に推薦されたが分に過ぎると言って辞退したので、東京に呼ばれて西郷から東京府令に誘われたが、これも固辞して大久保利通を推薦して実現した。そして更に西郷から府令（東京府知事）の下で府参事に勧められたがこれも辞退して、府の権参事として勤務した。それは明治四年十一月のことであった。

翌五年十一月には推されて教務省の大丞となり、七年十二月には推されて酒田県令となって土地の開墾などを行い、農民騒動に対処して功績を挙げ、九年八月には山形県令となり、農業振興や道路建設その他に成果は甚大であった。

明治十四年、内務卿の松方正義は不平士族や自由民権派を押えていたが、強力で政府転覆の恐れがあったので、福島県政を牛耳っていた福島自由党の河野広中を押さえるために、明治十五年一月、松方は三島に福島県令を兼務するよう要請した。河野が牛耳る県会は三島の提案する議案を凡て否決したが、それ

を無視して施行したので所謂福島事件が発生した。しかし、三島県令は河野らを内乱罪で逮捕したので、三島は鬼県令と呼ばれた。

或る日河野が或る旅館に党员を集めて何かを協議しているのを探知した県令は、部下に階段を叩き壊こわさせて二階と一階の上昇降を不可能にしてやったという逸話がある。

翌年に三島は栃木県令をも兼務し、次いで内務省土木局長に就任し、多年の功績によって華族に列せられて男爵となったが、十八年十二月には内務省の社寺局長及び初の警視総監に任ぜられて鬼総監の名を馳せ、二十一年十月に逝去した。享年五十三歳。

庄内小学校内と三股町山王原には三島の彰徳碑が住民の手によって建てられている。

不如帰ほととぎす

こんな民話がある。

昔ある所に二人の男兄弟がいたが、両親とも死んでしまった上に兄は目が見えなかったので、弟が毎日日雇い人夫として僅かな賃金を得て露命をつないでいたが、いつも弟が炊いて食わせる飯は粟飯か麦飯か稗飯ひえばかりで一度もうまい米飯は炊いて

食わせたことがなく、弟はいつも舌鼓を鳴らしてうまそうに食べるので兄は疑った。

「弟の奴、俺が目が見えん事を幸に、自分だけがうまい米の飯を食べていて、御汁も魚や肉を煮て食っているに違いない。」
とあって、「ようし」と言っつて弟の寝ている所に薪の割木を持って来て頭を叩いて殺し、包丁で弟の腹を切りさいて手で胃袋の中を探ってみたところ、胃袋の中は草の根許りであったので、兄は驚くと共に

「あゝ、弟は自分では粗末な物だけ食べていて、俺には、粗末ではあるが穀物を食べさせていたのか。」

と反省したが凡ては後の祭りまつりで、大声を挙げて泣いて嘆き悲しみ続け、毎日毎晩大声で泣き続けたので竟に咽から真赤な血が流れ出て止らず、遂に死んでしまった。

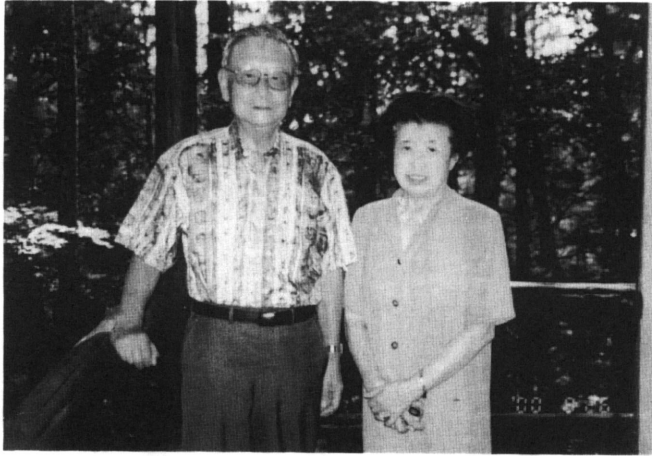
そして死んだ兄の魂は小鳥になったが、その小鳥も毎日毎晩泣き続けたので咽から多量の血が出続けているので、今でもその小鳥であるホトトギスの口は真赤なのだという。

話は変わるが、熊本県の南部には水俣市出身の徳富蘆花ろかという小説家しょうせつかがいて、「不如帰ほととぎす」という題の家庭小説を書いて明治三十一年から三十二年まで新聞に連載し、読者に紅涙を絞らせた。小説「不如帰」の大意は次の通りである。

主人公の川島武夫は明治の中期に東大農学部の前身駒場農学校を卒業して、十七才で単身アメリカのマサチューセッツ農科の大学に四年間留学し、農政学を専攻して帰朝後は明治政府の中核で勤務、後銀行界に転じて横浜商工銀行の頭取となり、更に日本銀行の総裁

となつて六年後、五十二歳で現職のまま逝去したのだが、アメリカから帰朝後、陸軍の高官の息女浪子と結婚して人からも祝福され、夫婦円満な楽しい生活を送っていたが、或る日新妻の浪子が大啗血して、二人

の楽しい生活は奈落の底に突き落された、という筋書きである。武夫のモデルは三島通庸の長男弥太郎であり、浪子は鹿兒島出身で西郷隆盛の従弟である元帥陸軍大将の大山巖の娘であつ



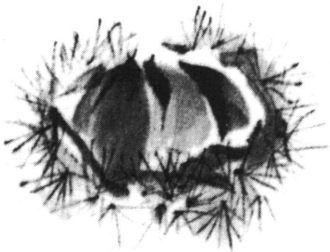
三島地頭の長男弥太郎の曾孫（義温・昌子）御夫婦
（平成12年夏、別荘(?)で写す）

たという。

（因に蘆花には、都城を舞台にした小説「寄り木」がある。）

スポーツマン

三島通庸の四男弥彦は天下の名門コース学習院を経て東大法学部に学んだが、万能のスポーツマンで、明治四十五年の第五回オリンピック大会に日本では初めて参加した。百メートル、四百、八百の陸上競技に出たが、成績は何れも振るわなかったものの、日本の国際スポーツ進出の足がかりを作り、日本のスポーツ振興に功績があつた。（平成十二年十二月一日）



戦時下の中学校生活

西 区 清 水 省 三

私は昭和十二年四月、旧制都城中学校（現泉ヶ丘高校）に入学しました。新しい帽子に新しい徽章、綿の霜降り服を着て、革製の脊嚢を背負い、皮製の編上靴、ゲートル（巻脚絆）を巻いて、二里（八キロメートル）余りの道を自転車で通学しました。当時を振り返って思い出すことを書いてみることにしました。

○通学路

当時の通学路は、現在のような道幅の広い舗装路ではなく、ほこりっぽい砂利道であり、特に今房街道の一部は、荷馬車の轍が二本の深い溝を作り、厳寒期には凍りついて、誤って溝にはまり、滑りころげることもしばしばありました。霜の解けた帰り路や、雨上りはドロコン道になり、車輪にこびりついた泥をおとしながら通りました。雨の日は、番傘をさしての片手乗りだったので、この悪路をきらって乙房まわりで通学しました。大根田正坂うねだの途中に、ひとりの婆さんが回転饅頭を売ってい

ました。部活の帰り空腹に堪えきれず、前後に上級生が居ないのを確かめて、熱い饅頭を買い、ポケットに入れて山道で食べたことも何度かありました。時々ばれて、観瀾舎（後述）で説教をされましたが、今は饅頭屋も、山道も、パチンコ屋の駐車場になっていきます。私達は、この坂を回転坂と呼んでいました。また、行き帰りによく世話になった大根田橋北詰の自転車屋さんも、今は跡形もありません。

○教科と学習内容

教科も学習内容も現在の課程と随分違っていました。特に違うのは、武道と教練の時間があったことです。武道は、柔道か剣道のどちらかを選択させられ、私は柔道を選択し、部活も柔道部にはいりました。

教練の時間は、週三時間あり、月曜日の一時間目は全校教練、クラス単位が一時間、もう一時間は学年単位でした。

陸軍から、配属将校が派遣され、その下に二、三名の予備役の下士官が指導教官として居りました。直立不動の姿勢や、敬礼のしかたなど、各個教練にはじまり、分列行進、匍匐前進など、運動場だけでなく、野外教練やテントで一泊する夜間教練もあり、三年生までは徒手教練でしたが、四年生になると執銃教練に変わりました。三八式歩兵銃という四キログラムもある

重い銃を担いでの分列行進や行軍など大変な難業でした。十二月にはいると、陸軍大佐クラスの人が査閲官として来校し、閲兵や戦闘演習など検分しました。我が校は、いつも査閲官を満足させる成績を挙げていました。

○学友団と観瀾舎

入学後、居住地区別の学友団編成が行われ、庄内町、西岳村出身者は、庄内学友団に属しました。学友団活動としては、学友団別に行われていた歓送迎遠足、農園での野菜作り、それに夏休みになると、山之口町にあった学校林の下払いが、区域を分けて学友団別に割当てられ汗を流しました。この下払作業では、ウルシにまける人も多く、ひどい人は夏休み中苦しめられていました。

庄内には、旧薩藩の郷中教育の一環として設立された「観瀾舎」があり、庄内、西岳出身の中等学校生徒（中学校、商業学校、農学校）は、合格発表があると、すぐ、舎に集められ、在校生で行われていた春稽古の見学、入舎についての注意、生活指導が行われました。校外生活では、学友団員即観瀾舎生という規範の中での生活でした。

観瀾舎は、現在のJ A庄内支所の南側の石造倉庫の南端附近にあり、正面玄関の破風下に、「観瀾舎」と横書きで墨書され

た、部厚い板の表札が掲げられた洋風の建物が剣道場として使用され、隣接の和風建物が柔道場や、集会場所として使われました。四年生が互選した舎長のもとで、四年生の合議制で運営されていて、五年生になると、進学や就職試験に備えて自主参加していました。

観瀾舎の主な活動は次の通りでした。

① 毎週土曜日の武道稽古（但し、テスト前は中止）

② 毎週日曜日の神社参拝と清掃作業（但し雨天中止）

諏訪神社、豊幡神社、南洲神社の順に参拝と境内の掃除をしていた。早朝六時より約二時間

③ 春・夏・冬休みの武道稽古

春稽古と暑中稽古は午後三時から、寒稽古は早朝五時から、

それぞれ一週間程度、約二時間ぐらい。

④ 不時に行われる試膽会

土曜日の夜、きもぶら肝試しと所謂「説教」と呼ばれていた生活指導

が行われていた。

⑤ ぎしんでん義士伝

当時この行事は赤穂義士の義挙を偲ぶものとはかり思っていたが、薩摩義士の忠烈を顕彰するものであったかも知れない。

一月三日夜八時頃から隊を組んで、歩いたり、馳足で走った



観瀾舎（玄関のついでているのが剣道場、左側が柔道場）
これは昭和8年3月卒業記念写真であり「観瀾舎」の表札はまだ掲げられていない

りしながら、町内三社（諏訪、豊幡、南洲神社）に参詣し、更に母智丘神社の広場まで行き、そこに屯して肝試し等行い、平田から乙房までまわって帰るといふもので、走っているときは「ワッショイノワッショイノ」かけ声をかけながら、歩いているときは軍歌を歌うなどして、四日の午前三時頃帰舎、残留組が作ったゼンザイを食べて、談笑しながら夜を明かした。

○支那事変勃発

昭和十二年七月七日、蘆溝橋事件勃発、政府の不拡大声明にもかかわらず、戦火は中国大陸全土に拡がり、支那事変と呼ばれるようになりました。

都城の歩兵二十三聯隊も何回かに分けて出動しました。木島部隊とか佐野部隊、真方部隊など覚えていますが、その都度、全校生徒、都城駅前で見送りました。

大陸での戦争は、勝ち戦^{いくま}続きで、十二月十三日南京陥落、銃後は敵の首都占領に湧き、都城でも提灯行列が行われ、私達、中等学校の生徒も参加し、勝利に酔いしれていましたが、あの広大な中国大陸の点と線を奪ったに過ぎなかったようです。

戦争が拡大するにつれ、犠牲者も増え、遺骨となって無言の凱旋をする人もあるようになり、学校でも観瀾舎でも、遺骨出迎えに行きました。

また、町村葬があると、当該学友団員は早退して参列し、市葬には、主に二年生や三年生が、学校代表として参列しました。

○祖国振興隊

昭和十二年十二月に県下の学校に祖国振興隊が結成され、いろいろな作業に狩り出されるようになりました。台風県の当地方では、風水害復旧作業が多く、志和池の田圃の復旧、萩原川の堤防復旧、十四年春休みは、南那珂郡本城町（串間市に合併）に四泊五日で田圃の復旧作業に従事したことなど覚えています。後では、出征兵士留守家庭に、農作業の応援に小グループで派遣されることが多くなりました。

○物資不足と服装の移り変わり

戦争拡大に伴って、物資不足が深刻になりはじめ、私達の一級下の人から、帽子や服の色が、カーキ色（国防色とも言った）に変わり、スフ（人工繊維）生地で、折襟の服になり、脊囊もズック製になりました。

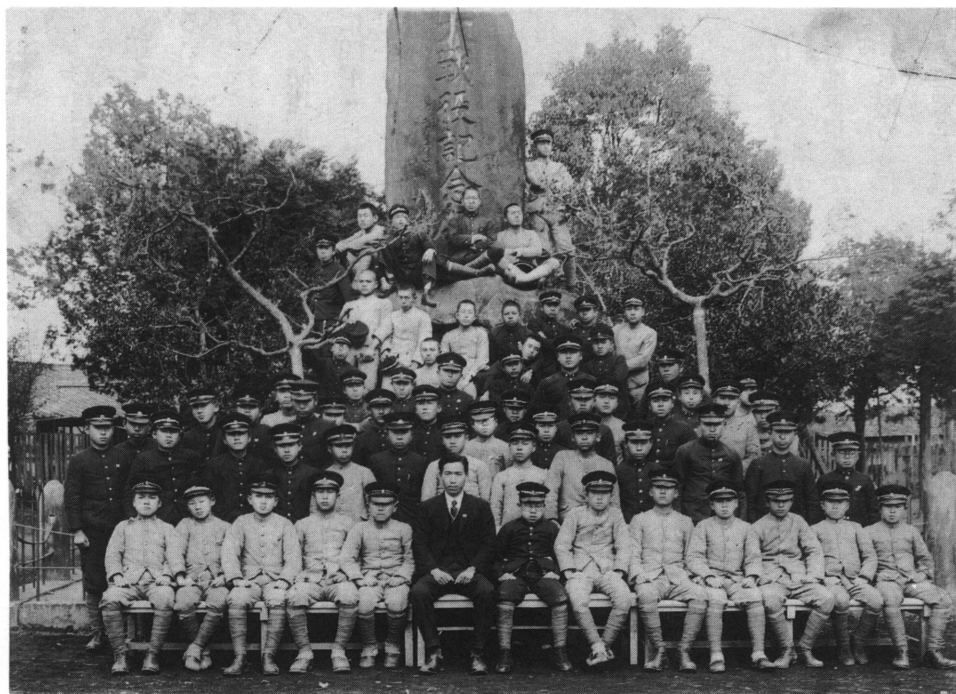
はじめは、革の編上靴に限られていた教練の時間も、ズック靴や地下足袋でも良いことになり、登下校時は、棕櫚緒の下駄履きも認められ、棕櫚の皮を持ち寄って、全校生徒下駄の緒作りの講習会が開かれたこともありました。

○むすび

紀元節（二月十一日）、天長節（四月二十九日）、明治節（十一月三日）は、たとえ日曜日でも登校して式典が行われ、陸軍記念日（三月十日）、軍旗祭（十月二十六日）は軍の行事に参加し、校内でも行幸記念日、創立記念日など校内行事も多く、また、従軍記者や帰還兵の体験談講演、陸海軍のお偉方の時局講演会などで授業が打ち切られることも度々でした。

今学校では、週五日制になり、学力低下など心配されていますが、私達の時代は、休日こそ少なかったものの、授業時数としては、今よりもっと少なかったかも知れません。それでも相応の上級学校に進学していったのですから、勉強だけはきちんとしていたのでしょう。

このように非常時意識が高まる中で、昭和十六年十二月八日（大詔奉戴日）を迎え、米英とも戦端を開き、支那事変と併せて「大東亜戦争」と呼称された大戦争に突入しました。私達が中学校五年の冬でした。終り



觀瀾舎 昭和13年3月卒業記念 於神柱護国神社境内
 黒服は商業学校と農学校生、白（霜降り）服は中学校生



觀瀾舎 昭和17年3月卒業記念 於庄内小講堂玄関
 中学、商業、農学校生全部カーキ色の服、下駄履き
 黒い帽子が5年生、最前列の1年生は戦闘帽

庄内の風俗あれこれ

東 区 大川原 紀美生

まえがき

私たちの町庄内は旧薩摩藩に属し、方言習俗慣習も藩内殆ど似通っており共通した年中行事が数多く見られます。

特に都城を中心とした所謂都城島津氏領内のそれは都城盆地と言う地勢的な関係もあり各地区共通した習俗慣習がたくさん残っていました。しかし、終戦或いは高度経済成長期を節目として、私たちの生活環境も変貌しこれらの習俗慣習も殆ど姿を消してしまいました。

本稿では、私が体験したものの、親や先輩から聞いた話、また既に発表されているもの等も含めて、正月から田植えの時期までを経時的に私なりに纏めてみました。

元旦（飾り付け）

正月の祝いや飾り物は、町内だいたい同じですが、床の間の活け花は、松、竹、梅を活ける。飾り餅は、白半紙を敷き、ゆ

ずり葉、うらじろをおき、その上に大きな鏡餅を載せ、段々に餅を重ね二段か三段その上にミカンを置く。室内では、神棚、仏壇、大黒様、机、かまど、台所に置きその他には車、馬小屋、山神、水神、臼、せいろ、道具箱などに供える家もある。

門松は松、竹、梅を、基本とし、シラスを入れ、シメ縄、ゆずり葉、千両や万両などで飾り付け、ミカンを正面に置く。門松作りは一時絶えていたが、近年あちこちで復活され始めている。

玄関の飾りは一時、紙に印刷されたものを貼っていたが現在は市販のシメ飾りが大勢を占めている。

元旦（若水と料理）

若水は、はつぽ水と言い、家の主人が早朝に井戸から汲み上げるものだったが、水道の普及した現在では全くみられなくなつた。

元旦の料理は家族全員で新年の挨拶をする。お雑煮には餅に里芋、コンブ、オヤシなどを入れる。また餅、里芋の吸い物と、かずの子等を用意して、家族で祝杯を酌み交わす。その他町内各地では、新年会といって親類兄弟など身内の者だけ寄り合い、祖父、祖母の家で毎年新年の祝いをするとことや、親類回り番で新年のお祝いをする。また、地区の各班では回り番で新年の

祝いの集りをするところが多い。

正月の遊びと初詣り

男の子供の遊びは、破魔ウケ、ギッチョ、カッタ、メダマなど多種多様であったと聞いているが、戦後少しづつ姿を消し、現在の子供はテレビゲームに夢中となっている。初詣は各地区にある神社や寺に除夜の鐘と同時に詣でる人や、元旦の朝に詣でる人それぞれである。

二日山 (二日)

二日山は、二日の朝早く、暗いうちに馬をひいて家族で薪採りに行き、山から帰ってから朝飯を食べる風習があったが、オリンピック (昭和三十九年) が行われた頃を境に、高度成長期に入り次第に行われなくなり、今は、全く行われない。

二日祝い (二日)

ふっかゆえ、といって親元に餅や祝の品等をもって行き、近親者が集まりお祝いをする。昔は親元が遠方にある所などは、朝暗いうちに馬車に乗って行ったと云う。この日は子供たちにとっては楽しみなお年玉を貰えるので、寒くても早起きしたものであると云う。

稽古初め (三日)

習い事をしている人などが (柔道、剣道、等)、寒稽古といっ

て正月三日には、稽古初めがおこなわれる習慣があったが、現在には全くみかけない。書道を行う人は、書き初めの日でもある。

七日雑炊 (ナンカズシ) 正月七日

昭和三十年代頃まで町内でおこなっていたもので、せりの葉を摘んで大根、ゴボウ、人参、菜、芋など七種を入れて雑炊をつくり、家族全体で食べて健康を祈る。七歳になる子供のいる家では、子供を親類や近所を連れてまわり、雑炊をもらって廻る習慣があったが近年殆んどみなくなった。また地区によっては、持参したお椀に、ずし、を入れ、お年玉をやるところもあった。七歳児のいる家は親類縁者が集まり祝宴をするところもあったが、最近は見かけなくなった。

鬼火講 (正月七日)

オネッコは、正月七日にほとんどの地区で青年や子供の行事として無病息災の願い事として行われていたが、戦中戦後しばらく途絶えていた。しかし、近年、親子会や青壮年を中心に地区活性化対策として取り組む地域も出て来た。

祝い餅下げ (正月十一日)

正月に飾った祝い餅を下げる日である。下げた餅を煮て食べる場合もあったが、ゼンザイをつくる家が多い。祝い餅を下げる十一日の風習も現在はまちまちになった。

奉行人の交替（一月十二日）

戦前の一月十二日は奉公人の入れ替わりの日になっていた。この日に、一年分の俸給の精算をしていたが、この慣習は終戦後に消滅した。また、古くは、地区の諸係りの交替もこの日に行われていたと云う。

メノモチ（一月十四日）

正月十四日に行っていた。メノモツとも言うが、餅を小さく四角に切ってえの木の小枝にさし神棚、台所、軒、おかま、俵、馬小屋等に飾り、またお墓に供える風習である。メノモチをさした小枝を、雷が鳴るときに焚くと落雷を免れるといい、また反対に、メノモチの下で病気になる、なかなか、なおらないといったえられていた。メノモチ飾りをやっている家は今では珍しくなった。

モグラウツ（一月十四日）

この、モグラウツは、農作物に害をなすモグラ退治の習慣で、古くから子供の行事として何処でも行われたが、昭和三十年代に、やるころはなくなってしまった。近年、平田地区で復活され、子供たちや、地区にとっても喜ばしいことである。竹の棒の先に藁を三つあみしたものをくくり付け、それで地面を打って各家庭をまわり、お礼に餅や飴などをもらう。たまには、餅

のかわりに大根を餅の形に似せてくれる家もあった。

山神祭り（一月十六日）

山神祭りは、正月、五月、九月の十六日に行う。この祭りは個人的にする人もいるが、主に、山仕事に関係する人達が集まって行う山仕事の安全を祈る祭りである。その日の御馳走はどの家でも作っていたが、おはぎがよくでていた。山神祭りの日に山仕事に行くとき災厄にあうといわれ、山に行くものではないと信じられていた。この祭り個人の家では今はほとんどみられなくなった。現在では、山に関係ある仕事をしているところだけが行っている。

メノモツ下げ（一月十八日）

えの木にさして供えていた餅を下げて食べる日である。この餅を子供に食べさせると健康に育つといっって必ず食べさせるものであった。

二十日正月（二月二十日）

この日は仕事を休む習慣になっていて、たいていの家では、正月三日にあいさつにいけなかった家に、あいさつにいくものであった。家によって二十日正月にひもじさをこらえると、一年中ひもじいおもいをするといわれていて、たくさんごちそうをつくりたべていた。このころで正月の餅はほとんどなくな

るころであった。

送り正月（一月三十一日）

近ごろでは、「今日は送り正月じゃな」という話はきく事があるが、やっているという話はきかない、昔は、三十一日に送り正月といって、農作業を休んで御馳走をつくりたべたといわれる。御馳走といっても、そばとからいもを練りあわせたそまんだごをつくってたべたものという。

二月のころ

節分（二月三日）

節分をところによっては、ヤッバレともいい、厄年の人は厄払いをするところもあった。また煎った大豆で、「鬼は外、福は内」と叫びながら家中の厄を払った。近年は煎豆に変わって落花生、餅、飴などをまくようになった。ところによっては、赤デコンで、酢のもんをつくり食べるようになった。厄が払われるとも言われていた。また、この日はヒオコシ（火吹き竹）の古いものに、藁の栓をして道の辻に捨てる習慣があった。栓をするのは貧乏神をこのヒオコシ竹の中に入れて逃げ出さないようにするためと云われていた。

針供養（二月八日）

縫い針等に感謝する日で、古い錆び針、折れ針をコンニャクや、オカベにさして土中に埋め、ねんごろに吊うのである。コンニャクやオカベはさしやすしい水気が多くて、しかも土中に埋めると、鉄であるので早く腐食し、危険性が少ないからである。縫裁関係者の間では、現在も行っている。

建国記念日（二月十一日）

戦前の紀元節で戦後は幾多の洗礼をうけて建国記念日として息をふきかえした。戦前は学校や官庁ではおごそかな式典が行われていた。

三月のころ

雛祭り（三月三日）

女の子の成長を祝して、ひな人形を飾りお祝いする。戦前は親類や知人が集まり、祝いに来る人は布を買って、みやげ物とした。また、女の子の芸ごとの向上を願って、地区の人が踊りをするところもあった。この踊りを「山くやし」という。山のように飾った人形を壊したから、この呼び名が生まれたものであろう。この日は、どこの家でもたいがいカライモンダゴを作って神仏に供えた。これは、甘藷を切り干しにして粉末にし水でこねて蒸したものである。また赤飯を炊いたり、お菓子などを

作ってお祝いしたが、すべて自家製で、もしこ、いりこ餅、よ
うかん、ゆきめし打ち出し菓子などであった。子供も参加して
菓子づくりの手伝いをした。このようにして、肌で母の味、家
庭の味が伝承されたのであろう。

彼岸の中日（三月二十三日）

彼岸の中日は里帰りをし墓参する。昼夜の長さが同じ日であ
り、暑さも寒さも彼岸までといわれる。寺参りや墓掃除を行い、
神仏に草餅を供えて先祖を供養した。この日、太陽が西山に没
する時は特に大きく赤くくるくるまわって極楽の本門から入る
などと古老たちは言い伝えている。家庭では、ヨモギモチなど
の草餅をつくる。フッノボツともいう。この草餅は芳香に富み、
薬草としての蓬の風味を存分に味わうことができる。そして、蓬
を食べることで人間の邪気を払うという伝承は広い。また、生
活の知恵が生み出したビタミン補充が重要であった時代の現れ
でもあろう。

四月のころ

トキの祭り（四月八日）

この日はトキという木の実の粉のだんごを作って神仏に供え
た。トキあるいはトチの木は、自然林が人工林に変わった現在

殆どみられなくなった。この木が多かった昔は、自然の恵とし
て種を拾い粉にして餅にして神に供え、またみんなの食用とし
た。また、わら包み、こも包みにして門口に掛けておいた。こ
れは福の神が門まわりをされる時お腹がすくので食べてもらい
気嫌をとる意味があったと云う。栗によく似た実である。

春祈念（四月中不定日）

春祈念と云われるものの中には単なる安全祈念、火祈念、馬
祈念などがある。祈念の日は、集落ごぞって集まり、飲んだり
食べたり踊ったり底抜けの酒宴が行われる。これは集落に不
幸が起らないように、そして集落に争いごとや、もめごとが
ないように一年中を仲良く暮らす意味の懇親を祈り念ずる行事
である。この祈念の中には、昔「馬つくり日」というのがあっ
て集落の適当な場所を定め各自の馬を曳いて集まり爪切などの
手入れをして終ると、酒盛りをしたという。また観音に馬の絵
を描いた絵板を奉納し、そのときすでに他人が奉納してあった
絵馬を持ち帰って自宅の厩の上の梁に祭って馬の無病息災を祈
念したものという。後になってこの絵馬は多量に作られ各戸こ
の絵馬を貼ったことが推察される。また火祈念には地藏信仰が
あったのではないかと思われる。地藏は火の神と考えられてい
る面が多いのであるが往時はよくこの地藏さんを見かけたが、

近ごろは殆んど見当たらない。また、この四月には、ワラベトリ（わらび狩り）に若い人達がよくいったもので、むかしはよく足半草履で朝はやくから出掛けたものである。

五月のころ

八十八夜（五月二日）

八十八夜で茶摘みが始まる。またこの日に蚊帳をだして干し準備するものであった。この頃から急に暖かくなり蚊の発生を意味するものである。なお、農家の種時きはこの日を基準にして行われる。すなわち、もう降雪おそ霜の害がないので農作業種下しをしてよいという一つの目安にこの八十八夜をしたものである。

五月五日（端午の節句）

男の子が健全に成長するように祈る全国的にひろく行われる行事である。各家庭では粽（チマキ）や柏餅を食べる習慣があるが、旧薩藩では「アクマキ」を作る。これはその昔、島津氏が戦に出るとき、陣地での炊飯の手を省くために作ったものであるといわれる。竹の皮にしめしたもち米を入れ、小豆などを混ぜて、藁でつよく包みを結び、木灰の灰汁で長時間煮ると中が褐色になる。これは外（竹の皮）にカビがきても中味は割合

に長く、旬日位は腐敗しないので重宝がられた。これを神仏に供え、親戚に配って、ともに男の子の成長を祝うのであるが、チマキはショウブの葉で結んで贈る。ショウブは「尚武」を意味したものであるという。チマキのほか、軒に「よもぎ」「しゅうぶ」の葉茎をさして悪魔よけとし、またしゅうぶ風呂をたて病魔よけにするなど色々行事が行われた。端午の節句を菖蒲の節句と称える民間の伝承があるが、一寸のなかに百節ある菖蒲を昆明（中国昆明池）百節の菖蒲といい、万病を治すものとして喜ばれた。このような行事によって家の中や人体の邪気を払い、悪気が体内に入るのを防ぐものとかんがえられた。また、ササモチ、カシワモチ等の草餅やハタツマキ（ダゴマキ）といって米の粉を竹の皮に包み、その中に「アンコ」を入れたものを蒸して作るダンゴのようなマキも作られた。近ごろは、庭先に鯉幟を掲げて折詰や祝い菓子など専門店に依頼し床の飾りなども男らしいもの、豪壮なものが用いられるようになった。鯉の幟を掲げるのは、鯉が竜と化して昇天するという登竜門の故事から鯉は出世の魚、男性的な魚という縁起が庶民の心を捉えたのであろう。

夏のころ

田植え(六月中、下旬)

農家では一年中で最も忙しい田植えが始まる。この田植えは明治中頃までは綱も引かず元肥も入れなかった。ただ、骨粉を苗の根本にもみつけ、骨粉が落ちないように、田舟と称するモロブタのようなものに積んで、植える人の背後をあちこち動かして植えた。植える人の遅い人は、隣の植え手からツポに入られた。ツポに入れられるというのは早い人が先から先に植えてしまうので、遅い人は植田にとりまかれてしまい出口をふさがれてしまうことをいうのである。明治の末期になってようやく印入り(しるしいり)の植え綱を使うようになったが、その当時この植え綱を農家では非常にめんどろがったという。この頃の田植えは付きものとして、おやつには大豆やエンドウの煮たものを籠にいれて田圃まで持って行き湯呑み茶碗ですくって配るものだった。またカライモダゴなどは良い方であった。食事は一日五回制にし、早朝出る前に茶の子といってお茶漬け(前日のひやめし)暖かい朝食、昼食、合い食、夕食で合い食はニギリメシやおハギか、ニギリメシにゴマをふりかけたものに大根の漬物で、とにかくお腹を膨らますことが大事であった。食事には塩ブリ、干トビウオなどとても塩辛いものが必ずつけ

られた。明治末期までは「田げた」というものがあった。これは田圃にカシキ(緑葉肥)をふみこむ道具で片方が三十平方センチメートルもあり、その四隅に綱をつけ、片方ずつ握っていて両足を手の力を借りて引き上げ引き上げ、広くまたいで踏み込む道具であった。父親は馬仕事でケシケシと大声をだし田よみをし、一週間から十日位かけて植える家が大部分であった。なお、シジンサー(水神さま)にお神酒をあげたりしていた。



母の自伝より

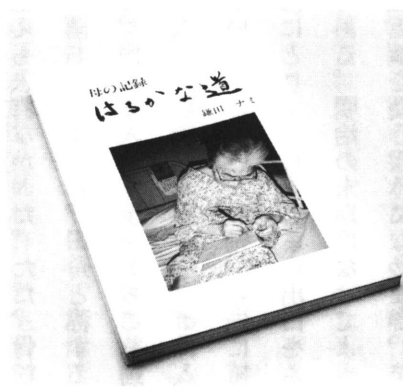
町区 鎌田 学

はじめに

私の母は、明治三十三年千草の村永家の長女として生まれ、庄内小学校卒業後は我が家で農業の手伝いをしながら過ごしていました。大正八年同地区の鎌田 巖と結婚、沢山の子供を産み育てながら明治・大正・昭和と波乱の生涯を送りました。

この間、母が日記として、また思い出すままの自分史として書き溜めた膨大な記録、それは便箋であったり、また包み紙や葉袋の裏であったり

しましたが、それを長崎在住の弟、定夫の家族が中心となり整理編集して一冊の本に纏め上げたのがこの「母の記録・はるかなる道」であります。



この中に「庄内の昔」を髣髴させる記事が散見されますので、差し出がましいとは思いましたが、請われるままに、その一部を抜粋寄稿させていただきます。

母の記録 「はるかなる道」

鎌田 ナミ

私の小学校時代

鹿兒島旅行のこと

私が小学校五年になったとき、五年生と六年生が修学旅行で鹿兒島へ行くことになりました。

私は鹿兒島旅行に行くために、四ッ身の着物を自分で仕立て、手っ甲、けはんも池田先生に習って自分で縫い上げ、父からわらじ二足作ってもらいました。

こうもり傘を杖にして、朝五時に家を出るときは、父が提灯をともし一里もある庄内小学校まで送ってくれました。母も早く起きて、おにぎり御飯を竹の皮に三包み作ってくれました。私はそれを風呂敷に包んで、背中から出して出発しました。

学校から七里（二十八キロ）ほど歩いて、福山という所に着きました。私は足の踏みかえしが痛くなり、その夜は一晚中、

担任の秋永先生が足に薬をつけてくださいました。

その頃は、まだ汽車というものは宮崎県にはなかったもので、鹿児島県の国分という所まで歩いて行ったのです。明治末年のことですが、鉄道はやっと国分まで開通しており、二日目は、みんな今日は汽車を見るのだと、喜び勇んで行きました。

だが、私と六年生の熊原アイさんは足が痛み、やっと国分駅にたどり着きました。

こうして、男の子も女の子も、風呂敷包みを背中の横っちょにくくりつけ、生まれてはじめて汽車というものになり、大喜びしながら、鹿児島まで行きました。

鹿児島駅で汽車を降り、西郷さんのお墓の所までなんとか歩いて行きましたが、階段を降りたあと、旅館までは私と熊原さんは、先生が人力車に乗せてくださいました。

私たち二人が手っ甲、けはんをあて、背中に風呂敷包みをかっいで、人力車に乗って行くのを鹿児島の子供たちが見て、「田舎の子が人力車にのってる」と笑いながら指をさすので、風呂敷包みは下したが、こんどは車屋さんが旅館の名前を忘れてしまい、私たちもびっくりしました。

そこで熊原さんがすこし話すると、車屋さんも思いだし、だいぶん街の中をかけ回ったすえに、やっと旅館にたどり着きま

した。先生方も、みんなとっくに着いて、ふしぎに遅いと待つておられました。

三日目、鹿児島見物をしての帰りには、船で敷根まで渡り、そこで一泊し、四日目にはまた七里余り（三〇キロ）の上り下りの道を歩いて、途中、財部の学校に一休みし、夜暗くなって庄内に帰り着きました。

明治天皇の崩御と小学校卒業

私が小学校六年のとき、明治天皇が亡くられました。明治四十五年（一九一二年）七月のことでした。

その前夜、生徒たちは一里もある学校に集められ、天皇さまの病気がよくなるように、全校でお祈りがありました。私の父は、出がけに大きな梨を二個もいできて、「阿久井先生へあげてくれ」と渡しました。

阿久井先生というのは私の受け持ちの男先生で、ほんとうにやさしい先生でした。先生は、覚えのわるい生徒には涙を流して教えていました。今でも時どき先生の夢をみるときがあります。それから、あのととき父がもいできた梨は、「タモトヤブリ」という大きな梨で、それが五個なっていたのを覚えています。

話がわきにそれましたが、明治天皇は私たちのお祈りのかい

もなく、七月三十日、とうとうお亡くなりになり、乃木大将と静子夫人もお供をして自害されました。もちろん、私たちもみんな泣き、国をあげてのお葬式があり、時代は大正へと変りました。

六年生のとき郡視学の試験が始まり、私たちは同じ千草部落の久枝先生の家に夜も時どき習いに行って勉強しました。

そして、六年間一日も欠席せず、小学校卒業のときは皆勤賞をもらいました。六年生百余名中、女子は五十六名で、表彰をうけたのは女子では私ひとりでした。ひいじいさんの昔の羽織をいただいて、母が仕立て直してくださった紋付とハカマを着て、大そうおほめの言葉をもらい、立派なすずり箱と賞状をいただきました。

私の母は病弱で、農業や養蚕には手がたりず、私は学校に行きたくても、それ以上は行けなくなりました。当時は小学校六年生を卒えると、あと二年間、高等科へ進学して勉強することができたのですが、私のように家の貧しい子たちはそれもできなかつたのです。

叔父さんの家の一人娘（養女）のハルさんは高等科に行くというのに、私は父が許してくれないので、毎晩泣いていました。阿久井先生たちの方からもいろいろ勧めてくださいましたが、



宮崎県北諸県郡庄内尋常小学校卒業（大正2年3月）、中列右から3人目。13歳。

父は「学校へ行くより農業のけいこをした方がよい」と言い張り、私の学校生活はとうとう小学校六年間で終ってしまいました。

十二歳の春、いも坪の中で泣きながら

私は小学校を卒えると、もう勉強することもなく、まだ十二の春というのに、家事に追われ、馬使いのけいこなどもしました。

馬使いというのは、馬を引いて畑に行き、カマスに入れたさつまいもを馬の背に積んで運ぶとか、いろんな荷物を背負わせて運ぶ仕事で、私の父はそれを一つ一つ仕込んでくれました。

父が馬を引いてくるのを、私がいも坪の中に入って待っていると、ハルさんたちが学校に行くのが見えるので、私は仕事も手につかなくなり、学校に行きたいと思って、ほんとうに泣きました。悲しくて涙が溢れました。

しかし、私が長女であるために、私ที่บ้านにいと、家族みんなが助かるので、私は朝から晩まで一生けんめい働きました。私がそうして働くうちに、ハルさんも学校をやめて、養蚕の手伝いなどをしたりしました。

冬になると、ハルさんも私も馬を引いて山に薪をとりに行き、

草取りなども共同でしたものでした。また、夜は俵を積み、すりなわ（俵をくくるなわ）を作ったりして、夜なべに精を出しました。

私が学校を卒業したその年の四月、鹿児島の大噴火し、火山灰が降って、養蚕の桑の葉が全滅しました。それで、蚕を養うために、遠くまで桑の葉を買いに行き、桑摘みをしたこともあります。

桜島から降ってくる灰で、向こうの方は見えないほどでした。それで傘をさして歩くという有様で、農作物の被害もひどく、麦なども手であさったところはよかったが、全部弱ってしまいました。

父が準備していた馬小屋の改造が始まったのもこの年のことでした。父が私にはじめての仕事をつけたので、私はひとりで馬の背中に松の枝や葉を積んで帰りましたが、みんなびっくりして私を迎えてくれました。

なんだか、このときは馬も私の言うことをよく聞いてくれたので、うれしかったのを覚えています。そして、この頃から、だんだん馬もよく使いこなせるようになりました。

一里あまり離れた庄内西区の野海文蔵おじさんの家まで、薪運びに、父と馬を一頭ずつ引いて行ったのもこの頃のことです。



た。

村のお祭りの日がきても、もう小学校時代のように友達と遊ぶ気もせず、家にいて子供たちの世話などしていました。

あの頃、父は私に農業を仕込もうと、いろいろやかましく育てましたが、母はいつもひっそりとしていました。普段着などもそまつな着物をきており、毎晩のように家の上の方の小さな滝の所に黙って立っていたのを思い出します。

十九歳、鎌田家に嫁ぐ

私の父は何をするにも骨身おしませず熱心な人でしたので、私も父を見習って一生けんめい働きました。それで年頃になると、

あちこちから嫁入りの話がくるようになりました。

数え年十九歳（満十八歳）のとき、いよいよある縁談がまつまり、私も嫁に行かねばならぬことになりました。すると、そんなある日、同じ千草区の鎌田家の次男の夫（巖）が大きな馬に乗ってきて、私と出会いました。

「お前は嫁に行くという話だが、本当か」ときくので、「はい」と答えると、「そいじゃ俺の嫁に来てくれ」と言うのです。

鎌田巖は、小学校で同級生だったので、よく知っていました。高等科に進んだので、その後は会うこともほとんどなかったのですが、あとで聞くと農学校へ行って獣医になったようですが、それが実現せず、一時家をとび出して大阪に行っていたとのこと。

それがこうして私の縁談が決まりかけると、突然姿をあらわして求婚したので、びっくりしました。

こうして、私は鎌田家へ嫁ぐことになりました。ちょうどあと一週間で満十九才の誕生日を迎える大正八年（一九一九年）八月八日のことでした。

（一部抜粋、おわり）

戦争・学徒出陣・従兄弟の戦死

宮崎市（西区出身） 牧ノ瀬 正雄

一郎兄戦死

一郎兄は町区の出身で私の従兄にあたり、家も近所で子供の頃から兄さんと慕っていた。一郎兄は戦前、都城商業学校卒業後明治大学に進みましたが、私が昭和十七年、東京陸軍航空学校に入校するとき、東京は初めてで分かりにくいだろう……と言って、大学をわざわざ休んで当時、東京都北多摩郡村山村にあった航空学校の正門前まで送ってくれた。

入校してから数回便りをしたが、一郎兄からは翌昭和十八年秋、学徒出陣により陸軍に入隊するという知らせを受けた。

以来便りも途絶え……昭和二十年八月終戦となり、帰郷してみると、一郎兄は満州の関東軍で中隊長として在隊中、終戦の直前ソ連軍の攻撃を受け戦鬪となり、ソ満国境付近でソ連軍と交戦していると目撃している証人がいるが、その後の消息は全く分からなかった。

その後、庄内の実家へは戦死の公報はあったものの、遺品・

遺骨等は帰ってこなかった。叔母（一郎兄の母）は、生きていくことを望みに、当時の模様や消息を知りたいと、戦後三十余年の間、戦友や友人を訪ね歩き回ったが、確証を得ないまま遂に八十八歳にして他界された。

ここにも、母と最愛の息子との戦争の悲劇があり残念である。昨年、庄内の墓地を訪れたとき、一郎兄の軍服姿の遺影が位牌の側に飾られており感無量であった。

学徒出陣

従兄一郎は学徒出陣で軍隊に応召されたのだが、さきの大東亜戦争で日本の歴史の一頁に残るものの一つにこの「学徒出陣」がある。戦争の記憶の風化するなか、このことについて書いておきたい。

昭和十八年九月「定例閣僚会議」で、それまでは大学生は二六歳まで徴兵猶予の特典があったが、相次ぐ南方戦線で多くの將兵を失いこれが補充の苦肉の一策として、大学生の徴兵猶予制度が解除されたのである。

当時中学生には軍事教練が義務化され、その課程を終えた大学生は即戦力ありと判断されたからである。（教員となるべき学生と理工系は入営延期が認められていた）

十月二十一日、文部省主催による「出陣学徒壮行会」が東京都内において行われ、東京帝大以下都下及び神奈川、千葉、埼玉県下七十七校約十万人が参加し、うち出陣された学生は約三万五千人であったと報道されている（十月二十一日朝日新聞）。出陣学徒は、陸・海軍併せて終戦まで約三十万人と推定されている。

出陣学徒の中には、職業軍人に勝るとも劣らない功績を残し戦死した犠牲者も数多くいた。そのなかの一人、サイパン島の守備隊の山田中隊長は、一郎兄と同じく第一回の学徒出陣で入隊した中尉であったが、昭和十九年六月、同島を奪還すべくアメリカ軍は艦載機の大群と航空母艦、戦艦・巡洋艦等数十隻をもって上陸作戦を敢行してきた。同島の二万数千人の日本の守備兵はアメリカ軍の攻撃で日を追って多くの戦死者と負傷者を出した。いよいよ敵が上陸作戦を開始したとき山田中隊長は、残り少ない部下を引き連れ上陸地点の浜辺近くまで前進した。

すでにアメリカ軍は舟艇で続々と上陸中であった。そこで山田隊長は部下を砂浜に伏せさせ一人仁王立ちとなって間近に迫ってくる敵兵に次から次に手榴弾を投擲^{テウキ}、数十人を殺傷させ敵を寄せつけなかった。砂地に伏せていた部下には匍匐^{はふく}で代るがわる手榴弾を手元に運ばせ、左腕に銃弾を受けながらも果敢にも

一人で五、六隻の上陸舟艇の上陸を阻んだのである。

のち、七月十六日、日本の守備隊は玉砕したのであるが、手記を寄せた当時部下であった竹中氏は、意識不明になっていたところを米軍に救護され、戦後引揚げてこのことが週刊誌に掲載され、学徒出陣による功績を称えられている。



童唄（わらべ唄）

……思い出すまゝに

平塚町 山元 正三郎

私の育った家は西区の神田で、道路に面した店造りとなっており、裏には広い庭がありました。

私には二人の兄と三人の姉、それに弟一人がいました。二人の兄は私と大分歳がはなれており、幼い私が遊びの邪魔になるので相手にしてはくれませんでした。姉たちは広い裏庭で、友達が二人、三人と集まってきてはよく遊んでいました。姉の友達に妹や弟たちも連れてきました。私はその妹や弟たちとよく遊びました。姉たちは遊びのなかにいろいろな「童唄」（わらべ唄）を歌いながら遊んでいました。一緒に遊んでいた私は姉達が歌う唄を自然と覚えてしまいました。

昭和十年頃の正月の遊びには、羽根つき、毬つき、お詰め、縄跳びなどがありました。その頃子供達の間で流行った唄を紹介します。

羽根つきのときはこんな唄を歌っていました。羽根をつきな

がら、「ひとよに、ふたよ、みよこし、よめじよ、いっさし、むさし、なんのやさし、このまで、とうよ」と、何回も何回も繰り返しながら交替で羽根をついていました。

毬つきの時は、「庭のチョンチョンギスなげなくの、たったひとりの坊さんが、山からころんで巾なるか、巾なると思えば四九日、四九日が過ぎたなら、お客そろえてまいります。れんげの味噌漬、煮まめでござる、人がチョイトきて、チョイト隠せ」と言って、毬を着物の裾に隠していました。

また、毬つき唄のもうひとつは、「いちれつ談判破裂して、日露戦争始まった。さっさと逃げるはロシア兵、死んでも尽くすは日本の兵、五万の兵を引き連れて、六人残して皆殺し、七月八日の戦いに、ハルピンまでも攻めいりて、クロパトキンのくびをとり、とうでとうとう大勝利」。

次の唄も毬つきのときに歌っていました。「あんたがたどこさ、肥後さ、肥後どこさ、くまもとさ、くまもとどこさ、せんばさ、せんば山には狸がおってさ、それを獵師が鉄砲で撃ってさ、獲ってさ、煮てさ、喰ったとさ」。その歌を何回も歌いながら遊んでいました。

「お詰め」（お手玉）の時は、「一匁の佐助さん、お墓におじゃれ、一万一千二百一拾一石一斗一升枳におさめて二匁に渡した」。

二匁の佐助さん、お墓におじゃれ、二万二千二百三拾三石二斗二升枿におさめて三匁に渡した」と、三、四、五とどんどん歌いながらすすんでいったものでした。

それから毬つきや、羽根つきの時によく歌っていた唄。「一かけ、二かけ、三かけて、四かけ五かけて橋をかけ、橋の欄干手をかけて、はるかかなたを眺むれば、十七、八の姉さんが、花と線香を手にもって、これこれ姉さんどこへ行く、私は九州鹿児島、西郷隆盛の娘です。明治十年九月にお戦死なされた父上の、お墓にお参りいたします。お墓の前で手を合わせ、ナミアミダブツと唱えれば、お墓のなから父上が、お国のためだ……（あとがどうしても思い出せない）」

縄跳びの時は、二人で縄を回し、二人が跳びながら歌います。「ゆうびんやさん、いそぎやんせ、もうかれこれ十二時だ、一じ、二じ、三じ、四じ、五じ、六じ、七じ、八じ、九じ、十じ、十一じ、十二じ、ではここでジャンケンポン」と、ジャンケンをして負けた人が、「負けました、ではここでさようなら」と言って縄から出て行って、次の人と代るのです。

もうひとつ、「三月三日のワラベ採り、武雄と浪子は手をとりにて、波ちゃんかけるなあぶないよ、心配なさるな武雄さん、武雄がポートに移るとき、波子は白いハンカチを、うち振りな

がらねえあなた、早く帰ってちょうだいね」。

こんなふうには、いろいろな遊びを、いろいろな唄と組み合わせ、日がな一日遊んだものでした。私は幼い子供どうして遊びながら、聞くとはなしに聞いていたのでしょうか。

このほかの遊びには、おはじき、ゴムの輪をつないでのゴムの段跳び、目玉（ビー玉）、ケンパッなどいろいろありました。雨の日は家のなかで、お詰めや、おはじきで遊んでいました。

もう六十年以上も昔のことなので、記憶違いもあるかもしれませんが、思い出すままに書いてみました。



内村直左衛門（初代横市尋常小学校校長）の持ち物が教えてくれるもの

宮島 内村 成良

今年（平成十四年）の七月から八月にかけて、郵便局の窓口ロビーにて「なつかしのふるさと庄内写真展」を各方面の皆様のご協力の下、開催することができました。その折、内村家にも何かないかと調べてみたところ、面白い物が出てきました。こ



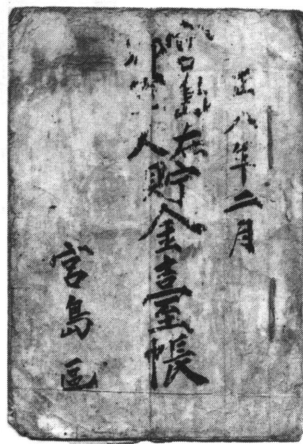
の事を「語る会」の坂元会長にお話しをしたのが縁で、今回何点か紹介させて頂く事になりました。

内村直左衛門は、後述のとおり明治から大正にかけて、北諸や西諸の教育普及に尽力した教育者の一人です。

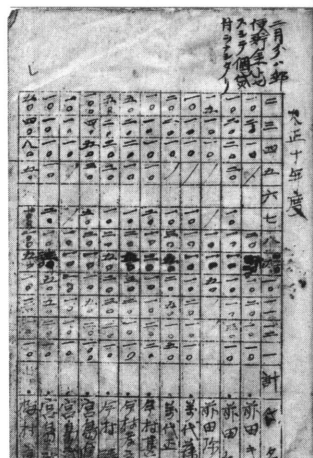
その彼の持ち物の一つ目は、庄内尋常小学校の訓導（教諭）の時購入した、当時としては珍しい自転車です。写真のとおりその保証書には、「英式」「世界最高自転車」「堅牢実用自転車」等の文字があり、現在の感覚では、思わず笑いが出てきそうな記載内容です。私

も保証書にある自転車店を探してみたのですが、今ではその店名すら知る人はいませんでした。

次に、「宮島在郷軍人貯金台帳」には、宮島地区の人たちの毎月の貯金額が記録してあ



宮島在郷軍人貯金台帳
大正8年2月



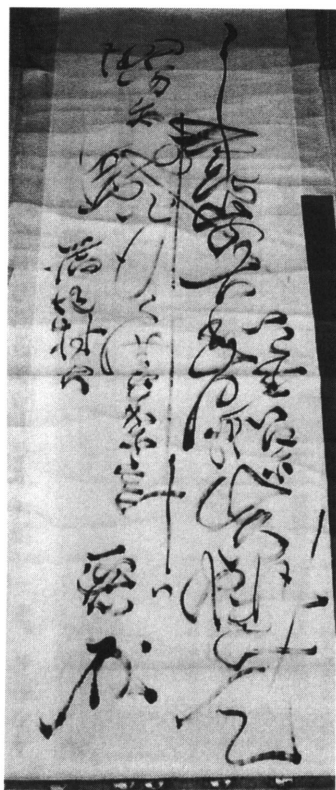
記載内容

り、それを「郵便貯金にし、個人貸し付けにした」旨の記載があります。大正初期にも関わらず、郵便貯金の浸透ぶりに、私事ですが、仕事が大変感心させられました。

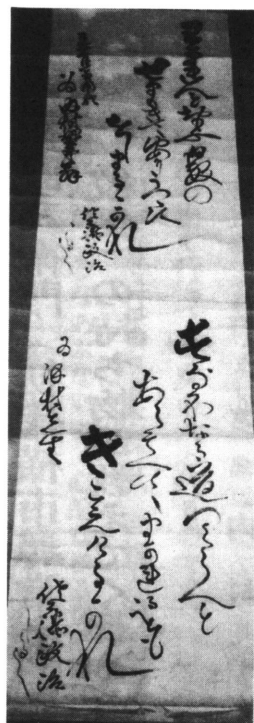
また、三幅の掛け軸は

①前田正名翁が、用水路の設計をする前に内村家を訪れた際に、酒宴の中で直左衛門に記念にと書いてくださったものに、

②宮崎師範学校（現宮崎大学）佐藤正治教授が直左衛門とその父、柳太郎に書いてくださったもの。



①



②

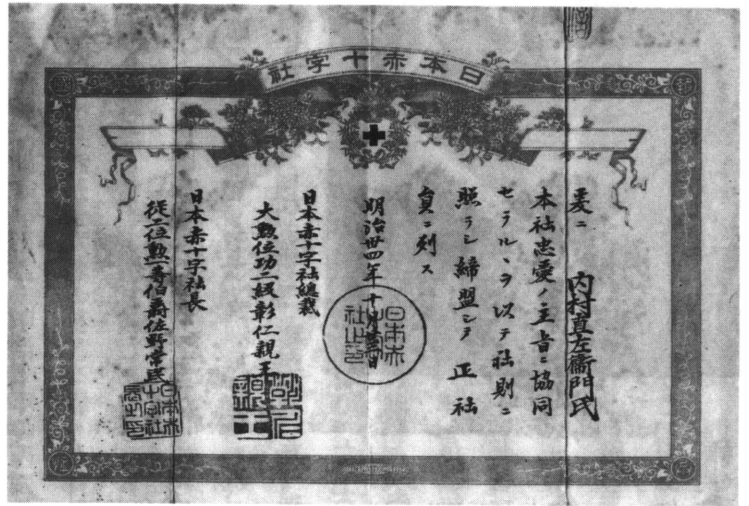


③

③同じく佐藤教授他三人の教授が内村家を訪れた際に、一緒に寄せ書きされたもの。

と、直左衛門の長男「真征（故人）」が伝え聞いています。
 ①の前田翁については、郷土史家「鳥集先生の鑑定済みですが、②と③の教授名は宮大の資料不足のため確認がとれていません。」

他に「日本赤十字社」の正社員発令状と横浜市尋常小学校校長の辞令を紹介しておりますが、これらを一一つ一見していると、今から百年前の当時の様子が思い浮かべられ、自分自身、先祖の苦労に恥じない、なお一層の努力を決意させられた次第です。



○直左衛門の教師歴（明治八年五月二日生まれ）

明治二十七年、千草尋常小学校準訓導を皮切りに、川内尋常小
 学校（山田）→横浜市尋常小学校→繩瀬尋常小学校→庄内尋常小
 学校→奈佐木尋常小学校（須木村）で退職（横浜市・繩瀬・奈佐
 木で校長兼任）



西区の自慢・南洲神社

西区 乙守 保正

城山公園の南斜面に西区全体を見渡すかのように南洲神社の社があります。西郷南洲翁の御霊と明治十年の西南の役に出陣戦死された庄内郷出身者五十六名の御霊を祀った神社です。それは私達が小さい時からずっと慣れ親しんできたお宮です。あまりにも身近すぎて日頃はそこにあって当たり前。しかし四季折々には季節の変化を感じ、「あ、南洲神社だ。あ、西郷さんだ。」と意識せずにはおられません。桜が咲いた。青葉が茂つ



参道

た。六月燈だ。：と、銀色の鳥居が眼前に浮かび上がって来ます。八十余段の階段の下に立って見上げると、杉林の奥に社の屋



ダイヂュー
社殿と丁丑の役記念碑

根がわずかにみえます。杉丸太の階段が今の石段になって久しくあちこちに傷みが見られ、足場が悪くなっていました。この六月（平成十四年）西区壮年会の奉仕作業に

よって綺麗に補修されました。急勾配で五十段、六十段と上って行くと体力のある方でも手すりがありがたくなります。

現在の社殿は昭和五十五年十二月に再建されたものです。当初の社殿はたまたま改築された諏訪神社の古い社殿を移したものでしたが、昭和五十三年不慮の出火により全焼しました。焼失してわずか二年で再興した事は私達西区住民の氏神としての南洲神社への敬慕の念の現れであるし、また南洲神社分社時の西区住民先輩達の熱意やご苦勞が継承されている証しでもあると思います。

社の西に二基の石碑が有ります。招魂碑 西南戦争に出陣し、戦死された五十六名の方々のお名前が刻んで有ります。西側の明治丁丑之役従軍者記念碑 丁丑ていしゅうの役とは西南戦争のこと。

この戦争に庄内郷から従軍された二百十八名の方々のお名前が刻んであります。これら二基の石碑は明治十三年東区の豊幡神社に建立されたものでしたが、昭和三十八年城山に忠霊塔が建立されたとき、分散していた西南の役碑（豊幡神社境内）日清日露戦碑（庄内小お軍神）をここ城山に集めました。平成四年西南の役関係二基は現在地に再移転されたものです。

社の南面に三本の巨木が有ります。階段の東側の二本は檜の木（径約八十センチ）で木の実は渋く、子供の頃かじっては「ドッジ」と言って吐き出したものでした。西側の一本は椎の木（径約九十センチ）で甘味のある小さな実を付けます。子供の頃は「コジひるけいっが」と出かけ、藪の中まで探したものでした。秋の例祭のとき「コジひるけい ゆきたもんじゃったな」「いまん子ども くあるっちゅこも知らんじゃろな」年配の方々からこんな会話がでてきます。この椎の木平成十一年の台風の時上半分が裂落し、痛々しい姿になっています。

南洲神社下に広場があります。遊園地として昭和三十七年に造成されたものです。ここは元墓地でした。江戸時代のもので



お祭り広場

享保年号即後の墓石が立っていました。時代が変わって世話をする人もいなくなつた墓が多く荒れていました。子供達は草のぼうぼう生えた墓石の中でチャンバラごっこをしたり、かくれんぼをしたりして遊びました。走り回っていると大人の人に「こらっ あぶねど」と注意されたりもしましたが、子供達の中にも「墓だけがをすと治らんげな」と誰言うともなく意識していて乱暴な遊びはしなかったようです。春にはつばな（茅の幼穂）を採って食べたりもしました。普通の土手のよりも大きいのがありました。

遊園地の北側中央部に墓石が集められ合祀碑が建立されており、南洲神社の夏の例祭の日に関係者十数名の方が集まって合祀祭が行われています。

遊園地東側に舞台があります。平成十二年（二〇〇〇年）ステージを作り（壮年会）側面に絵を描き（子供会）ました。今

年平成十四年西区有志によって鉄骨の屋根が出来ました。

南洲神社が出来て七十余年。庄内南洲神社設立時の先輩諸氏の熱意とご苦労、それを支えた住民の方々、星霜を重ねる中で私達西区住民にとって南洲神社は地区の氏神となり、西区の力と心を結集するシンボルになっています。



ロッグッド



蔵満十助のこと

姫城町 湯前 隆一

八月の暑い日曜日、富山次十郎等、庄内の乱に関する本を読んでいるうち、前に行ったことのある風呂谷ふうろたんを思い出しました。庄内の乱で白石永仙が島津軍を待ち伏せしたあの『風呂谷』です。諏訪山での戦いの後、傷を癒して赤く染まったであろうこの流れも、八年前は、清水が流れていて、ここに小屋でも建てて、史跡として広く紹介したらいいだろうなと思ったものでした。それで、涼しい情景を予想して、庄内まで車を飛ばしました。

たった、八年前に行ったところなのに、どうしても探しだせず、野海先生宅を訪ねて、場所を教えてもらい、再度、近くに住んでいる人に聞きながら、見覚えのある前田用水路のところまで行き着きました。しかし残念ながら、それから先、笹藪等に阻止され、結局、帰ってしまいました。

近所の人に聞いての反応は、風呂谷が、「そき、あいこた知っちよっどん、さあ、どげんなっちよっどかい。」と言う程度で

した。そこで、五十年来、父に聞かされていた蔵満十助じゅうすけのことを、さらに書いてみる気になりました。八年前に見た風呂谷ふろやが、もう忘れられようとしている。ましては、明治の『蔵満十助』は遠い。わかっていることは、実に乏しいのですが、書いてみることにしました。

どんなことかと言うと、高木原用水路が、一九一五年（大正四年）に、ひとまず竣工したのはご存知のとおりですが、前田正名が、一八八七年（明治二十年）、はじめて、計画し、なかなか実現できなかったそのころ、おそらく、それから、一八九三年（明治二十五年）までの間、表記「蔵満十助が、都城宮丸の河村弥吉・広口にあった旅館の土田ジョウ吉のヂサマと三人で新田溝の工事に掛かり失敗した。」と言うこと。河村弥吉と土田ジョウ吉のヂサマは都城の人なので、ここでは蔵満十助の事だけ書くことにします。

蔵満十助の子孫にあたるひとに、聞き取りしたのですが、十助には、伝つた・柳やなぎの進しん・良之介りょうのすけ三人の子がいて、それらしきことをしていたのは、良之介で、枕木を商売していたと言うことです。私は、この良之介が、父十助とともに、実業界に乗り出していたのではないかと、勝手に想像しています。良之介はその後、三股小学校の校長（第五代・明治二十八年四月〜十二月）

になっています。

十助のことは、何一つ突き止めていないのに、庄内の昔を語る会の『庄内』に投稿したのは、十助のことをもっとよく知っている人が、あるいは、関係ある資料が、出てきたりして、真偽の程がわかることを、期待してのことです。



「しょけ」と「いおすく」の思い出

川崎 福村 修

「またあいつちよ」下の川の中から大きな声がした。土手の上から覗くと「しょけ」の中で少し黒みをおびた円くて細長い魚が体をくねらせている。「じょじょくろ」だ：子供の頃の「いおすく」の一齣である。学校から帰ると宿題など頭から完全に消えて、あるのは友達との約束だけ、どこからともなく、数人の集団はすぐ出来た。道具はバケツと「やせじょけ」と：ぶいじょけ」で準備よし：「やせじょけ」は「ながし」から「ぶいじょけ」は「はんばこ」からの借用であった。「はざぐん」は家を出るとき失敬した、もぎたてのトマト、キュウリのまるかじりだ。育ち盛りの子供たちに「うんもねもん」はなかった。漁場に到着、川は田圃の用排水の水とはいえ当時は至る所に地下水が湧き出して、綺麗な水草が流れに揺らいでいた。この水草が魚たちの遊び場所、身を守る場所だ。ただ少し大きめの魚は土手の「がま」に逃げ込むこともあった。漁場の深さは：せいぜい膝まで、川底は流れの早い所は砂混じりの砂利：澱んだ

所は田圃から流れでた土：土手が崩れた土等で泥状になっていた。しかし、この泥地こそ「じょじょくろ」の住家、危険を感じたら泥の中へ：ドロン：時々、泥の上に大小の曲線が見られた。「たびな：ごびな」の足跡だ、太いほうが「たびな」細いほうが「ごびな」です。魚たちも川底を選んでいたのかも知れません。「いおすく」は川下から始めます。水の濁りを避けるためです。川に入り「しょけ」の口を川上に向けて沈めます。「しょけ」を押さえたまま足を川上へ伸ばし小刻みに動かし「しょけ」に追込み：素早く上げます。いろんな魚がいました。庄内十二号にも書いた。鯉の子供、鮒子、「なまっのこ」「かんじょっ」「ざこんぴん」「ししゃむし」などなど、なかでも一番とれた魚が「じょじょくろ」です。口のまわりに短い口髭が数本あり可愛い顔をしていた。最近ある資料館で久し振りに「じょじょくろ」を見て懐かしい人に出会った様な気持ちでした。今度の出会いがなかったら、この原稿は書けなかった。「じょじょくろ」に感謝：口髭はついていました。「いおすく」を見てみると時々：わぁと声がして「しょけ」が下から飛んできます。みんな何かは知っていますから、一度は逃げますが、おそろおそろまた寄ってきます。思ったとおり「ししゃむし」です。背中は黒、腹は赤い地肌黒の斑点。「ししゃむし」と勉強は苦

手でした。遊びのことにすると、我ら天才集団：「いおすく」に飽きると低い落差のある川に白い泡が出来、これが軽石になると言って泡を取り、天日干し：石になるまえに風で飛んでいきました。おもしろかったのは「ざこんぴん」を生きたまま呑む（今で言う踊り喰い）と泳ぎが旨くなると聞き、呑んだ早々に川に入り、溺れかけて、真っ青な顔で上がってきた友を見て皆んなで笑い転げた。：取れた魚は平等に分け、土手の柳の木の細い枝を折って来て枝先をまるめ滑りどめにして、魚のえらの部分から通し、獲物片手に意気揚揚とひきあげたものである。：途中人に出会おうと見てくれとばかり、獲物を持つ手を皆んで大きく振ったものだ。：だが家が近付くにつれ、一人二人と無口になる、いやーな予感：家に着くなり「ひかんだれ」が一発「いまずっ・どき・いたちよったか・しよけだあ・うっくずれちよいがあー」親の顔が、鬼に見える瞬間だ。：しかし過ぎし日に思いを馳せるとき、今は会えなくなった鬼（失礼）友、そして、魚たち、古き良き時代の思い出をくれた庄内、まだまだ自然の残る庄内：なんとか次世代へ残せないだろうか、今ならまだ間にあいそう：

「：」の意味

「またあいつちよ」：また入った

「しよけ」：コの字形で底に丸みのある・竹で編んだ容器（用途によって呼び名が違う）

「じよじよくろ」：どじょう

「いおすく」：魚すくい

「やせじよけ」：野菜などを入れる竹で編んだ小型の容器

「ぶいじよけ」：牛、馬などに餌（切り藁、切り草）をやる時に使う

「はんばこ」：牛、馬などの餌用の（切り藁、切り草）などを

入れる木製の大きい箱

「ながし」：台所（キッチン）

「はざぐん」：おやつ

「うんもねもん」：美味しくない物

「がま」：土手などに出来た奥に長い穴

「たびな」：たにし

「ごびな」：かわみな

「なまつのこ」：なまずの子供

「かんじよ」：体に斑点のある、どじょう

「ざこんぴん」：めだか

「ししゃむし」…あかはら、いもり(?)

「ひかんだれ」…雨なしでの落雷…ここでは「どなり声、叱声」

「いまずっ」…今迄

「どき」…何処に

「いたちよったか」…行っていたのだ

「うっくずれちよい」…壊れている



頓智甚工門小話

川崎 前畑 文利

其の昔、川崎に甚工門と云うとても面白い人がいました。この人の事を皆さんは頓智甚工門と呼んでいました。

其の頓智甚工門に関する小話の一つ、

「畦下堀りの巻」

甚工門は数年七才の時父親をなくし弟三人と妹一人母親五人で、母親の実家の有る川崎に帰って来ました。其の時代は福祉も何も無い頃の事です。母親は即喰う事にも住む事にも困りました。母親の父も亡くなっており母親の兄の宅地内に堀立小屋で稲ワラぶき屋根、ワラ壁の小さな家で喰うや喰わずの生活の毎日でした。もちろん小学校にも四人とも行けません。甚工門は数え年十二才の一月十三日初めて奉公人として金造親方の所へ上る事に成りました。奉公に上った其日から畦下堀りをさせられました。畦下堀りというのは畦にそって鋤を使って畦の上を田んぼの土を上げて畦を作ったり、一畝づつ田圃の中央の方へ向け放り投げる仕事です。畦ばたが高く成らないようにす

るための作業です。

昔は農耕はすべて鍬と馬や牛とで犁馬スキマシ鍬を使ってやるしかなかったのです。今のよう^にに耕耘機やトラクターはありませんでした。

話は元にもどります。甚エ門は今だに鍬を取って使った事はありませんでした。始めての事であり、手には豆が一ぱい出来て痛い何んの、おまけに鍬で足を切る始末です。そんな甚エ門の仕事を見て金造親方は、

「甚エ門 お前のは蛇が蛙を呑んでいる見たいだ。もっと畦なりにきれいにやれよ!!。」と云われました。

其れから三年の月日が経ち鍬使いも一人前に、身体も立派に成長し、たくましく成って来ました。数え年十五才です。

成人のたくましさを身につけた甚エ門は、三年目の今日を記念とし、金造親方に御礼と感謝を込め、腕前披露と頓智でのさやかな抵抗を兼ね、一月十三日寒中朝四時に跳起き畦にそって南は金造親方の邸宅の石垣につき当るまで、北へは北山の山裾にぶつかるまで、東方へは庄内川堤の下竹藪に鍬の柄が当るところまで、西へは水車小屋の壁につき当るまで、よその田圃であろうと、土堤であろうと溝が有ろうとおかまいなし。金造さんの田圃丈畦にそって、後はよその田圃の中も一直線につっ

切って進んだのです。十文字に堀切った畦下堀を金造親方に見てもらいました。金造親方は畦下堀を見ておどろき

「お、これは見事に真直だ。しかしこの真直よその田圃まではいかん!!」

すると甚エ門胸を張って三年前の今日の事を話しました。

金造親方は「真直結構、他人様の田圃迄は長すぎるのでうちの田圃で止めてくれ」と苦笑して、その夜は御馳走を皆さんでたべながら甚エ門の腕と身心共の成長を祝って呉れたとのこと。



野鳥交遊録

宮崎市（東区出身） 坂元 守雄

自然との共生とか自然に親しもうということが声高に言われ、さまざまなイベントが仰々しく行われています。場所は公園であったり、河川敷であったり、キャンプ場であったりすることが多いようです。わたし自身、毎年仲間たちと、自然の中での行事を計画したり、こどもを中心に、母親同伴家族同伴で自然観察をしたり綾の森を案内したりすることがあるのですが、こどもたちと一緒に遊びながら、どうしても違和感や疑問を拭い去ることができないでいます。

違和感や疑問の原因は、わたしの幼児体験と今のこどもたちの自然との接し方の違いの大きさから来ていることは間違いありません。昔は、人のくらし自体が自然の中にあり、こどもにとって周りの木や草や動物はすべて、自分の生活の中に自分と同じレベルで息づいていました。今はどうでしょうか。植物も動物も自分の生活の中には存在していません。（ガーデニングやペットも同じレベルでの生活ではありません）植物も動物

も自分の生活とは距離を置いたところに在り、直接関係のないものになっています。時には邪魔な存在になっていることも多いのです。それでも自然は人の生活にはなくてはならない大事な存在であるので、自然との共生ということが強調されているのだと思います。しかし、今の自然との共生は、自分が必要なときに関係を持ったり、親しくしたりするという、自分本位、人間本位の自然との共生です。そのために、必要なときにはその自然を、自分の生活や人間の生活のために壊したり変えたりすることができるという意識が隠されています。いつも人間が主で自然は従の関係です。

自然が人にとってかけがえない存在であるならば、人は自然とどのような関係を維持していけばよいのでしょうか。これからの大きな課題です。

わたしは、薄れていく記憶の中から、こどもの頃の鳥たちとのつきあいや印象深いことを綴ってみて、大きな課題への手がかりを探ってみようと思います。

ヒトト捕り

季節は十一月か十二月です。庄内の下の田んぼに冷たい霧島おろしの風が吹きつけてきます。稲刈りの済んだ田んぼは広々

として風は直接肌を刺します。畦と田んぼの畝（うね）との間に窪みがあったので、麦の植えられた畝だったのだらうと思われれます。その畦と畝の間の窪みあたりをちょんちょん跳びをしながら移動しているスズメに似た小鳥の集団がいます。ヒトトです。ニャンニャンホーとも言いました。

小学校に入った頃のわたしをヒトト捕りに連れて行ってくれたのは、二つ年上のエイちゃんとマコトちゃんです。記憶しているわけではないのですがこれは間違いないことです。エイちゃんとマコトちゃんは鳥好きで、二人ともメジロをたくさん家に飼っていました。鳥の捕り方や飼い方、メジロの籠づくりなど何でも教えてくれました。山や田んぼに鳥を捕りに連れて行ってくれたのは間違いなくこの二人です。

ヒトト捕りは、畦と畝の間の窪みを移動するヒトトの習性を利用して、窪みの端っこ、田んぼのコーナーに罾（わな）を仕掛けるのです。罾の仕掛け方ははっきり思い出せないのですが、丸く平べったいシヨケ（ざる）を窪みにかぶせ、手前はシヨケを少し高くして入口をつくり、奥は土で塞ぎ、シヨケの上にも土をかぶせてカムフラージュしたように覚えています。それらが大変です。ヒトトの集団を見つけては、遠回りしながらその集団をその罾のところへゆっくり歩きながら追い込むのです。

そしてヒトトが罾の入り口あたりに集まったとき、手をたたき、声を出して罾のところへ走り込むのです。ヒトトを瞬間的にびっくりさせ混乱させて、シヨケの中に追い込む方法です。冷たい風の中で何回かそれを繰り返しました。

佐土原町出身の友人、猪崎隆さんは、罾のつくり方について、漁網や女性のかぶり網を使ったと話していますので、エイちゃんやマコトちゃんの罾も網を使っていたのかもしれない。わたしの記憶は頼りないものになっています。冷たい風、畦と畝の間の窪み、ヒトトの群れとちょんちょん跳び、罾に土をかぶせたことなどが記憶に残っています。

また、わたしの記憶には、罾の中に捕らえられたヒトトも捕まえたヒトトを手にした情景も全然ありませんので、多分一匹も捕れなかったのだらうと思います。捕まえていれば、そのときの情景やヒトトがどのような色や姿をした鳥か、新鮮な印象として記憶に残っているはずだと思うのです。「チンチン（ヒトト）捕りは難しかった」と猪崎さんも言っていますから、なかなか捕れないヒトトを、エイちゃんやマコトちゃんと一緒に頑張って真剣に追ったのか、エイちゃんやマコトちゃんが一生懸命になって追うのか、寒いのを我慢しながら仕方なく後をついて追っていたのか、今は確かめる方法もありません。

ヒトトの和名はホオアカで、スズメより少し大きい冬鳥です。

頬が赤褐色、下面は白く、胸に黒と褐色の横帯があります。農耕地や草原で見られます。野鳥に詳しい鈴木素直先生は「みやぎの自然」二〇号に「宮崎の野鳥 俗名考」を記載され、その中で、ホオアカの県南西部（都城市、小林市、えびの市、北諸県、西諸県）における俗名を、ヒットト、ニャンニャンホウと記されています。小林地方ではシトトとも言っていたようですが、ヒットトはわたしの記憶にはなく、ニャンニャンホーは覚えています。シトトは発音しにくいのでヒットトが一般化していたのではないかと思えます。わたしの記憶はヒットトなので、ここではヒットトと記しました。

アカビツショ

新緑の季節が過ぎて、周りの草木や山の樹木が緑一色に染まる五月になった頃、アカビツショの鳴き声が聞こえてくるようになります。喉の奥で声をこらすような独特のひとときわ高い鳴き声ですからアカビツショの声はよくわかります。警戒心が強いのか、鳴き声は聞こえてもその姿を見ることはなかなかできません。鳴き声の特異であるだけにその姿を見たいとい

う衝動をもたせます。

アカビツショの鳴き声が聞かれるようになると、すぐ夏ですから、こどもたちは夏休みが近いことを考えたかも知れません。冬鳥に代わって、鳴き声の大きい夏鳥たちとの無意識の交歓にひそかに胸を騒がせていたかも知れません。

わたしの家は後ろがすぐ山の斜面になっていて、釜屋や井戸、風呂場の西側は斜面に接していました。斜面の途中にかなり大きな高いケヤキが一本少しせり出すように立っていました。夏になると、そのケヤキは風呂場の屋根の上の高いところで枝を大きく広げ、緑の葉茂みを風にそよがせていました。

わたしはあのケヤキの枝にアカビツショがとまり、その鳴き声でしきりに歌っていたのを鮮明に思い出すことができます。

いつのことであったのでしょうか。大戦の動きがまだ身边に感じられない小学校の低学年の頃のことだったろうと思われまます。釜屋か風呂場の屋根の陰に隠れて見上げたのでしょうか。白っぽいひと抱えもあるケヤキの幹を鮮やかな緑の茂みが覆うように広がり、その緑の中に全身が赤く、大きな嘴をとくに赤くした鳥がとまっている情景は印象的だったのでしよう、よく覚えています。「キョロロロー」とかん高い声で鳴くときは、全身

雨の日の焦燥

を震わせているようでした。鳴き声も独特ですが、全身が赤いという鳥は他に見たことがありません。少し気味の悪い鳥、との印象もあったように思います。今なら神秘的とでも言えばよいでしょうか。当時はアカビツシヨを見ることは珍しいことではなかったと思います。今とは違い、人里に出てきていたので、すから、夏には普通に見られた鳥だったのだろうと思われず。しかし、わたしのアカビツシヨは、鮮やかな緑色のケヤキのなかの赤い鳥を物陰から一人で見上げた情景だけです。何度か見上げたアカビツシヨかも知れませんが、わたしには一つだけの記憶となって鮮明に思い出されるのです。

自然との共生とか自然に親しもう、と世間で言われるとき、わたしは何故かすぐわたしのアカビツシヨを思い出します。わたしのアカビツシヨは忘れ難い幼時の自然情景として、わたしの心に住みついているようです。

何年か前に、ケヤキとアカビツシヨの印象を詩の形にまとめて発表したことがありますので、この稿の内容に関連してここに記しておくことにします。

樹よ 今日朝から雨が降っているので
おまえのことが思い出される

樹よ おまえは茅葺き屋根を覆い

しなやかな枝を大きく広げ

風とあそび そのたびに

五月の若葉をきらめかせていた

ときおり 赤い鳥がやってきて

ピッコロを上手に吹いていた

そんなおまえを見上げながら

少年は大きくなったのだった

樹よ おまえやおまえの背後に広がる

照葉樹の森が姿を消してから

遠いふるさとでは

なが雨がずっと きまってる

異変がおこるといふ

樹よ 雨が降り続く日には
残映のおまえのふところ
赤い鳥がしきりに鳴くのだ

アカビツシヨの和名はアカシヨウビンで、鈴木先生の「宮崎の野鳥 俗名考」によると、都城地方ではアカビツシヨの他にミツケドイ、アマンカン、アカビツシ、キンキョドイ、ケンキョドリが記されています。

アカシヨウビンは、四月中旬に南方から渡来するハトより小さい夏鳥です。「キョロロロー」という鳴き声は山や谷でよく聞くことができますが、姿を見るのは難しいようです。御池野鳥の森で観察すると見られるでしょう。

ガグレどんの川下り

こどもの頃、家の近くに小さな溝があり水が流れていました。その水の源流は、おみけん坂のしんでん溝と内田どんとの間の低地で、しんでん溝の水を引いたとも考えられますが、水量を考えると周囲の山からの湧水かも知れません。一度確かめてみようと思います。その溝は、内田どんの前を通り、四辻を山下

どんの方へ曲がり、村田どんの前を過ぎてから左折して長峰どんの屋敷を巻くようにして山元どんとの間を道路の下に出て、マコトちゃんの屋敷と原口どんの屋敷の間で二メートルばかりの小さな砂地の流れになっていました。夏の暑い日のひと時、よくその流れに足を入れて遊んだものです。流れは一段高い小学校の運動場に突き当たり、そこからは暗渠です。以前の運動場のちょうど真ん中あたりに暗渠の蓋がありました。暗渠は三、四メートルの深さだったと思います。暗渠は大浦どんのそばに出てから南崎どんの茶工場の方に降りて下の田んぼへ出ているのですが、大浦どんのそばからのコースはわたしには分かっています。

その溝が単なる湧水によるものであるのか、田んぼへの導水であるのかははっきりさせなければなりません。導水であれば夏場だけの流水であったことになります。

夏の夜にその溝をガグレ（カップ）が上り下りすることが、こどもたちへのひとつの怪談として語り継がれ、いつしかわたしもその話を耳にしていました。今では、このような話は日本の各地にあって珍しい話ではないのですが、当時は自分の家の近くを流れている溝の話としてきわめて現実味をおびていた怪談でした。

わたしがまだ小学校にも上がっていない頃のことです。暑い夏の真夜中のことでした。わたしは同じ蚊帳の中に寝ていた父に突然起こされました。「モリオ、ガグレどんがとおいやる」と父は言ったはずです。幼かったわたしはびっくり仰天して一度に目が覚めたことでしょう。やっせんば（弱虫）であったわたしは背筋を寒くし体を震わせたかも知れません。部屋から溝までの最短距離は五〇メートルはありません。わたしは震えながらも耳をすましてガグレどんの溝下りの気配を聞こうとしたに違いありません。闇の奥から「ヒー、ヒョー」「ヒー、ヒョー」と実に気味の悪い声が聞こえます。上流の方から少しずつ近づいてくるような気がします。ガグレどんはわたしのところまで来るのではないかと思っただけに違いありません。しかし、近づいたと思っただけにはガグレどんの声は次第に小さくなり、最短距離の角を曲がって、長峰どんの後ろの川下の方へ遠ざかっていったようでした。その夜、弱虫のわたしは眠れたはずはありません。あれがガグレどんの声か、と怪談を現実のこととして受け入れざるをえなかったことでしょう。そして朝までの時をさまざまに思いを巡らせながら過ごしたことだろうと思います。

ガグレどんの声は、今ではトラツグミの鳴き声として説明されています。「ヒー、ヒョー」という鳴き声は、わたしはCD

録音で確かめましたが、たしかにトラツグミの鳴き声です。あの晩、溝を下っていった鳴き声の主もトラツグミであったのでしょう。しかしわたしには、トラツグミの声と言ってしまったのは、あじもそっけもない話になってしまいました。否応なくわたしの心身に染みついていて、子供心を震わせたもの、あの恐怖感、身動きできない力でわたしを包んだもの、その貴重な幼児体験が無駄なものになってしまおうように思われてきます。自然界の不思議さ、不可解さは今でもあるのだと言いたい思いがあり、あれはトラツグミの鳴き声などではない、今まで誰も確かめたことがないガグレどんの川下りの声だと言い張りたい思いが残っています。

トラツグミはハトより小さいが日本のツグミの中では最も大きな留鳥です。全身黄褐色の地に黒い三日月形の横斑があります。山地の樹林に生息し、薄暗い地上に降りてミミズや昆虫などを餌とします。とくに夜や薄暗い曇天の日によく鳴き、昔から「ぬえ（怪鳥）」の声として薄気味悪がられ、恐れられた鳥といえます。御池野鳥の森でトラツグミの鳴き声を聞くことができるようですが、わたしにはまだその機会がありません。

（二〇〇二・八・末）

事務局便り

〱二〇二一年の歩み〱

本年は創立以来十六年を数える年になります。この間すでに会誌十三号を出版し、本年十四号を出版する運びとなりました。事務局としても毎年投稿してくださる方々や本誌発行に側面より協力して戴く方々のおかげと深く感謝している次第です。

今年もまた会員の中から三人の方が亡くなられたことを報告せねばなりません。それぞれ本会の発展に尽くしていただいた方々で残念でなりません。会員一同心からご冥福をお祈りいたします。

本年の総会は庄内町下の「琴吹寿司店」で実施しました。二十六名の参加を得て、例年通り、前年度の事業報告、会計収支報告、更に十四年度の行事計画等を協議、承認されました。

参加して下さる方々、皆「庄内」を愛する方々ばかりで、その昔の庄内の事などの『昔話』に花を咲かせ、久し振りの再会をよるこび合い楽しいひとときを過ごしました。そして、従来行っている本事業を若い方々に引き継ぎ、大事に続行していかねばならないこと等を確認し合って閉会しました。

生涯学習情報誌

じゃんDOノ「庄内の昔を語る会」を紹介

「じゃんDO」は年三回都城市生涯学習課から発行される情報誌です。庄内出身の吉川一郎氏がこの情報誌の編集の委員になっておられ、私たちの会を広く紹介していただきました。

最近あちこちで「庄内の昔を語る会」の名が聞かれ、話題になっていることをうれしく思うことです。

ここに掲載された全文を紹介しておきます。

(帖佐)

「庄内の昔を語る会」は、昭和六十二年五月三十日、会長「野海正治」氏・会員三十四名で発足しました。会の趣旨は、「先人の残してくれた文化遺産ともいえるべき尊い足跡を探り、古老の記憶にある歴史を、苦難の話を、今、とどめて子や孫に伝えたいということで、お互いがざっくばらんに庄内の昔を語り、先人の足跡をしのび、現在を考えることにある。」と機関誌にあります。

この発足には、顧問であり、郷土史家の瀬戸山計佐儀先生の助言と指導がありました。

会の事業としては、講演会・史跡訪問があります。その第一

歩として、庄内地区を一巡しての探訪が行われています。各地で古老の方が進んで話題を提供し、史跡にまつわる貴重なお話があり、更に家宝ともいふべき品々が披露されています。この探訪は、郷土庄内・都城市を中心に県内外に及んでいます。

講演会も、庄内を中心に、県内外の各分野で活躍されている人を招いて行われています。

もう一つの事業として、機関誌「庄内」の発行があります。創刊号が平成元年で、十三号まで発行されています。現会長「坂元徳郎」氏は、「庄内を愛する多くの皆様が、庄内の歴史を会誌としてまとめ、子や孫に書き残しておこうという思いの表れです。」と述べておられます。

その中でも、坂元氏が執筆されている「庄内史跡探訪」は創



史跡探訪・大隅町、西南の役の官軍の墓

刊号から現在まで継続しており、庄内の歴史と史跡を知る貴重な資料です。十三号には、創刊号からの、「庄内」総目次が掲載され、テーマと執筆者全員の氏名を知ることができます。庄内の歴史と生活が総括されていると思います。

また、史跡の保存と整備にも力を入れており、過日、庄内の史跡の一つである「稚児桜」の除草があり、私も行ってみました。十名で除草や清掃をされていました。記念碑を建立したいということで、

土台は完成していますが、自然石の記念碑には経費がかかり、その捻出に苦労されているようです。

会の実績は、庄内の歴史を知り、子孫に語り伝える上に多大な足跡を残しています。



(吉川)

史跡探訪「庄内十二外城」めぐり

大隅、末吉、財部の城を中心に

西区 長峰良文

庄内地区公民館主催「庄内地区のライフセミナー」が九月二十六日に実施され、庄内の昔を語る会もこれに参加し、全員二十五名を乗せたバスは、午前九時に公民館を出発した。この日は、好天に恵まれ、バスは一路、大隅町へ向う。

今回の史跡探訪は、いわゆる「庄内の乱」に関係する鹿児島県の大隅町（昭和三十年一月、岩川町、恒吉村、月野村が合併後に荒谷地区も合併した町名）、末吉町および財部町の三城を中心に計画された。したがって車中にては、坂元徳郎会長の挨拶に加えて「庄内の乱」の概要説明がある。

その後を受けて講師役の山下謙二郎副会長から資料をもとに車中および史跡めぐりの場所ごとに丁寧なる説明を受けながら楽しく研修が行われた。

大隅町の恒吉城に向ったバスは、出発後、約四十五分で大隅町恒吉支所および公民館のある城入口近くの広場へ到着、下車。

◇恒吉城（日輪城）跡

日輪城は「庄内十二外城」の南端にあり、なかでも都城より五里（約二十キロメートル）の距離にあり、一番遠い位置にある。

「庄内の乱」の時この城には、伊集院忠真の一族、伊集院宗右衛門が守備していた。

島津方は、島津忠長、樺山久高、柏原将監ら率いる兵三千人が配置された。慶長四年（一五九九年）、六月二十三日早朝攻撃開始、城中の兵は、千余人これに応戦した。城主伊集院宗右衛門は、二十三日、二十四日の両日懸命に防戦したが及ばず、二十五日夜陰に紛れて都城に逃れて行った。北郷居付きの者たち四十人余りはとどまって降伏した。

山田城に次いで早く落城したのである。後は、寺山久兼（市成地頭）が在番することになった。現在は、大隅町恒吉支所、公民館に一部がなっていて、その後ろの山が、かつての恒吉城である。山上の城跡は、五つの段になっていると云われているが殆んどがジャングル化していて、また広場の東側には部分的に城の石垣が造成されていたが城としての面影は窺えなかった。恒吉城跡を後にして、来た道をすぐ左に折れると深い谷川が流れている。その橋の上から右下を眺めると太鼓橋が見える。

ここで下車、新太鼓橋の上で全員の写真を撮る。

◇恒吉太鼓橋

長江川にかかるこの橋は、アーチ式の石橋で太鼓橋と呼ばれる。岩川、恒吉、市成街道に架けられたもので寛政二年（一七九〇年）三月に完成している。

この橋の壁石の組み方は、長崎式に似て、平行積みで架ける途中、中ほどから折れ曲がっており専門家は、石橋架橋になれない人々が架けたものだろうと推定している。しかし技術の伝播を知る上からも貴重な石橋で長さ一五・五メートル、幅二・八メートル、水面からの高さ七・五メートルである。



この貴重な太鼓橋が破壊されないよう、川の周辺も含め護岸整備が必要と思われる。

太鼓橋を後にして再び岩川町へと引き返す。やがて左下に岩

川小学校が見えてくる。ここは、御飯屋跡である。岩川町は、古来、末吉郷の中であり、江戸時代の初めから伊勢家の私領となっていて伊勢家は、ここに御飯屋を置いたのである。

さてバスは、岩川の昭南病院に着き、予め病院側から許可済の駐車場下車、八幡神社へ参拝する。

◇八幡神社

八幡神社は、「三國名勝図会」によると万寿二年（一〇二五年）城州（京都府南部の八幡市）石清水八幡宮を隅州岩川へ勧請したとある。しかしその後、戦乱のため当社の宝品等が賊徒に奪われて衰廃したという。

天文四年（一五三五年）檀越藤原重忠、当地頭伴兼豊造立という棟札がある。

明治四十三年四月の指令で岩川村五拾町伊勢神社、無格社、藤原神社、同笠祇神社、同宇佐神社、同保食神社を当社へ合祀し、更に同年五月無格社熊野神社を合祀した。

十一月三日の例祭には、弥五郎どんの浜下りが行われる。この日は、大勢の観客に取り囲まれながら八幡神社の鳥居をくぐり、町中をねり歩くのである。子供達の引く車には、身の丈四メートル八十五センチの体に二十五反の梅染の衣を着用し四

メートル二十五センチと二メートル八十五センチの大小を腰に帯びた雄姿は四方を圧している。

「弥五郎どん」は、巨人崇拜、巨人伝説の中で生まれたもので隼人の首領と言われたり、武内宿弥とも言われている。

秋に行われる大祭は、放生会祭りであって農村で行われる「ホゼ祭り」と結びついたものであると言われている。

かつてこの日、農家ではソバきりを作り多くの人々にふるまっていた。また今でも、農具、金物、竹細工品などの市が立ちの市、町からも多くの人が訪れ賑やかとのことである。

さて八幡神社を後にして、次の官軍墓地に着き下車。



弥五郎どん

◇西南役の官軍墓地

この墓地には、曾於、肝付地方から都城病院などで戦死、病死した官軍の兵士たちが埋葬されている。墓石は、陸軍大尉山形照方、少尉奥田政実、少尉補林為隆をはじめ下士官、兵卒、馭卒、軍夫など総数七十四基である。階級によって墓石の大きさが異なっていて、



将校と軍夫の墓石を比べてみるとその差の大きいことに驚く。この官軍墓地は、昔のままの形を残し、祭祀も行われている。墓石にある出身地を見ると、北は山形県から九州の熊本県までほぼ全国にまたがっていた。

墓地の各墓には、花が供えられ質素ながら大切に管理されていた。

官軍墓地を後にして、末吉城跡へ向かったが末吉城跡へ行く道路が工事中で通行止となっていた為、興昌寺跡前へ下車し末吉城跡を眺望しながら説明を聞き、引続いて興昌寺跡についても説明を聞く。

◇末吉城（鶴亀城）跡

建久七年（一一九六年）稲村伊賀守重家の築城に始まる。重家は初代島津忠久の家臣で忠久とともに薩摩に下り、この地に来て、この城に拠った。天正年間（一五七三年―一五九一年）飢肥領主島津豊後守忠親（北郷忠相の子）は当地を併領したが、島津貴久（島津氏第十六代）に譲渡し、貴久はこれを北郷時久に与えた。文禄四年（一五九五年）伊集院忠棟は豊臣秀吉の命により時久の所領庄内に移り当地を領有した。

この城は、九つの城から成りかなりの広がりをもっていた。庄内の乱の時には伊集院小伝次（忠真の弟）が守っていた。ここには恒吉城を落とした島津忠長、樺山久高、柏原有国らの軍が押し寄せた。末吉城では城門を閉ざして立て籠もったので攻撃できず島津軍は恒吉城と松山城の中間に備えを置いて警戒した。

忠真は、松山城、月野城を急襲し月野城を陥れた。しかし島津軍が再び奪い返し忠真軍は兵を返した。そうするうちに都城の各外城が次々に島津軍に降り、三月九日末吉城もついに落ちたのである。

庄内の乱の後、末吉城は都城から離れて島津氏の直轄となった。そして末吉外城が始まるのである。この初代地頭は、村田

雅楽介である。現在城跡は殆どその跡を留めていない。

◇興昌寺跡

本府興昌寺の末寺にして曹洞宗である。しかし幕末期における廃仏毀釈により廃寺となった。鎌倉時代末期の五輪塔二基には正中三年（一三二六年）の刻銘がある。その一基に「法名妙蓮藤原氏、正中三年卯月二十八日」とある。この二基の古碑は月舟夫婦の墓である。図絵には、「月舟は、当寺開基の施主なり」と言い伝へ、いかなる人といふ事詳ならず、当邑の菩提所なり」とある。

外に末吉地頭村田

雅楽介の墓、藩の学者愛甲喜春の弟子白尾桃庵の墓、享保二



興昌寺の仁王像

年（一七一七年）矢上恭介（幕末の学者、後に恒吉の戸長もつとめる）の墓、仁王像二鉢「宝暦九年（一七五九年）六月廿四日の銘が入っている。なお、歴代住職の墓などが並んでいる。

ここでは、五輪塔について墓碑の建立年代の調査方法の解説

を興味深く聞き、質問などしながら個々に五輪塔の観察を行った。

興昌寺跡を後にして深川の熊野神社へ向かって行く途中、車中から山中代議士の邸宅など見ていると、まもなく熊野神社入口へ到着し下車する。

◇熊野神社、深川院の跡

祭神は、クニトコクチノミコト、イザナギノミコト、イザナミノミコト。

社格は村社、熊野神社は、往昔村山権現と言った。深川の地を昔は村山邑と言ったのである。末吉は、南北朝時代「深川院」といった。院は倉庫の事務をつかさどる役所で、租税としての穀物などを収納していた。その倉庫が熊野神社の境内にあったと伝えられている。

南北朝時代、櫛間（今の串間）領主野辺盛忠が深川院を領知し野辺氏の代官として深川氏がこの地を始めた。熊野神社境内の五輪塔は、深川氏の祖先の墓と言いつたといわれている。

この神社では毎年一月七日夜、勇壮な「鬼追い」の行事が行われている。

神社の参道に仁王像二基がある。これは、神社境内にあった光明寺のもので、この寺は熊野権現の守護神として崇敬されて

いた。廃仏毀釈の時、この仁王像は地中に埋められたということ、損傷が少ない。製作年代は、室町時代と推定される。

熊野神社の背後に馬頭明

王像、大日如来像、獅子像

一体ずつ並んでいる。明王

像の背面には、「宝曆四申

戊九月吉日 奉寄進馬頭明

王一鉢 光明寺十四世法印

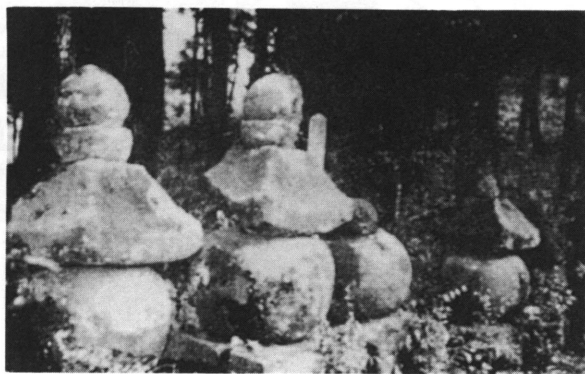
盛音」と刻まれている。

大日如来像の背面には、「宝曆七丁丑六月吉日 寄進大日如

来一鉢 光明寺十四世法印 盛音」とある。

さて、熊野神社を後にして財部町と末吉町の町境の高之峰へ到着。下車して昼食となる。テレビ中継塔の近くの野原に敷物を敷き、皆んな車座的に着座しビールで乾杯後焼酎を酌み交し、思い思いに昔の話し、現代世相など懇談しながら楽しく食事の一時を過ごした。

眺めのすばらしい高之峰を後にして車は、財部町の財部城へ



熊野神社の五輪塔群

着く。場内散策のため大手門で下車する。

◇財部城（龍虎城）跡

室町時代永正四年（一五〇七年）頃から十六年の間に財部六郎正信の築城によるものである。この城は、十二の砦からなり、砦間には縦横に錯綜した空壕が設けられていた。

庄内の乱の時には伊集院甚吉（幸侃の弟）を総大将とし、猿渡肥前守、富山石見守を武将として防備させた。

この龍虎城攻撃には、島津龍伯（義久）自ら本隊を率いて富の隈（国分）を出発し、白鹿峠に陣を敷いて城の西方約三キロの日光神



大手門にて

社へと進撃した。途中、古井原の激戦では島津軍はほとんど全滅の悲運に見舞われた。そして庄内十二外城の中で最後まで落城しなかった。そこで徳川家康は、命令を発し国内相克を戒め伊集院忠貞を降伏させた。こうして乱は治まった。

その後、財部は島津氏の直轄となり松尾城跡を仮屋として地頭政治をしていた。元和元年（一六一五年）「一国一城」の令が布かれ廃城となった。

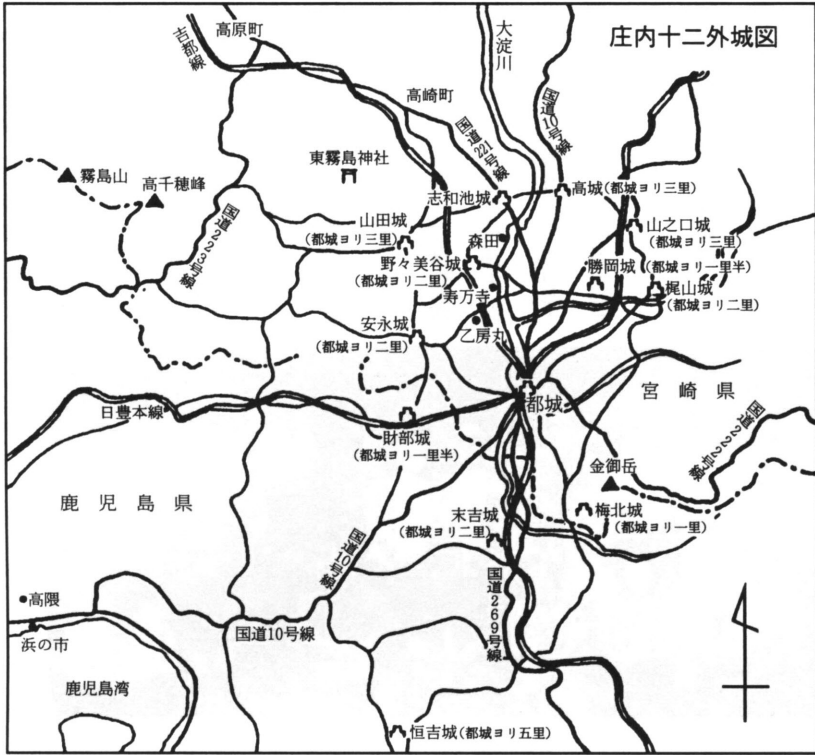
本丸跡への石段登りは、かなり苦労された人もあったようですが無事に城内一巡され、下城後は、立派な大手門をバックに皆さんの写真をとる。

財部城からの帰途、つぎの探訪先の川内の五輪塔へ行き近くの駐車場下車する。

◇川内の五輪塔

ここには、五輪塔、層塔、板碑などがある。

三重層塔は、相良氏九代前統が七代前頼の供養のためのもので、前頼は、弘和元年（一三八一年）税所祐義と踊城を攻撃し、元中三年（一三八六年）三俣院の和田氏と高木氏を討つが、応永元年（一三九四年）に戦死する。五輪塔の型は古く、大きい五輪塔には梵字が刻まれていた。



帰りは、車中から正寿寺跡を見ながら庄内地区公民館へ向う。午後四時、有意義なライフセミナーを無事終え、公民館へ到着。今回の史跡探訪では、庄内十二外城の中でも鹿児島県側の三城のほか、色々な史跡を研修したが、かつては、北郷氏、伊集院氏などが領地としていた場所である。

この地方は、昔から都城市と文化、経済、人的交流、および地勢的にも歴史的にも非常に関係深い地域である。

時、あたかも市町村合併の話題が新聞紙上でも記載されている折、都城市の広報紙「みやこのじょう」七月号によると都城市民の住民意識調査結果、今後市町村合併を検討するとすれば、どの周辺町村との合併を望みますかの問いに

- (1) 北諸県郡五町が五二・一%
- (2) 北諸県郡、末吉町、財部町 二八・七%

このような結果となっていて、将来的には、県境を越えた市町村合併も一考を要する課題だと思ふ次第である。

飢肥・日南方面史跡探訪

東 区 帖 佐 ミ ヤ

十三年度二回目の史跡探訪は、十四年二月十五日飢肥日南方面を選び実施した。二十五名の参加であった。

1、一番目の探訪地―坂元棚田

庄内地区公民館を九時出発。国道二二二号線を一路日南方面へ向かい、酒谷道の駅にさしかかろうとした所から左折し、狭い山道を伝って行く。約3kmほどの奥まった辺りから土手に石積みみの田んぼが少しずつ見られ出した。しばらく行くと棚田らしい光景が広がってきた。道が尽きる辺りで下車し歩いて見学した。



山に囲まれた気持ちのよい空間が広がっている坂元棚田

この棚田は昭和初期に造成され、昭和三十年代にさらに拡張されたという。どの田んぼも整然とした形をし、その石積みみの土手が美しい。「きれーい」「よくこんなに石組みしたものだ」と感嘆の声。

棚田は最近見直され、よく新聞等でも紹介されている。洪水防止とか、水源のかん養、貴重な動植物の生息空間を与えているのだという。きっと先人達の生活の知恵から苦労して生み出されたものに違いない。

丁度冬場なので田圃には何も植えてなかったが、この景観を見るだけでも何かしら心なごむ思いがする。でも一方、現在の減反政策を思う時、この山あいの田圃の現実はどうなんだろう？もう一度、植え込みされた田圃の様子を見たいものだと思いつつここを後にした。

酒谷の道の駅で小休憩し、次は国道沿いにある伊東家累代のお墓に立ち寄った。

2、伊東家のお墓

伊東家が飢肥藩として安定したのは天正十五年（一五八七年）十六代義祐の子祐兵が豊臣秀吉に仕え、九州進攻で戦功をたてて飢肥城を賜り日向に帰ってからのという。

このことから考えると、今から約四百年前からの方々のお墓であろう。当時から代々の殿様のお墓らしいでんとした威風ある墓が六基くらい建ち並び、その横には形の違った大小のお墓がいくつも建ち並んでいる。専門の方にはこの墓石の造りによって時代が分かるといえるが不勉強な私には全然分からない。

特に私の目を引いたのは、一段低い所にひっそりと建てられている小さな小さなお墓。すでに半分はくずれかけ草むらの中に埋まっている。きっとその昔、伊東家に忠誠を尽くし名もなく散っていった方々のお墓だろう。

一同苔むしたお墓に触れたりしながら辺りを散策し、栄華の跡を偲びつつお墓を後にした。



伊東家墓

すでにほとんどの方はこの飢肥の町には何回か足を運んでおいでだろう。簡単に記していく。

この飢肥城は伊東氏の居城として一五八八年開かれている。周囲二・七kmの城内に松尾丸、本丸、中ノ丸を配した平城である。

私たち一行は一番手前の豫章館から拝観。

豫章館―ここは藩主三十二代伊東祐焔すけはらが明治二年知事となり城内から移り住んだ屋敷である。飢肥藩の典型的な武家屋敷という。

大手門―最初に造られたのははっきりしないが、飢肥城が開かれた一五八八年だろう。明治四年に取り壊され、昭和五十三年に復元され現在に至っている。

私たち一行はこの大手門をくぐり、両脇の見上げるばかりの美しい石垣、石塀を眺めて城内へと入っていった。

松尾の丸―藩主の居城。江戸時代初期の書院造りの御殿。昔の殿様の生活のあれこれがかうかうがうかできた。

隣りは歴史資料館もあり、ここには飢肥藩ゆかりの品々が展示保管されている。今回は入館せず。

城内をゆっくり散策。いにしえの情緒に浸りながら城を後にした。

なお、城下

に残されている藩校であった振徳堂や武家屋敷、小村記念会館等、苔むした垣根の道を三々五々連れ立ってゆっくり歩いた。こんな時間をもてたことが妙にうれしく心なごむひんじだっ

た。動中静ありという心境であった。



飢肥城大手門にて

5、日南油津へ

有名な堀川運河を車窓から眺め、古めかしい石橋を渡って油津港へ出た。

堀川運河―一六八三年

着工一六八六

年完成、長さ

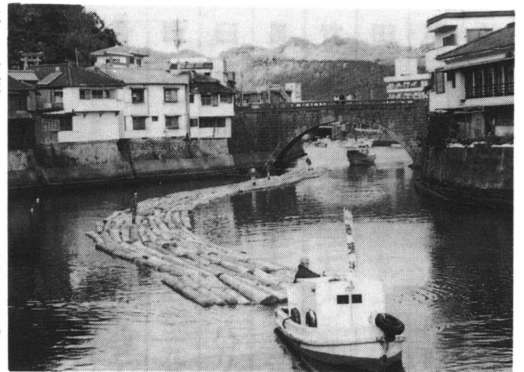
九〇〇mの運

河。飢肥五代

藩主伊東祐実

が主として杉材等の運び出しのため造った。

海に遠いこの都城人には港の景色は興味深い。入港している大小の船を見て回った。近くにある店で買物などして帰路に着いた。



堀川運河

6、帰路

夏になると賑わうキャンプ場蜂の巣溪谷を見て、広瀬ダムで休憩、見学などして無事わが町庄内に帰り着いた。

年二回の昔を語る会の史跡探訪は地区公民館のライフセミナーとして参加させてもらって有意義な一日を過ごすことができました。ありがとうございました。

4、竹香園で昼食

小村寿太郎侯の銅像の建つ丘で弁当を広げ昼食。

編集後記

編集委員

今年の夏もまた猛暑となりました。とくに例年になく早い時期から台風がいくつも日本列島を襲うなどやや異常な夏でもありました。

その影響もあってか、今回は締切りの八月十五日を過ぎても原稿の集まりが思わしくなく若干気を揉むひと齟もありましたが、案ずるより産むが安しの諺どおり、その後多数の原稿が寄せられて、ここに無事十四号をお届けする運びとなつて編集子一同喜びを隠しきれない思いであります。

第十四号にも、「庄内の昔を語る」貴重な史料や論考、加えて皆様の体験談、回想の数々が寄せられて、予期した以上に充実した内容になりました。皆様方の郷土に寄せられる熱い思いをひしひしと感じながら編集に取り組むことでした。(勲)

平成十四年十一月吉日

木幡敏正	坂元徳郎	清水省三	山下謙二郎	帖佐ミヤ
福村修	坂元勲	坂元庸	鮫島亨	長峰良文

平成十四年度 会員名簿

庄内の昔を語る会

地区	氏名	☎
西区	伊地知 義夫	三七二〇九九
〃	菓子野 美和子	三七一一八九一
〃	清水省 三	三七一一八一四
〃	野海 正治	三七一一四八四
〃	津曲 弘美	三七一一四八六
〃	宮之原 重忠	三七一〇三六八
〃	堀 弘子	三七一〇七七一
〃	長峰 良文	三七一三一九九
〃	池田 平八郎	三七一〇六一一
町区	鎌田 学	三七一〇〇八六
〃	山元 一光	三七一二二二六
〃	大河内 隆之	三七一〇五六七
〃	大田 美智子	三七一〇八四三
〃	鮫島 亨	三七一〇一二七
〃	坂元 清景	三七一二二二七
〃	山下 謙一郎	三七一〇八三一

町区	氏名	☎
〃	山元 マス子	三七一二二二六
〃	益田 義美	三七一〇二〇三
〃	山元 芳子	三七一〇六七〇
〃	山下 真一	三七一〇八三一
東区	木幡 敏正	三七一六一五〇
〃	坂元 徳郎	三七一〇三五〇
〃	椋田 泉	三七一〇七七六
〃	新穂 照子	三七一〇一〇九
〃	帖佐 ミヤ	三七一〇〇二一
〃	萩原 忠子	三七一〇二二三
〃	江口 高見	三七一〇一六一
〃	大川原 紀美生	三七一二二一〇
〃	満木 敏公	三七一〇三二八
〃	奥田 正幸	三七一三二七三
〃	黒島 昭典	三七一〇二〇五
〃	坂元 勲	三七一〇七七五
〃	井上 ミツル	三七一〇四二三
〃	東 幸哉	三七一一四九一
〃	園田 満彦	三七一二六四八
今屋	鶴島 善市	三七一二二六八

川崎	前畑 文利	三七一一〇四六
〃	福村 修	三七一三〇四七
〃	田中 義輝	三七一二〇二八
〃	竹之下 康秀	三七一〇二八〇
千草	長友 久二	三七一二三三三
〃	臼杵 徳光	三七一一八五六
〃	鎌田 巖	三七一二三九〇
宮島	今村 勇	三七一二九三六
〃	坂元 庸	三七一一七六二
平田	野村 君雄	三七一〇八九二
〃	和田 盛行	三七一二四四六
乙房	馬籠 英男	三七一二五六五
〃	益留 道夫	三七一三二六七
〃	武田 浩明	三七一一二三八
関之尾	迫田 邦久	三七一一一三六
鷹尾	福村 静徳	二四一二四四〇
都北町	長峯 泰太郎	三八一二〇九六
市民セ	丸目 幸宏	三七一〇五二〇

庄内 第十四号

平成十四年十一月一日 印刷

平成十四年十一月三日 刊行

刊行
編集
庄内の昔を語る会

都城市庄内町庄内地区公民館
電話(〇九八六)三七〇八八八番

印刷
株式会社 文昌堂

都城市東町十八街区一号
電話(〇九八六)三二一一二二番

